332
345

始

자8K91
332-745

人の今昔

開成社書店寄贈本

大正
1. 10. 7
寄贈

題人の今昔

東洋

馬紅葉人

瘦て秋

泣かなき

序

得意といひ失意といひ唯だ眼前の景象にして、成敗を以て直ちに人を論ずべからざるや素より言ふを要せず、左れど興亡百年の世態、榮枯一代の人事、觀じ來れば幾多の教訓を存して自から戒しむるに足るものあり

思ふに『人の今昔』の寓意また茲所にあらんか、著者夙に健筆を以て時事新報の詞壇に立つ、余は異彩ある人物評論として此著を江湖に紹介せんとす

大正元年九月

花井卓藏

自序

秋風都門に入つて寒露鳴蛩に滴る、滿目蕭條の光景啻に獨り眼前の郊墟林丘にのみあらんや、見よ姑蘇台に煙淡ふして咸陽宮に月傾かんとするを、人生榮枯盛衰の變に對しては、誰かまた寥落百年の事、徘徊萬里の憂に禁へざるものぞ

心中の事、眼中の景、之を寫すこと既に難し、況んや意中の人を品隲して其面目を躍如たらしめんとするに於ておや、唯た思ふ、人生の行路海を航するが如く、時に狂瀾怒濤に捲去られて破船の厄に遭遇し、時に逆風猛雨に飜弄せられて思はぬ方面に押流され、浮萍轉蓬、自ら其運命の奇なるに驚いて今昔の感に

打たるゝもの夫れ幾許なるを知らず、而かも失敗は天に在るか利鈍將た人に存るか、斯の如きは今問はんとする處にあらず、要は人さまゞの境遇の變化を寫して其消息を傳へんとするもの即ち此書の成る所以にして、書中現はるゝ人物七十有七、素より著者の筆に百物繚亂として錦を秋の野に敷く趣なしとするも萩、桔梗、薄、苅萱と花いろ〳〵の色香にも似たる其人々の異彩の自から發揮すべきことを認められんには著者の喜焉んぞ限りなからん

大正元年九月先帝の靈柩を
桃山に送り奉りたる後十日

著者　しるす

はしがき

一、この書は本年六月より九月に亘り、時事新報紙上に連載したるものにして讀者の勸誘により、上梓することゝせり

一、今昔の人の多くは現時の社會より遠ざかりたるものにて、其經歷を聞き、近況を探らんこと、なか〳〵に骨の折るゝ業なり書中記する所、或は事實に誤りなきを保せず、謹んで大方の示教を俟つ

一、其日々々の書なぐりにて、素より推敲に

遠なく、また文体も區々にして一ならず今之を添刪するに及ばずして其儘刊行せり、粗漏杜撰の罪は甘んじて之を受くべし、

一、知名の士にして世間に埋沒せるもの焉んぞ限あらん、この書は僅かに其一部を寫せるもの、若し幸に機會を得ば增補する處あるべし

大正元年九月

著者しるす

目次

政界の奇傑……林有造……一
馬城將軍……大井憲太郎……五
夜叉か菩薩か……石川舜台……一〇
明治の大岡越前……堀田正忠……一五
詩狂、酒狂……山田奠南……一九
武士的宣敎者……押川方義……二二
憲法擁護の闘將……高野孟矩……二七
嚶鳴社の秀才……堀口昇……三一
兜町の當り屋……加東德三……三五
志士の名殘……村松愛藏……四〇
ハイカラの先驅……織田純一郎……四四

相馬事件の立物……錦織剛清……四九
薩南の軍使……河野主一郎……五三
政界の偉材……大江卓……五六
城南の賣花翁……河瀬秀治……六〇
北門の開拓者……郡司成忠……六四
旅順の花……山岡熊治……六八
女豪傑……景山英子……七五
令名ありし行政學者……宇川盛三郎……七九
正金銀行創立者……中村道太……八三
異彩ある辯舌家……立川雲平……八六
外交界の花役者……吉田正春……九〇
東京市政の人氣男……中島又五郎……九四

珍重すべき結髮翁……芳野世經……九八
無邊俠禪……渡邊國武……一〇二
紀尾井阪の一名花……陸義猶……一〇六
長脇差の雄……宮部襄……一一〇
敗軍の將……鹽谷方圀……一一五
破壞黨の旗頭……土居光華……一一八
政敎社の俊才……辰巳小次郎……一二三
風流燈台守……草間時福……一二七
北海の大立物……山縣勇三郎……一三一
法曹界の文士……石橋忍月……一三六
女子敎育の恩人……岩本善治……一四〇
今は日本の貴族……朴泳孝……一四四

株金宗の信者……小手川豐次郎……一四七
時計商の巨擘……吉沼又右衛門……一五一
汚れたる宗教家……横井時雄……一五五
官場の逸物……高橋仲次……一五九
自由黨の一名物……石田貫之助……一六二
伊太利學者……曲木如長……一六六
西南叛徒の片われ……井原昂……一六九
早熟せし政論家……細川瀏……一七二
金に渇へし法學士……朝倉外茂鐵……一七六
砂糖王……鈴木藤三郎……一七九
蠣殼町の風雲兒……松村辰次郎……一八三
法官同盟の隊長……長森藤吉郎……一八七

著名の銀行家……種田誠一……一九二
海南の奇人……小西甚之助……一九六
テキサス開拓者……西原清東……二〇〇
對外硬の先驅……安部井盤根……二〇四
貯金宗の傳道者……金森通倫……二〇九
佛門の政治家……管了法……二一三
子爵の町長……加納久宜……二一八
著述界の元老……高橋五郎……二二二
中央派の首領……臼井哲夫……二二五
成功したる書籍商……八尾新助……二二八
破天荒の成金……鈴木久五郎……二三三
弘城の重鎮……菊地九郎……二三七

都々逸宗匠……鶯亭金升……二四〇
香國詩宗……土居通豫……二四七
靜岡事件の首魁……鈴木音高……二五〇
長髪將軍……高梨哲四郎……二五四
議會の一智囊……森本駿……二五八
國益の親玉……岩谷松平……二六二
大阪事件の片影……安東久次郎……二六七
自由黨の鬪將……加藤平四郎……二七一
伯爵團の躍起組……宗重望……二七五
華胄の戰敗者……堀親篤……二八〇
先憂亭後樂……龍野周一郎……二八三
株式界の怪物……横山源太郎……二八六

杜陵の老政客……谷河尙忠……二九〇
法隆寺の一寶物……北畠治房……二九三
大阪財界の新進者……藤本清兵衞……二九八
浪華の老辯護士……小島忠里……三〇二
堂島の大立物……越井彌太郎……三〇六
關西財界の巨人……松本重太郎……三一〇

人の今昔

澤本江南著

林有造

昔者詩人吟ふて曰く『帝を爭ひ王を圖りて勢既に傾く、八千の兵は散ず楚歌の聲烏江是れ渡船なきにあらず、東吳に向て再び兵を起すを耻づ』と所謂英雄未轉の雄圖を抱いて海南に歸臥せる林有造の感懷はまさに此の如きか否か、或は知らず、庭前に花の開き花の落るを見て寵辱に驚かず、天外に雲の卷き雲の舒るに隨うて去留に意なきかを、左あれ聞まほしきは此老政治家の近況なり

▲海南の奇才　板垣退助を產み後藤象次郎を產み又た谷干城、岩崎彌太郎、馬場辰

猪、山地元治、川田小一郎、中江篤介を產みたる土佐は近代に於ける人物の叢淵なり、就中宿毛には小野梓あり、小野義眞あり、大江卓、竹内綱等あり、岩村通俊、高俊の兄弟また是あり、是等多士濟々たる間にありて、一代の逸物として最も盛名を馳せたるものは即ち林有造なり

▲林有造の名　は片岡、星、河野等と共に我憲政の歷史に深甚の印象を有するのみならず、所謂維新功臣の片割として記錄せざるべからず、明治の初年早くも英國に遊び、歸來高知縣大參事、同縣令を經て外務省に入り副島卿に隨うて清國に赴き、また木戸、大久保、井上、板垣等の大阪會議に斡旋したるが如き彼は素より野生の政治家にあらず、明治十年老西郷の一たび叛旗を薩南に擧ぐるや、同志大江卓等と共に一劒相磨して起ち、立志社の健兒を率ひて之に呼應し、海路大阪鎭臺の虛を衝いて京都に迫らんとする陰謀を企て、風雲將さに相會せんとして幸か不幸か、事中道にして破れ、十年の慘風虐雨を北海の獄舍に送れり、山河の破碎、身世の飄搖誰

れかまた無限の恨に堪へざるものぞ、左れど彼が

▲垂天の翼　は帝國議會の壇場に於て萬里の蒼穹を搏てり、思ふに自由黨より憲政黨を經て政友會の創立に至るまでの十數年間の政局は恰かも戰國時代のそれに均しく、波瀾重疊として、曲折常なく時に山縣內閣と提携し、時に進步黨と合同し、時にまた伊藤內閣と握手し最も政治家の手腕を要する難局に際し渠は、星亨の膽力、片岡健吉の細心と相待つて立役者の一人と仰がれ、機智縱橫、隼の如く立廻りて一方の重鎭となり、或は憲政黨內閣には出でゝ逓信大臣となり、政友會內閣にはまた農商務大臣の印綬を帶び、入つては即ち黨の樞機に與りて畫策到らざるなく其神出鬼沒の快腕には當時の政界に殆んど彼と肩を並ぶる者なかりき、而かも兄弟出でゝ國務大臣の椅子に据りたるもの彼を除いて空前の事なりとせば其一身一門の榮譽頗る大なりとせざるべからず、唯だ惜むらくは

▲强弩の末　魯縞を穿つ能はず、左しもに華やかにして且つ波瀾多き半生を送りし

老政治家も第二十四議會を最後として政界を去り、池魚故淵を思ふて海南の草廬に隱栖せし此方、秋風落寞、空しく英雄を老しめ人をして坐ろに秦淮未だ刀兵の劫を經ざれども桃花扇底の人すでに見るべからざることを思はしむるも理なれ、借問す彼が

▲昨今の動靜　や如何、頃日上京して小石川大塚窪町三輪邸に在りと聞き行いて其近狀を質せば、幾歲の風雨當年の意氣を銷磨せるべしと思ひきや、凛々たる氣魄尙ほ眉宇の間に閃めき其輿に乘して語る處、言々風霜を帶び刀鋒戛々、鬼氣人に迫るの趣あり曰く、

東京の選擧はどふぢや、未だ少しは頼もしい處がある樣ぢやないか、今から考へると昔の選擧はえらかつたなあ、丸で命掛で僕等は銃砲や刀の中で選擧された事があつたが、今の樣に金の力で候補に立つやうになつては駄目ぢや、違犯者はビシ〳〵檢擧して一ッ選擧民の覺醒を促さなくては不可ない、今度は甥の結婚の用

事で五六日前土佐から來たが、來月の廿日頃にはまた國へ歸る積りだ、二三年此方は板垣伯に代つて土陽新聞の世話を燒いてをつたが是から又た宿毛の百姓ぢやと、記者曾て彼を宿毛に訪ふて相見ざること既に七年、今や齡七十に垂々とせるも頭髮未だ多く霜を戴かず尙ほ短衣虎を射るの壯志を失はざるは聊か意を强ふすべし聞く政府は機會を見て彼を勅選して貴族院議員となすの議ありと、國家功臣を待つの道、當さに然るべくして其早晩事實となりて現はれんこそ望ましけれ、乞ふ自愛せよ。

大井憲太郎

自由黨の惡戰苦鬪史を讀む毎に思ひ出ざるゝは『急がずば濡れざらまじを旅人の後よりはるゝ野路の村雨』の古歌なり、當時風は蕭々として易水寒く、燕趙悲歌の士花咲く春を待かねて、なよ竹の枝に降つむ雪とも見ん時の政府の抑壓に血湧き肉躍

り慷慨激越、筑を擊つて所在に蹶起し、或は福島事件となり、或は加波山事件となり、或はまた高田に、群馬に、靜岡に、飯田に其他各地に蓆旗飜り爆彈飛び誤つて終に斷頭臺上の露と消えたる人も擧げて數ふべからず、隨つて其慘烈悽愴たる悲劇を思出しては今尙ほ鬼哭啾々の聲耳朶に存して黯然たるものあり、就中最も一世の視聽を聳動したるものを大阪事件となす

▲津の國の浪華の春　は夢なれや、大阪事件も今は早や二十餘年前の昔物語となりぬ、扨も世は苅菰と亂れたる明治十八年、大井憲太郎を旗頭とし自由黨の志士百三十餘名が時の政府に反抗せる餘憤を鷄林の地に洩さんものと一味徒黨の連判を結び陰謀おさ〳〵怠らざる中に、機微端なくも洩れて其審判の大阪重罪裁判所に開かるゝや、法廷に並び立もの彼を始め小林樟雄、新井章吾、稻垣示、山際七司、石塚重平、村野常右衞門、小久保喜七等に加ふるに、萬綠叢中一點の紅を添へたる景山英子あり、星亨、山田泰造、菊地侃二、砂川雄峻氏等また辯護士として是に加はり、

當時法曹界の花形役者たる堀田正忠等檢事となり大疑獄を開き前後五十九回の辯論を闘はしたる事とて天下の人氣は一に浪華の地に集まり、人口嘖々盛んに是を唱道し、殊に大井馬城の名は車夫傖卒の間にも喧傳せられて一代の景仰を博せり

▲左る程に　是や昨日の玉敷の庭、今は八重葎いぶせき淺茅ケ原となりぬる世の習の是非なきも、昔を今に較べて馬城の身に及ばゞ、誰かまた名花凋落雨中に老ふの感に禁へざらん、偶ま憲法發布の大赦に依り出獄して自由の身となり議會開設の春を迎へしも彼が身邊は常に秋風落寞として、一たびは辛うじて代議士に當選せしも二たび鹿を中原に爭うて破れ、爾來轗軻不遇、江湖に落魄してまた人の馬城の名を口にするものなし。寥落百年の事、徘徊萬里の憂、知らず

▲渠が今日の感想　や如何に、頃日其詫住居とせる牛込箪笥町の僑居を訪問すれば門標の『東京法政事務所』といふは可なり大なるも家の造り是が當年世間を驚倒したる政界の大立物の家かと怪しまるゝ程いぶせく出迎ふる主人公は打見たる處、年

の頃六十路の坂を越し鬢髪共に白くして腮に髯なく宛然村夫子の姿なるも、其の語る言の葉は流石昔し取りし杵柄なり、理義明晰、音調爽快諄々として說き出す談話の一節を叙すれば

朝鮮事件なんて今更聞かれては困りますなあ、今から白狀すると朝鮮其者は吾々の目的では無つたのです、つまり朝鮮との事端を滋くして我政府を困らしてやるといふ一の手段に外なかつたのです、彼の時朝鮮を日本のものにしておいたなら日清、日露の兩戰役も遣らずに濟んだかも分らないですが、併し此兩戰役の有つた爲に日本の實力が世界に認められたのですから實に世間の事は何時どうして良いものか分らないものです

私も全然政界を忘れた譯ではありません、今度の選擧にも出やうと思つて多少用意はしたのですが、今日の樣に金次第で左右が出來るといふ事になつては吾々貧乏人は到底齒が立たぬと思つたし、また期日が切迫して思ひ立つて最早運動の餘

日が無かつたから廢したのですが、今度藏原君や古島君が當選したのを見ると東京市の選擧界も萬更捨てたものでないから次の選擧には出馬したいと思つてをるのです

選擧界の弊風は實にひどいものですなあ、候補者が自己の政見を發表するのは良いですが、夫れ以上金錢を用ふると、戸別訪問をするとは選擧人の意思を强請する點に於て大差はないのです、又た選擧といふ事は一方から見れば權利だが他方面から言ふと一の義務であるから棄權を許さぬ事に法律を改めねばならぬと思つてをるのです、是等の矯正に就ては政府の力のみでは不十分だから、私の考では板垣、大隈、澁澤抔いふ連中で一ッ選擧人の團體を造り當局者と相呼應して着々刷新を計りたいと思つてをるのです

と、談論風發尙未だ飛躍の希望を失はざるは其形骸の振はざるに比して馬上顧盼の勇を太とすべし、左れど當年渠と政界に駢馳したる片岡健吉や、星亨や、河野廣中や

乃至松田正久、杉田定一や曾ては衆議院議長となり、國務大臣となりて一身の榮譽を極めたる中に於て獨り空しく窮巷に老いて孤影茫然、蹉跎落魄の身の運命に嘶つ渠の感慨や夫れ幾許ぞ、又た知らず蕭々たる風雨の夜彼が夢魂何れの邊にか迷ふ、ア、月やあらぬ春や昔の花ならぬ實に定めなきは世の習なりけり

石川舜台

菩薩か夜叉か、はた眞人か僞人か、石川舜台は兎に角明治の一怪物である、彼が北陸から乘込んで曾て東本願寺の天下を取つた手際は恰かも木曾義仲が鐵騎礪波の嶮を破つて京都に入つた面影があつた

▲彼は金澤の產　明治五年法主光瑩師を擁して成島柳北等と共に洋行し、歸來渥美契緣、篠原順明等と三すくみの姿にて對立し、野心滿々あは良くば渥美に取て代て內局を我物にせんと種々に劃策をしたが、而かも容易に其志を成す能はざるを看

取して、十八年頃鄕里に歸り私塾を開いて盛んに當時流行の民權論を鼓吹すると共に乾兒の養成に努め他日の機會を狙つて居た

▲時は二十九年の暮　渥美が清澤滿之一派の所謂白川黨の爲に彈劾さるゝや、彼は時こそ來れと風雲に鞭ちて上洛し、翌年一月多年の宿望を達して敎權を握り一躍して旭將軍となつたが、其疾風迅雷耳を掩ふに遑あらざる敏活なる行動は、知らず平氏ならぬ當の敵たる渥美一派をして『圖らざりき今日復た白旗を見んとは』との驚嘆を發せしめたりや、茲に於て彼は縱橫自在に其辣腕を揮ひ或は眞宗大學を東京に設くるが如き、或は數十萬圓を投じて支那布敎を企て上海に宏大なる別院を設くるが如き、或は又巢鴨敎誨師問題を議會に提出して花を咲せたるが如き、善かれ惡かれ其活動見るべきものがあつたが蛟龍雨を得た彼は尙ほ宗敎法案に依りて

▲最後の飛躍　を試みんとした、蓋し此の法案は我國に未だ宗敎に關する法律のないのを幸ひ、佛敎を國家の公認敎となし、是に依り耶蘇敎を驅逐せんとするもので

あつて彼は其主唱者となつて政府に迫り第十四議會に提出せしめた、當時國論紛々たる中に彼は盛んに黄白を散じて猛烈なる運動を爲し、更に近角常觀等をして政敎時報を發刊せしめ又た佛敎國民大會を開いて奮鬪した抔の腕前は一時世人を驚倒せしめたるものであつた

▲左れど時勢は彼の志を成さしむる程に盲目でなかつた、彼は見事に此運動に於て失敗せるのみならず、之がため左なきだに悲運に傾ける大谷派内閣の財政をして益々紊亂に陷らしめたる爲め、其多き敵より攻擊の的になつたので終に其地位を保ち兼ね、即ち隱退するの已むを得ざることゝなつた、斯くて電光の如く世に現はれたる彼の石火の如く世より葬られたるには盛者必衰の理を眼前に見る心地して御手前ものゝ人生無常の感殊に深からざるを得ない

▲羹に懲りて膾を吹く　宗敎法案の失敗に懲りてか、但しは法主の性格其者に依れるか、此時からして從來進取的の地位に在りし東本願寺は漸次保守的傾向を帶び來

り之を近來生氣勃々たる西本願寺に比して落寞頗る振ざるが如く、殊に近く内務省の計畫せし宗敎利用に對して强硬なる反對を試みたる抔、宗敎の權威を重んずる精神なりと云はゞ言ひ得るが、左りとは亦た餘りに頑冥なる態度なりと評することも出來るだろふ、此點から見ると舞台去りてより東本願寺は漸く活氣を失ふて小さく見へ出したと評するも敢て誤りでない

▲春風秋雨　十年の歲月は如何に彼の境遇に變化を與へたのであろふか、彼が本願寺を退くや鄕里越中石動なる道林寺内に閑居所を建てゝ之に隱栖する事となつたが其建築の立派なる事は俗人の目を驚かす許りで土地では是を櫻御殿と稱しておる、此時からして彼は僧籍を脫し昨年大遠忌の際村上專精、佐治實然なぞは元の坊主に復つたけれど彼のみは最早活躍する野心のない爲か、但は法主の勘當の未だ解けぬ爲めか、依然として鄕里に頑張つて近來は大理石の山仕事に熱中して貨殖の道に汲々としてをるが、士族の商法ならぬ珠數繰つた手には算盤はどふも勘定が合はぬと

見え、今では石よりも重き十五六萬圓の借金を背負つて苦んでをるさふだ、此頃彼が突然京都に姿を現はしたのを見て、風聲鶴唳、或は連枝内閣を倒さんが爲に來たのではあるまいかと恐々してをる者もあるさうだが、彼の知人は之を否定して借金の始末に多年手に入れてゐた骨董を賣拂ひに來たのでなければ、大理石山の增資運動に遣て來たのであらうと辯解してをる

▲●●●彼れ當年　取つて七十三歳、餘程老境には入つて居るが未だ中々〳〵覇氣は失せない現に昨年の春頃から佛蘭西語の稽古中だといふ、以て彼が精力の非凡である事が解かる、殊に衰へたりとて尙ほ所在に有力なる子分があつて再び彼を擔いで旗上げをせんとの希望を抱けるものも尠からずと聞けば、彼また宿昔を夢んで老後の思出に城山の討死を企てぬとも限らないと云ふ者がある、兎に角彼の未來は尙ほ未知數であるとは亦た偉い哉

堀田正忠

『責らるゝが勤の代りお前方も精出してお責なさるが身のお勤め勤といふ字に二つはない』といふ堀川御所の舞臺面を大阪重罪裁判所に變へて、若し阿古屋を大井馬城とせば差むき重忠の役割は其名も似通ふ堀田正忠ならんか

▲●●●●●●大阪事件に依り　て馬城の盛名を博したると共に其檢察官となりて當の被告人は元より星、山田氏等當代第一流の辯護士を手玉に取りて懸河流るゝが如き論告を爲し明治の大岡越前守を髣髴せしめたる堀田の面目は今尙ほ躍如たるものあり、獨り大阪事件と云はず、是より先き河野盤州を巨魁とせる福島事件の審判が高等法院に開かるゝや彼は僅かに二十五六歳の身を以て特に擢でられて檢事となり、其手腕の凡庸ならざるを認めらるゝに及んで、更に大阪の獄を決すべく使命を帶びて西下せり、當時彼の辯論は沈痛明快、此紛糾極まりなき事件の眞相を檢擧摘發して恰かも

巨燭暗夜を射るが如く其舌端に觸れては百鬼慴伏するの慨ありしなり

▲禍福は綯へる繩　の如く馬城の急轉直下して市井に葬らるゝと共に彼も亦公人としての立場を去りて江湖に沈淪し小篠の上の玉霰、音もさだかに聞へずなりぬるに訝しく思ひ居たる折柄、此程彼が鍛冶橋外、韓海漁業株式會社に在りといふを耳にし行いて訪づれたるに、紺背廣の洋服に扮裝瀟洒として極めて愛嬌よく打語らるゝ處、是が曾ては閻魔の廳に在りし代官殿とは思ねど、其珠を轉がすにさも似たる流暢なる話の節々は何處となく昔の面影の偲ばれざるにあらず、彼は記者の問へるに對し

ヤア今から考へると假令ひ職務とは言ひながら實に氣の毒な事をしましたよ、一體福島事件抔は今日から見ると國事犯とは言へないのだが、マア理詰めで國事犯にしたやうなものです、併し其方が河野君等の面目でしたろう、當時の被告人や裁判官、辯護士の中でもモウ大半は隔世の人となつたのですが、彼の田母野秀顯

氏抔は中々活氣のあつた人物で早く獄中に死んだのは惜しいものです、どふも餘り元氣の旺盛な人は入獄すると急に倒れる事がありますよ、其當時私共は國賊か何かの如くに見做され裁判中、恐嚇的の手紙がズン〳〵舞込んだり私の門前を高聲で凄い文句を言つて通つたり、隨分自由黨の壯士連中から迫害されたりしたのですけれど、何分其時分は私も血氣盛んな二十五六位の歳でしたから、何糞と思つて脅迫されればさるゝ丈け妙な敵愾心が起つて今から思ふと隨分感情に馳せた論告をしました、其當時此裁判の人氣と云ふものは太したもので傍聽人は夜中の一時二時頃から裁判所の門に詰掛け、時々煮賣屋が出たといふ騷ぎでした、大阪事件も是と同樣大變な人氣でした、不相變脅迫はされたのですが東京程には甚しくはなかつたのです、ナニ大井君が朝鮮其者は本來の目的でなかつたと話をしましたつて、私共も裁判中變だ〳〵と思つた事が度々あつたのですが成程夫が本統でしたらふ、而して今から考へても可笑のは其時押收した爆烈彈といふのが鳩麥

飴の罐へ入れてあつたのを試驗しましたが少しも爆發をしなかつたのです、彼では迚も人は殺されなかつたのでせう

大井君の近況は實に氣の毒で私も蔭ながら同君の成功を祈つて居ります、近い内に一度逢つて色々話をしてみたいと思つております、私も官界の情弊に省みる處があつて大阪事件の翌年辭職して實業方面に關係し、一時大隈伯抔からの後援を受けて大阪米穀取引所に入つて松谷天一坊等の向ふを張つて同所の改革を遣つたのですが、今は當會社の安藤社長が知事になつた後を引受けて經營をしておるのです、

と、彼は當年の記憶を喚起して今昔の感に堪へざるものゝ如し、夫れ節物風光相待たず、桑田碧海須臾に改まる浮世の移り變りは妙じくも亦た奇しき限りにて、古人復た洛城の東に無く今人還た落花の風に對すと歌ひたる人の言の葉も實に理なり遮莫彼は未だ過去の人にあらず、今後の活動また大に見るべきものあらん

山田奠南

語に曰く詩狂は古今を空うし、酒狂は天地を空うすと、所謂離騷を熟讀して濁酒を痛飲するてふ山田奠南は洵に一代の奇人なりとすべし

▲薄倖の身　思ふに壺中の天地は乾坤の外にして夢裡の身名は旦暮の間にあり、彼が今功名を擲却して白雲流水に其行藏を委せるは即ち解脱の行に入れるものなりと云はゞ言はんも、世路險惡、其傲骨を容るゝの餘地なく多年漂萍また轉蓬、常に窮途に泣いて滿抗魄髒の氣僅かに醇醪を借り是を漏らすことを思はゞ、誰か彼が薄倖の身を憐れまざらん

▲贅六中の非贅六　彼は元と大阪の人、有賀長雄と共に上方贅六には稀らしき骨のある代物なり、明治十五年有賀をはじめ三崎龜之助、土方寧、砂川雄峻、岡山兼吉、高田早苗、天野爲之、山田一郎等と同時に大學を出でしが、其未だ赤門を潛る頃よ

りして早くも當時の政論界に加はり同志の士と鷗渡會なるものを組織し縱論橫議、可なりの氣焰を吐きたるものなりしに、彼が大學を卒業したる頃は恰かも大隈伯が野に下りて改進黨を組織したる時なれば直ちに之に投じて其奇扮矯激なる議論に世を驚かしたり、その增島六一郎、菊地武夫等と共に英吉利法律學校（今の中央大學）を組織したるも其頃なりと記憶す

▲紅情綠意の人　後彼は暫らく節を屈して裁判官となりしも、其政治界に飛躍せんとする志は須臾も失せざるを以て、明治二十八九年頃官を辭して數寄屋町に辯護士事務所を開くや其門下には濟々たる名士あり、彼の門戸大に張ると共に其風流の名は新柳二橋の間にも盛んに歌はれ紅情綠意また銷魂の種となれるもの尠からず

▲政界の飛躍　二十年九月彼は衆議院書記官長に任ぜられしも直ちに辭職し、超えて三十一年の總選擧には東京市より打つて出で蛟龍始めて雲を得て議會の壇上に立てり、思ふに第十二議會よりして第十六議會に至る彼が代議士となれる期間は、政

界の波瀾頗る澎湃を極め、自由進步兩黨の合同、山縣伊藤兩內閣の起仆、政友會の樹立等頗る多事なる間に在て彼は大隈伯の幕賓として其得意の手腕を揮ひ、三十一年七月板隈內閣の組織さるゝに及び、大東法相の下に次官の椅子に就しも、直ちに之を去り三十五年議會より江湖に放浪の身となりてよりは、また酒に隱れ詩に隱れ一時麴町の區政に干與して區會議長たりしも轗軻不遇また昔日の奠南にあらず

▲眼前榮枯の變　日露戰役後、講和條約の屈辱天下に叫ばらるゝや、彼は猛然奮し て蹶起し、彼の日比谷公園國民大會の獄に坐して河野盤州等と共に其盛名を謳はれたること世人の記憶に新なる處なるも、而かも此事件は彼に取りては最後の飛躍にして是よりして彼の身邊蹉跎艱難を極め、蕭々たる風雨の夜其夢を驚かして復た愁を添へたるもの夫れ幾度ぞ、彼は今辯護士をも罷め世間の交遊にも遠かりて牛込河田町十二番地に蟄居し閑詠自適、自から酒ありて樽に盈つるを樂しむものゝ如し、思に富貴功名は眼前の浮雲に似たりとはいへ、疎狂徒らに時と違ひて、洒落でもな

く風雅でもなく空しく市井の間に老ゆるを見ては、今昔の感今更の如く新ならざるを得ず

▲才子薄命の恨　彼は流石に上方育ちなり一たび其人に接すれば眉目秀麗役者にでもせまほしきも、一たび其思想の文となり、詩となり、或は辯舌となりて現はるゝや、熱血迸るが如く慷慨淋漓、壯士易水を渡つて秋風肌に寒き慨あり、彼が多血多涙の性格は今日の名を成さしむる所以たると共に、また今日の淪落を成さしむる所以にして、彼果して世に背けるか將た世終に彼に背けるか、开は知る所にあらざるも、彼は自から才子薄命の恨を購うて醉生夢死に終るものにあらず、乞ふ目を刮して今後其風雲に會するの日を見ん、彼れ本年五十五歳、夫人は岡松甕谷の女にして博士參太郎は其義弟なり

押川方義

行路難！行路難！人間一生の行路には危巖突兀たる山もあれば狂瀾怒濤を捲く海もある、滴瀝地を打つ淫雨、攸閃天を裂く迅雷、扨は嵐吹く夜の色、霧立籠る朝の景と日毎に變る氣象の裡を辿る間には躓く者もある溺るゝ者もある、行倒るゝ者、踏迷ふ者、日暮れて道遠きを歎く者、行暮れて木の下影を宿とする者、人さまゞの身の成行である

▲殉教者の風慨　押川方義も亦行路難を歌つておる一人であろふ、失敗か墮落か、彼が基督教から一轉して實業界に入り、今は山師、彼れ是れ屋かとまで言はるゝに至つた徑路に就ては之を嘲けるよりか寧ろ深く憐れむべきものがある、今茲に彼の經歴の一端を記して見たい、彼は元と伊豫松山城下に生れた者で明治初年藩の貢進生となつて東京に上り勉強しておる内に、當時横濱にて有名なるブラオンに就て英學の稽古を始めたのが抑も彼が信仰の道に入る發端であつた、身は武士で加かも藩から學費を貰つておりながら降るアメリカに袖を濡らして切支丹邪宗に入つたとい

ふので國へ歸つてから種々の迫害を受けたのを切拔けて最初に道を傳ふべく越後に赴いたが、まだ時勢が時勢ゆえ此所でも迫害に迫害を受け、甚しきは暗討を喰はされ彼の爲に身代りになつて兇刃に斃れた者もあつたといふ事だ、當時の彼は志氣凛烈、古の殉教表者の風慨があつた

▲明治の伊達政宗　其後彼は仙臺に於て自己の立脚地を定め西、同志社と相對して青葉城下に東北學院を創立し奥羽地方に精神的の王國を打建てんとした勢は、宛ら伊達政宗が五十四郡の治を布いた其面影にも似て素晴らしいものであつた、當時此地には知事として松平正直あり師團長として佐久間左馬太、旅團長として寺内正毅なぞいふ歴々の顔觸があつたけれど孰れも彼の人格に對しては多大の敬意を拂つて押川といへば知事以上、師團長以上に民心の歸向を得たものだ、次で彼は松村介石等を指導して山形市に山形英學校をも創立したので兩羽三陸の青年にして氣慨のある者は多く彼の門下に集まつたものだ

▲武士的基督教　彼は植村正久、井深梶之助と共に日本基督教會に於ける三大明星であつた、素より學殖の富贍なるに於ては植村に及ばず、資性の篤實なる點にては井深を推ねばならぬが、其氣慨に富み機略に長じた上に於ては彼の右に出づるものはない、彼の信ずるのは武士的基督教であつた、神の道に大和魂を加味したものであつた、故に彼の演壇に立つや、舌端時に風霜を挾み、時に鐵火燃ふるが如き熾烈の氣を帶でおつたので之を聞くものは血湧き肉踊らざるを得なかつた、當時彼の演説の人氣を博した事は今の海老名抔の迚も足下へ寄りつけるものでなかつた

▲一攫千金の夢　恨むらくは其縱横の機略が偶ま彼の半生を誤る基となつた、彼は日清戰役後、海外教育會を起して朝鮮に一仕事を試みんと東京に來り伊藤公を動かし、桂公を説いて其資金を募らんがため幾多の富豪に接近してから彼の心機は忽にして一轉し『金持に碌な人物はない、彼樣な人物でさへ金が出來る位なら已が一ッ遣つて見たなら數十萬圓の金は立どころに出來るに相違ない、ヨシ是から自分で

金を拵らへて自分の金で仕事をして見せる』といふ氣になつたと共に、其性格はガラリと變つて是から一攫千金を夢んで種々の事業に手を出した

▲**乾坤一擲の壯圖**　北清事變に紛れて北京で所謂火事場泥坊も遣つて見た、朝鮮に押渡り甘く國王を取込んで利權獲得の證文を懷にして歸つても見た、某國に兵器を賣込まうともした、伊藤、桂、大隈、岡部、津輕等の諸公を掌上に飜弄して乾坤一擲の壯圖を試みやうともした、競馬も遣つた兜町へも顏を出した、其間には、隨分危ふき綱渡をして人をして眉を顰めしむるやうな事をもしたが、不幸にも爲す事する事片ッ端から失敗して一つも山は當らず十年一日の如く唯だ齷齪するばかりで未だ何物をも獲み得ず、今は大森立會川の邊りに落魄不遇の日月を送つてをる

▲**日暮れて道遠し**　極端から極端に走つた者に彼のやうなのは珍らしい、併し世間では今彼を彼れ是れ屋とか山師とかいふが、一面から見ると彼は穢なく儲けて清く費ふといふ精神で其爲す處に感服しない點はあつても其奥底に潜める良心の閃めきは確かに認めらるゝ處がある、而して其人に接すれば假令窮境に處しながら、氣焰萬丈、また其人格に親しむべく敬ふ點が存しておらぬでもない、彼もモウ今は日暮れて道遠きを嘆ずる一人ではあるが、どうかモ一度復活さして思ひ切つた事を遣してみたいものだ

高野孟矩

人間世渡りの秘訣は骨拔鰌になるに限る、生じつか自分の意地を張つて見たり、人の機嫌も構はず思ひ放題の氣焰を吐散らす樣な事をしては忽ち飯の喰外れになるに極つてをる、況して情弊纏綿し醜氣鼻を掩ふべき官海に於ては何事も御無理御尤で頭さへペコ〳〵下げて居れば鰻上りの昇進は屹と請合、此所に道理を嚙み分けないで物に澁滯し一寸骨を出して見た揚句に今日の窮境を招いだ高野孟矩は世渡りの術を知らぬと云ふものだ

▲青雲の人　何しろ高野と言へば一時花を咲かした人氣役者であつた、併し堅炭の火は附たら消ないが線香花火パッと燃えてパッと無くなつてしまうと彼を其線香花火に譬へてはチト失禮だが、兎に角彼の半生の歴史の裡にも榮枯盛衰の理は現はれて沙羅双樹の花の色に轉た無常を感ぜざるを得ないものがある、彼は元と磐城の人、年壯にして時の司法卿大木喬任の家に寓し、其指導に依つて明治十三年檢事となり夫から大阪、松江、佐賀、廣島、東京の各地方裁判所又は控訴院に歴任し日清戰爭の際には新潟地方裁判所長となつたが、臺灣占領と共に芳川法相の推薦に依つて一躍して民政局の司法部長となり、次で高等法院長に轉じたのが抑も騒動の種となつた

▲違憲の聲　是からが愈々彼の晴の舞臺となる、時は明治三十年七月土匪處罰問題で水野民政長官と意見の衝突をしたのが基で乃木總督から非職の辭令を突附られたのを彼は憤然として之に反抗し臺灣にも憲法は行はれて居る、之を無視し本人の意

志に背いて非職を命ずるは違憲である、縱令ひ吾は一身を犧牲としても憲法擁護の任に當らんと一篇の抗議書を内閣に出して極力之を抗爭すると共に自から臺灣に歸つて高等法院の椅子にドカと座し、挺でも動かぬとばかり頑張つてをる處を警官のために無理往生に拉し去られた、時に彼の口吟に曰く『憲章詔條日星の若し、炮碎き難く劒刀釘となし難し、四肢切る可し頭斷つ可し、一片の丹心霹靂に激す』と以て其意氣の壯烈なるを知るべしである

▲議會の花　茲に於て彼は東京に歸つて違憲問題を絶叫すると天下之に呼應して盛んに其氣勢を昂げ、果ては議會の問題となり、第十一議會から十四議會に亘つて或は質問書となり、或は建議案となり、或は又た谷干城子等の上奏案となつて此問題の益々火の手が強くなると共に高野孟矩の名は車夫馬丁の間にも喧傳されて實に素晴らしい人氣を博した

▲志氣蹉跎　六年の惡戰苦闘を經て政府との勝敗決せざるより、彼は終に三十五年

十二月斷然辭表を提出すると共に、宮城縣より打つて出で衆議院議員となり更に大に爭はんとしたが幾歳の風霜に强弩の末は魯縞を穿つ能はざるに至らしめ、是より して彼の志氣は其境遇と共に振はず、辯護士界に實業界に相當の腕を振つて見たものゝ事毎に蹉跎失敗して、終に四十一年に至つて石油會社事件の爲に見苦しい最後を遂げたのは彼の爲に深く憐れむべきことで其末路に對しては誰しも同情の涙をゝめ敢へぬであらう

▲落寞たる秋風　九天の上より九地の下に墜落せし彼は其後如何に其身を處せしや 杳として其消息を耳にせざつたが、過ぐる四月の末本文の記者は仙臺に遊んだ折柄 彼が仙南地方から起つて逐鹿界の人となつてをるのを聞て優曇華のまた春に逢はんことを心私かに祈つて居たが、時利あらずして終に失敗に終つた、此頃彼を千駄ケ谷原宿百九十八番の寓居に訪へば見すぼらしき陋屋に憂愁の狀あり〳〵と認めらるゝも、嬉しきは彼の談論の舊に依つて花を咲せることにて彼は滔々選擧界の腐敗を

論じ、司法權の不振を憤り慷慨淋漓、是から身を以て世の寃抂に泣く人のために盡したいと語つて居た、尙ほ彼の近狀に就て自身に語る所を聞くと彼は今ま例の石油會社の整理に力を盡す傍、仙臺石卷に銀鑛を經營し、又た磐城地方にて炭礦の採掘を始める考で東奔西走して居ると云ふ事だが、どうかうまく之を掘當てゝ彼をして其志を成さしめたいものである、彼本年五十九歳といふが其房々しき長髯にはまだ些しの霜を交へないで若々しき顏の色に尙ほ活動の餘裕あるを示して居る、去るにても世は水に浮ぶ月の影、鏡に映る花の色、有るか無きかの世の樣はうたてくも亦た果敢なきものである

堀口昇

指を屈すれば今は早や二十年前の昔となりぬ、記者曾つ南洋に航するの途次、八丈島を過ぎて芳草離々たる間に浮出秀家の古墳を弔ひ、千載の遺恨酬ゆるに由なく英

雄の末路眞に憐れむべきを思ふて低徊去る能はざりしことあり、因縁深きこの伊豆七島は今堀口昇が罪なくして配所の月を眺むることを聞くに附ても今昔の感一しほ切ならざるを得ず

▲嚶鳴社の秀才　顧みれば明治廿一二年の頃、政黨の我國に勃興するや、所謂野武士肴ちの矯激なる分子は概ね自由黨に赴き、學識才智ある政論家の多くは改進黨に屬し、即ち彼は腕を以て猛進し、是は舌に依りて徐行し兩々並馳して政界に花を咲かせり、而して立志社、愛國社等が自由黨の揺籃たりしが如く改進黨の褓姆たりしは嚶鳴社にして、當時同社には沼間守一あり、島田三郎あり、角田眞平、肥塚龍、青木匡、高梨哲四郎等あり、人才彬々として盛んに言論文章に其光彩を放ちて一代の人氣を吸收せり、本篇の主人公たる堀口昇また嚶鳴社の一秀才として持囃された花役者にして、曾ては朝野新聞社に入りて末廣重恭と相並んで健筆を揮ひ後自から『明治之輿論』なる雜誌を發行して大同團結のために大に氣勢を擧ぐる抔彼の政

界に於ける活動振は頗る見るべきものあるしなり

▲孤島の島守　帝國議會開設せられて第一回の總選擧行はるゝや、彼は其同志たる藤田、青木、高梨等と相並んで逐鹿場に立ち鄕里群馬より出馬したるも不幸にして失敗せしより、此時を以て心機を一轉し政治界を去りて實業界の人となり、即ち二十五年帝國生命保險會社に入りて大阪支店長となり次で本店支配人となり前後幾んど十年間同社に在りて一時は可なり羽振を利かせたるも、或事件のために卅五年頃辭職するの己むを得ざるに至りしが、是よりしてまた彼の身邊頗る振はず一時神戸市水道事務所に奉職し後、日宗生命保險會社に入り大阪支店の監督となりしも同社の瓦解するに及んで又々江湖に淪落して、幾んど生計にも窮する程の逆境に瀕せしより彼の友人は之を憐れみ、數年前東京府の一官吏に周旋し今は伊豆七島の一なる御藏島の地役人といふ島守となり寂しき孤島の月日を送りをれり、地役人といへば昔の戸長の如き判任官のはしくれにて、同じく政界に馳騁したる人々が曾ては大臣

とさへなり續いて磯名を保てるに較べて其零〻、落魄の狀誠に憐れむべしとはいへ浮世の塵緣を空吹く風と他所に見て、小なりと雖も一島の主、自から鎭西八郎を氣取つて磯の松風、浪の音に一竿の風月を樂しむも亦た樂しからずとせんか

▲同情者語る　記者此程角田眞平に會し談偶ま彼に及ぶ角田氏語つて曰く嚶鳴社の連中で今不遇の地に居るのは堀口君と青木匡君だ、青木君は初期の議會に出たが其後志を得ないで今は株引取引所に奉職して一切世間の事には掌はらない、青木君は文筆を以て優り、堀口君は辯舌を以て長じてをつたが、相變らず順境に居たなら今は餘程鳴らしておるだらう、兩君共に惜しい人物だと、記者は更に帝國生命に某重役を訪ひ其語る所を聞く、曰く堀口君は才氣橫溢といつた樣な機敏な人で當社でも中々働いてくれたが、併し昔し政界に名を賣つた時程の覇氣はなくて多少時勢から後れて居た樣であつた、御藏島へは自分一人で往て家族は淡路町邊で人の家に同居しておるそうだ、先頃も島の近況を精しく書いて手紙を寄越したと、人間も世間

から罵らるゝ內はまだしも、憐れまるゝ樣になりては駄目なり

▲寄邊なぎさの捨小舟　『さらでは浮世を渡るよすがをば如何にしつらんかと思ふらん』と其昔し有王丸が父俊寬を尋ねて薩摩潟の浪枕に鬼界ヶ島に渡りたる其心にも較べて今の堀口の境遇に對しては誰しも同情の涙を濺がんも、男子志を得ざれば老西鄕も大島に漁樵を侶とし、大那翁もコルシカの蠻煙瘴雨に朽る身となるものを寄べなぎさの捨小舟、身をうつ波の打まゝに委さんも是非なき業なるべし、彼を波路の末に思ふて玆に今昔の人に加ふることゝせり

加東德三

屍縱橫、血淋漓、白刃交つて寶刀折るゝ悲劇は啻に牡丹臺、九連城のみと言はず日淸戰役後、財界を捲きし戰塵は慘憺また凄愴、殺氣天地に橫溢する趣があつた、敵は賣か買か、味方は强氣か弱氣か、千軍萬馬入り乱れて戰ひ幾多の有象無象バタ

〳〵と斃れて身を鋒鏑に委する中に萬骨枯れて一將の功をなしたものに加東德三郎といふ剛の者があつた

▲日清戰役の當り屋　鈴木久五郎を以て日露戰役に依りて生れた成金とせば、彼は日清戰役の爲に成功した當り屋であつた、而かも歷史は繰返へす極り文句通り兩戰役後に於ける財界の活躍は其趣を一にして我軍の連戰連勝に、軍資金の散布に、また起業熱の勃興に、二十八九年の株式界の景氣と云ふものは素晴らしいもので、二十七年の八月に東株百八十九圓、郵船株六十二圓といふドン底に落ちたものが、二十九年の四月になつて六百五十八圓に百二十四圓といふ無類突飛の暴騰をなし、新たに投下されたる資本金また十二億圓といふに達したといふ現象は、恰かも日露戰役後の四十年一月に東株七百八十圓、郵船株百五十四圓といふ高値を現はし新資本十八億圓に上つたといふそれと好一對の亂調子で株式界始まつて以來破天荒の活躍であつた

▲第一の鈴久　比狂瀾怒濤の間を縱橫無盡に乘切つて虛々實々の秘術を弄し、彼は一攫千金は愚か瞬く間に巨萬の奇利を博して天晴當時の成金と列ね上つた、彼は即ち第一の鈴久であつて、鈴久は取もなほさず第二の加東である、當時彼の成功に對し世人は眼を圓くして驚倒し其後塵を拜したものであつたが、彼は此連戰連勝の勢に乘じて百三十二銀行及び房總、金邊其他の鐵道會社を經營して自から社長となり又東京商業會議所の議員ともなつて四方八方に其快腕を揮ひ兜町の一仲買忽にして實業家の大立物と仰がれ全盛を極たが、端なくも寄せ來る明治三十年の恐慌の波に浚はれて敢なくも一敗地に塗れ左しもの金城鐵壁も一とたまりもなく崩れて奈落の底に落ちてしまつた、春風は賞するに堪へ又た恨むに堪ふ、纔かに開花を見て又た落花との古人の感慨は今彼の身に偲ばざるを得ない

▲奇しき運命　百三十二、百三十は緣喜の惡い數であらうか、前なるは斯かく彼に敢なき最後を遂げしめ、後なるは關西の豪の者たる松本重太郎に致命傷を與へた、

而かも彼が同じ飛離れた成功をして同じ悲慘な失敗を遂げたことに於て略ぼ鈴久と其運命を均しくしてをるのも何かの因緣であらう、而かも彼は一たび失敗の極には達したものゝ、雀は百まで踊りを忘れず、其後相變らず株屋町に彷徨して捲土重來の夢を見てをるが、曾て受けた創痍はなか〳〵に元の健康に復することを許さず、今は日本橋阪本町に知人と合資とかで湊屋といふ呑屋的の仲買店を開いて奄々たる氣息を保つてゐるとは何と情ない始末ではないか

▲昔の夢　彼はデップリと赤味を帶びた顏に冷たき笑を漏しながら記者の爲に其懷舊談を試む、曰く『私は素と播州の出身で大阪堂島の米屋町で幼い時から遣つたものですが、東京へ來てから株專門です、ソウさ私の株の買占を始めたのは二十四年湖南事件のあつた頃で、當時五十圓拂込の關西鐵道株が二十二三圓と云ふ相場であつたのを買つて大株主になり線路の延長、業務の整理をやつた會社の發展を促がしたのでトウ〳〵其株が六十五圓まで騰つて夫で可なり儲けたのです』と力なげに語り出した

▲池中の蛟龍　彼は更に其談を續けて曰く其當時は經濟界の土臺が小さかつたから、隨つて儲けた金も百五十萬圓位でしたが、夫にしても其時の百五十萬圓は今の金にしたら大したものでせう、失敗の基は鐵道會社の經營でしたが、私ども黑人の遣り方は鈴久みたやうな素人のとは全く趣を異にして比較的堅實でした、併し奇利は彼の方が獲らるゝでせう、ナニ再擧の計！夫は無論期してゐるが、株で百萬圓二百萬圓儲かることは格別六ケ敷い話ではなく、二十圓の元金が二十回だけ倍づゝになつて返つたら百萬圓になるから左程出來にくいことではないのです、明治の初年に黑田伯が『朝鮮は何時でも取れる』と言つて佐田白茅を驚かしたことがあるが、其時に朝鮮が取れるといふことゝ今日百萬圓儲けることゝ何方が容易いと思ふのですかと　長らへば又た此頃や偲ばれて憂しと見し世を今は戀しくも語る彼の心事は愍れなるも、打見たる處彼はまだ五十の坂を越して幾何も過ぎ行かぬやうだから、

雨を失ふの蛟龍も永く池中のものではあるまい。

村松愛藏

一の谷嫩軍記に物の哀れを留めし熊谷直實や、石童丸に短かき袖をしぼらせたる苅萱道心や、扨は嵯峨野の奥の松風に世を忍びし祇王祇女や、是は人生の無常を感じて、たらちねは斯れとてしもうば玉の我が黒髪を切りし世捨人なり、同じく道に入らんには我は汚れたる罪の世より復活して身も靈も神の御手に捧げ世の爲め人の爲めに努力奮鬪せん

▲**飜然として發心**　したる村松愛藏の觀念は思ふに斯の如きものならんか、よし雨過ぎ花散る處白骨紅顔を笑ふの誡めはありとても、今更ながら驚かさるゝ人間の浮沈盛衰なり、昔は自由黨の志士として人に仰がれ、議會の闘將として政界に重きを爲せしものゝ、今は墨染の衣こそ着ざれ世間よりは一概に坊主と言はるゝ宗教界の

人となりて弊裘破帽、大道に説敎する身の境涯とならんとは、變れば變る世の姿にわれ人共に無量の感慨に堪へざらんも、娑婆の名走利奔を餘所に見て獨り眞如の月を眺むる彼の安心立命は寧ろ欽ずべしとせん

▲**村松氏の道に入る**　直接の動機は彼の事件にある事勿論なるも、彼の親族にして名古屋に名高き『鈴木の婆さん』といへる信者あり十數年彼に一冊の聖書を與へたるを彼は始終其身を離さず、先年土耳其地方を旅行せし時も是を携帶せしかど左りとて格別基督敎を信ぜんとする心も起らず過ぎ行く間、偶々彼の事件に依りて縲絏の身となるや、彼は深く其過を悔い其法廷に立ちし時も一人の辯護士だに附せずして自巳の罪狀を有の儘に告白し、潔よく第一審の判決に服し、巢鴨の監獄に在る間端なく靈光に觸れて信仰の人となりしより其出獄の當夜、直ちに銀座敎文館に來り救世軍に關する書籍の有りたけを買集め翌朝我が本營に來りて罪の懺悔を爲したり

▲**左れど當時の**彼は單に信者として此世に處するか、但しは更に進んで道の爲に活

動する人とならんかに就ては未だ決定する所なかりしが、翌春名古屋共進會の開かる、際、同地に歸り一人の鄕友に其の信ずる所を語りしに、其の友曰く君の決心や誠に良し、左れど言ふは易くして行ふは難し、君の熱心能く彼の櫻井某（當時名古屋に於ける有名なる酒狂）の如きものを感化せしむるに足らざれば僕は未だ君の信念に安んずる能はずと、此言を聞きたる彼は自己の信仰を試さんものと、突然無名を以て櫻井に二三冊の書物を送り、續いて來る何日何時に說敎あるを以て來聽すべしとの同じく無名の手紙を送りたるに、櫻井も不思議に思ひつゝ其說敎會に臨み散會後司會者に面會を求めたるより、彼は之を迎へて應對し約一時間半に亘りて諄々と神の道を說きたるに櫻井も始めて往事の總て非なるを知り、悔悟の念を萠し其後自から信者となるのみならず尙ほ其知人をも誘うて敎會の人たるに至らしめしが當時櫻井は無類の大酒家にて其事ありし數日前兩親の許に酒代を强請りに行き痛く叱責せられし上後來の誡めなりとて後手に縛られ井戸端にて水を浴せられたるを遺

恨に思ひ、兩親や警察署及び裁判所に告訴したるも共に採用されざるより此上は自己の力にて制裁を加へやらんと短刀を懷にして機會を狙ふ途端、是を救ひ出したる一事が痛く彼の自信を固くし益々半生を道の爲め捧げんとを決意せるが如し、左れ

▲彼は沈思　熟考九箇月を費したる後漸く士官學校に入り昨年卒業後、特に大尉に任用し約一箇年間京橋の小隊に在りしが此程岡山の小隊長に轉じ近く赴任せり、彼が我が救世軍に在るや上下より非常の信賴を受くるのみならず、其鄕里豐橋附近に於ても依然舊來の名聲を博し、再び代議士に選擧せんことを希望し居れるものゝ如きも彼は今毫も其野心なく一心專念我敎界のために努力せんことを決心し居れり、故に彼は素より政友の人々に面會するも毫も談、政界の事に及ばず唯だ昨年淸國革命動亂の勃發したる際、當年慷慨激越、自由の大義を唱へて革新を叫びたる時の夢を搔亂されたるにや、一言余に其事を語りたるに、余は座に其昔熊谷蓮生坊が讀經

中忽ち陣太鼓の音を耳にしてムラ〳〵と起る覇氣を强て抑へ無我夢中に鐘を叩きたりといふ故事を思出し一種の感想に堪へざりき、开は兎に角彼が一切の煩惱より超脱して救の道に入りしは獨り彼自身の福なるのみならず、我救世軍も此の如き名士を得たるは頗る幸なるを以て、今後大に斯道の爲に活動されんことを期待し居れり尙ほ特に語るべきは彼の細君の彼を助けて道の爲に努力せる事にして彼の新生涯は此細君あるに依りて一層光彩を添へつゝあり』とは是れ山室軍平が記者の爲に語らるゝ處なり、思ふに夫れ

▲世上の塵氣を撥開すれば胸中に火炎氷兢なく、心中の鄙吝を消却すれば眼前時に月到り風來るとか、彼が世の富貴功名を雲煙過眼に附せると、瀆職の醜名を世人の記憶より呼起さしめて再び鹿を逐ふものと其得喪果して孰れぞや

織田純一郎

西南の戰雲收まりて、漸く文學復興の氣運に向ひ明治十六七年の前後、新著述の世に現はれしもの尠からず、曰く矢野龍溪の經國美談、曰く坪内逍遙の當世書生氣質曰く末廣重恭の雪中梅、曰く末松謙澄の谷間の姫百合と其他數へ來れば當時洛陽の紙價を高めたるもの指を屈するに遑なしと雖も、就中飜譯小說に先鞭をつけて一代の人氣を集中したるものは織田純一郎の花柳春話なり

▲ハイカラの元祖　彼は小說家として盛名ありしのみならず、ハイカラ輸入の先驅者として頗る才名を博したるこゝ素より松本君平、望月小太郎等の足元に寄附けるべきものにあらざりし、彼の語る處を聞けば、彼は元京都三條家の家中に生れ、明治二年湯島聖堂の留學生として英國に遊び、ケンブリッチ大學を卒へて明治十一年歸朝せしが、前後十年の倫敦生活は當時漢學一方にて頭を固めたる青書生を大のハイカラに化し、其東京に歸るや玉突を奬勵し舞踏熱を皷吹し、洋風家屋を建築し、極端なる女權擴張論を主張する抔、其一擧手一投足孰れか世の耳目を聳動せざる

なく而かも彼のリットンのアリス、マルッラバースを飜譯したるといふ花柳春話は益々此才人の才を發揮し、當時織田純一郎と云へば

▲隨一の流行ッ兒　として交際社會に、文藝界に、また花柳の巷に隨分持囃されたるものなり、其後彼は大阪朝日新聞社に入り其艶麗なる筆を揮ひ關西の文壇に覇を稱し、其間新聞事業視察のため歐米各國を漫遊し歸來、村山社長を助けて益々規模の擴張を計り大阪、東京兩朝日新聞が今日を成せるもの彼の努力に待つこと尠しとせず、明治廿四年彼は朝日を退きたる後、陸奥伯に知られ其後援に依り『寸鐵』を發行して當時の論壇に異彩を放ち陰然一敵國の觀を呈せしも、間もなく廢刊の厄に遭遇し、其後再び『社會新聞』を發行し又た同氣倶樂部の創立に與れる抔尚ほ活動を已まざりしも孰れも志を成すに至らず、爾來轗軻不遇といふほどにはあらねども今は昔の榮華の面影もなく浮世の波瀾を餘所に悠々閑日月を根岸芋坂の片ほとりに送れり、知らず彼の胸裏『十年一覺揚州の夢、贏得たり青樓薄倖の名』てふ感ありや

否や

▲すみれ野や　今見し昔なつかしき、彼の近況を傳ふるものは曰く彼は曾て陸奥伯の令嬢を養女(後ち死去す)とせし關係より現在の邸宅は伯より讓受けたる者にして且つ近く古河家の爲に何事か爲して晩年を送るべきたけの報酬を得今は生活上の苦勞なしとは喜ぶべし、過ぐる日記者は彼を訪づれたるに彼は洋行中の奇談や、新聞記者としての經驗なぞ趣味とり〴〵の浮世話の中に

世の成行や年の功に依つて色々思想や嗜好の變るものですなあ、私は今でこそハイカラは大嫌ですが、英國から歸つた當時は無類のハイカラでした、又極端の女權論者が今は女が虚榮心を揮廻すのが癖に障つて此上威張らせては大變だと思つて居るのです、又た書畫抔も昔は大嫌であつたが今は夫を唯一の樂しみとしておるのです、併し人間は一代で良いもので無理に系統を繼續さすと云ふのは自然に背いて居るといふ信念は今にも渝らない、現に私は妻の外家族は無いのです

新聞の事は西洋で見て來た事は其當時日本では企て及ばないで手が附けられなかつたが、夫が今日漸と少しづゝ行はれて來たのです、朝日新聞で大阪と東京の社説を同一のものにするといふのは私の宿論でしたが、時事新報は夫を遣つて居るさうですなあ、併し私は新聞の社説は無用なものだと思つてをるのです、而して新聞に藝妓や娼妓抔の寫眞を麗々しく載せるなんか怪しからん事です、又新聞に記事の間違のあるのは驚くばかりで此間も或一二を爭ふ大新聞が高木正年氏に比較するにミルを以てしミルを盲人にしてあつたが夫は恐らくフォーセットの間違であつたらう、又た是も或大新聞で西南戰爭を明治十八年にしたりして實に噴飯の極です

と、昔を今に較べて語る節々の中々に面白く思はれたり、ア、朝顏の朝の盛り電光の宵のほのめき、人間の榮華如何ばかり長かるべき、彼が全盛の往年を思へば乾坤共に涕涙の感なしとせざるも、左ればとて事なくして雲を見、時あつて几に隱るゝ

今の閑居も亦樂しからずとせんや、天賚頼に此才人に厚かれ

錦織剛清

伊達騷動に加賀騷動、乃至仙石騷動に佐賀の猫騷動と數へ來ればお家騷動は隨分珍らしからねど、明らけく治まる御代となりて世間を騷がしたるものには相馬事件ほど大袈裟なるものはなかるべし、場所は天下晴ての日比谷衆議院の眞向ふ、時は選擧干渉の眞最中なる明治二十五年二月、而して事件の內容は當主誠胤の俄然死去したるを毒殺なりとなし前後十年間に亘れる大疑獄を起したるものにして、是を彩れる人物にはお家騷動に有勝の忠臣あり、奸臣あり、幼君、美人、醫師、僧侶あり、今は時めける後藤新平また是に坐して囹圄の月を眺するに至れる抔、其錯綜紛糾せる局面の眞相は局外者をして容易に是を知るに苦しましむるものありしが、兎にも角にも此事件の中心點となり隨一の立役者として舞臺に現はれしは松前ならぬ錦

織剛清なり

▲忠か奸か　彼は神も佛もなき『闇の世の中』に其主張、立場を辯明せるも、而かも事件の眞相は今尚ほ五里霧中にあつて明白ならず、病死か毒殺か、疑問は未だ解決せられざるも、當時彼が此事件を提げて終に法廷に立つや其當の敵として彼が所謂君側の奸と見做したる青田綱三、志賀直溫は元より宗家の近親たる北條氏恭、織田信敏、淺野長勳、佐竹義理等の面々も關係者として引合に出され、星亨、大井憲太郎、岡村輝彦、菊地武夫、植村俊平等孰れも一流の辯護士原被の間に參加し大審院にては名村泰藏、控訴院にては松岡康毅なぞいふ當代歴々の法官之に掌りて、控訴上告に年を重ね一時都下の新聞紙は此事件にて幾んど持切りたる程の花を咲かしたるも終に全く暗より暗に葬られて、正邪曲直は判別すること能はずして己みたること世人の記憶に尚ほ新なるものあらん

▲曳舟の佗住居　爆裂彈の如くに世間を騒がしたる彼も今は線香煙火の如く消えて

失くなり、榮枯盛衰の變はまた彼の身を襲へり、此頃彼が向島曳舟停車前の附近に詫住居せるを聞き訪づれたるに玄關の衝立には是れ見よがしに戸田忠義より彼に差入たる千五百圓の預り證文、松本順、西五辻安仲等の委任狀なぞ其他彼の事件に關係せる知名の人々の證書を張交ぜあるも可笑しく、床の間にある華山の軸、備前長船の刀劍抔是も本物ならば太したものなるべしと見とるれば、軈て主人公は病後の疲れなりとて其半白の頭を搔きながら頗る無雜作に當時の波瀾曲折を語る其態度元氣なか〳〵本年六十の老人とは見へず、有繋御家騒動の張本人は斯な人物かなと肯かれたり

誠胤公に關することは僕が主張した通りの事實に違ひない、櫻井大透といふ牛込寶泉寺の住職(相馬家の菩提寺)も相馬家のことは知つて居る、東明しげといふ誠胤公の妾も曾ては僕の主張を否認しなかつた、東明は子爵織田信恒の實母で今は青田の妾になつてをるといふ噂だ、何しろ此事件で相馬家は三百萬圓からの運動費

を費つて揉消しをやつたから僕抔は迚も敵はない裁判所が今日といふ今日まで此事件を其儘に擲やつておくのは怪しからぬ

といつた調子の長い談話を聞き最後に『僕は今は書畫や刀劍抔をいじつて暮してをる』とて窮巷に蟄居しながら割合に晏如たる樣を見届け辭して歸へらんとする處を『一寸待つて呉れ給へ君に見せるものがある』とて取出したる一振の銘刀は『是ぞ豐後長圓の作で、今から千餘年の昔源義朝が箱根權現へ奉納したのを曾我の兄弟が之を以て祐經を斬つたといふ由緒あるものだ、其後北條の手から蒲生氏郷に渡つたといふのを轉々して今僕の處に來てをる、何と稀代の逸物ぢやないか、買手があるなら五千圓以上なら賣つても良い君にもコンミッションを遣るから何處かへ世話してくれ給へ』と前口上宜しくあつてサッと拔放ち光芒電閃、今にも眞向より翳さん勢に辟易して匆々に失敬して引下りぬ、因に彼は繪畫に巧みにて一管の彩筆を糊口の具となし居るとは何處までも變つた男なり

河野主一郎

何を怒るか怒り猪の俄かに激せる薩軍も我劍既に折れ我馬斃れて勢全く竭き秋風骨を故郷の山に埋むべく城山に立籠れり、我身一つを打捨てゝ若殿原に報ひんは老西郷の素志なるべきも、曠古の英雄をして空しく鋒鏑の下に斃れしむるは國家の爲に痛惜すべきの至りならずや、如かず耻を忍び垢を包んで降を官軍に乞ひ先生を救はんにはとの議は、端なくも官軍の城山包圍攻擊に先だつ前一日、薩軍の間に唱へられたり

▲城山の軍使　桐野利秋獨り熱心之に反對せしにも拘はらず、邊見十郎太等之を提唱して衆議を纏め即ち其使節として河野主一郎、山野田一輔の兩人を選べり、茲に於て兩人は二十二日(十年九月)鶴嶺神社の堡壘を出で別働第一旅團(高島少將)の守線に至り翌二十三日警吏に護衛されて參軍川村純義の營に導かれ面謁して來意を通

す參軍曰く『投降の事若し都城戰鬪の際ならんには行はれしも今は既に時機を失せり、而かも尙ほ西郷にして言はんと欲する所あらんか速に余の陣に來れ』と因て河野を抑留し山縣有朋の書を齎らさしめて山野田のみを還したるも事茲に及んでは丈夫の面目唯だ城を枕に討死するの外あるべからず、即ち使節の歸らざるに先だち老西郷は既に決心の臍を固め二十四日の曉寒き頃、兩軍の兵火悠ち開かれ哀れ扳山蓋世の英雄も終に岩崎谷の露と消へたり

▲陣中の花　記して茲に至る、記者は曾て山岡中佐を聯想せずんばあらず、縱令敵は露軍にもあれ、官軍にもあれ、河野と山岡とが軍使として其名を著はしたるは即ち一にして、若し今に於て兩人を引合はして互に懷舊談を交換せしめんには限りなき感興に座上花を咲かさんと必せり、又た縱令降を勸むると、降を乞ふとは其趣を異にせるも單騎鞭を揚げて雲霞の如き敵軍に乘入り命を的の折衝は今も昔も變らぬ勇ましき武者振にて共に陣中の花と傳へらるゝこそ道理なれ

▲明治政府に仕ふ　斯くて彼は長崎に於て禁獄十年の刑に處せられ白河關外福島に送られて備さに幽囚の苦を嘗めたり、彼が十四年赦に逢うて出獄せし際は、當時の同盟既に四散し或者は首を函にして賊廷に送られ、或者は魯連となり、張良となりて世態は全く一變せり、茲に於て彼は鄕里に歸り三州社に事を與りしが其後清國に遊びて何事を畫策せんとせしも志を得ず、更に其後帝國水產株式會社を組織して其社長となり事業稍や緒に就かんとせしに、征清の役臺灣の我版圖に歸するや彼は始めて節を明治政府に屈して新領土の支廳長となりて、蠻烟瘴雨の裡に治を布き、三十年更に進んで靑森縣知事に轉じ扶桑第一州の地に良二千石の名を博せしが三十二年冠を挂けて後は鹿兒島城の地に歸りて今に高麗町の舊草廬に老を養ひつゝあり

▲往事夢の如し　彼は弘化三年の生れなりといへば本年六十七歲の高齡を重ねたり其風貌圓顏鳶肩にして身幹甚だ大ならず、性機敏にして名利に淡く今や浮世の榮辱

を餘所に閑日月を送れるも、往事を顧れば茫々として夢の如き想あらん、見よ大隅山の狩くらに眞如の月今尙ほ影淸きも淨光明寺畔英雄の骨既に朽ちて朝々暮々櫻島の煙雨亦た愁ふにあらずや、惜しからぬ命を生延びて曾ては心ならずも周の粟を食める彼の感想や如何に、人さま〳〵の今昔は妙しき限りなり

大江卓

大江卓の名既に浩蕩轄達の趣あり、其人物に萬里渺茫として水光天に接する豪宕卓牢の慨ある素より怪しむに足らず、彼は實に明治の歷史より逸すべからざる一巨人なり

▲人權伸張の本尊　官吏としても謀叛人としても乃至政治家、實業家としても彼は人並を外れたる豪の者なり、彼は素と小野梓、林有造、竹內綱等と共に土佐宿毛より出で、夙に長崎に遊んで伊藤博文、岩崎彌太郎等と尊王論を唱へ、明治元年侍從

鷲尾隆聚の內勅を奉じ潛に兵を率ゐて高野山に赴くや彼は田中光顯、香川敬三、中島信行等と之に隨ひ、次で勅書と錦旗を奉じて紀州に至り之を德川茂承に傳へたることあり、伏見戰爭後內海忠勝と共に神戶の外交事務に從ひ後藤象次郎の大阪府知事となるに及び同府會計官に任じ再び神戶の外交事務に復し一旦辭職の後、上海に遊び明治三年井上馨に用ひられて民部大輔より工部省七等出仕に歷任せしが此間穢多非人の稱を廢するとを太政官に建議して之を實行せしめたるは、彼が人權の伸張に力を盡したる第一步なりき

▲外交上の大氣焰　更に彼が一生の光彩を明治五年の奴隷開放事件に依りて發揮されたり、事は彼が神奈川縣令として其任に在る際なり、南米秘露の濠船マリヤ、ルーズが支那の奴隷二百卅餘名を載せて橫濱に入港するや『麼艙底に在りて逆囚の如く、陰風白日聲啾々、豹狼羊を驅る一に何ぞ急なる、或は其髮を斷ち或は頭を摧く』と彼が其『賣奴行』の歌に言現はせるが如く虐遇到らざるはなきの狀を聞き彼は人道

のため默すべからずと、奮然として起ち紛々たる異議を排し我國權に依り斷然之を釋放したるより茲に端なくも秘露政府と國際問題を惹起し折衝年を重ねて決せず、終に露國皇帝の仲裁を仰ぎ、其結果眞日本に在りとの裁定を得たるは我外交史上に一大氣焰を吐けるものにして之よりして大江の名は益々朝野の間に重きを置るゝに至れり、尙ほ彼が其在職中縣下に於て藝娼妓、年季奉公人等人身賣買に類似せる所業を禁止して範を全國に示せしが如き、事に觸れ折に際して人權の擁護に努めたる功績は特筆大書に値すべきものあり

▲西南の獄　老西鄕の薩南に兵を擧るや、彼が陸奥宗光、林有造等と之に呼應して叛旗を翻へしたる事實は後世史家の傳ふる處にして今茲に繰返へすを要せず、其十一年八月禁獄十年の刑に處せられ將に岩手の監獄に護送されんとするに臨み彼は一詩を賦して陸奥に贈れり曰く北流南竄事匆々、君向羽州吾陸中、一笑乃成十年別、賜環何日醉春風と、杜陵の檻雨彼が幾歲の夢を驚かしたるも明治十七年特典に依り

て假出獄を許されたる後また垂天の翼を打つて起てり

▲九天の上九地の下　後藤伯の大同團結を唱ふるに及び彼は其帷幄に參し雜誌「政論」の社長となりて大に志を伸ばしたるが、明年二十三年帝國議會開かれ第一回總選擧の行はるゝ際、岩手縣民が其自國の監獄に長日月を送りたりといへる宿緣に依り彼を推選して代議士に選びたるは政界の逸話として傳ふべきなり、即ち彼は第一議會に於て豫算委員長に選ばれ、査定案に對する政府との衝突に其手腕を現はせしが、爾來不幸にして政界に志を得ず、去つて實業界に其羽翼を張り東京株式取引所理事長の椅子を贏得ると共に、京釜鐵道創立委員となりて一時財界に覇を稱せしが取引所に於ける惡戰苦鬪に致命傷を負うて一敗また起つ能はざるに至り、是よりして彼は鎌倉に退隱すべく餘儀なくされたり、其後韓國宮內府の顧問となりまた淸國に遊び雲南に遊びたるが如き彼としては屠龍の技試むるに由なく偶ま其餘力を漏したるに過ぎずして素と彼の本志にならざりしや知るべし

▲老伏波の慨　彼は詩文に於て一家をなし今は湘南の地に悠々閑日月を送れるも、捲土重來何れの日か風雲に乘じて起たんことは彼が日夕其念頭を去らざる處にして徒らに髀肉の嘆に堪へざる彼の境遇は寧ろ憐れむべしとせん、若し彼の閲歴人物を以てして順潮に棹したらんには、政界に官界にまた財界に孰れか一方の重鎮として推稱されしものを、其機略に委せ其豪膽に乘じて遣り過したるが却つて身の禍となり、今は空しく奇才傲骨を負うて白屋に老ゆるのしむを得ざるに至れり、往事茫々夢か將た幻か、首を搔いて乾坤共に涕淚に禁へざる虐境より彼を復活せしめて、其最後の舞臺に花を咲さしめんこと獨り記者の祈る處のみにはあらじ、彼れ本年六十六歳、老たりと雖も談論風發、尙ほ伏波將軍の面影の認むべきものあり

河瀨秀治

溪聲、澗聲、竹聲、松聲、山禽の聲、幽壑の聲、芭蕉の雨聲、落葉の聲、皆天地の清籟にして詩腸の皷吹なり、然れども銷魂の聽は常に賣花の聲を以て第一となすべし、と物の本に見へたるも理りにて『花や花は宜しう』と都大路を賣り行く大原女の優しき聲に大宮人の吟懷ために動かされたるもの夫れ幾許ぞ、勿來の關の落花に駒を駐めたる風流や、生田の森の先陣に一枝の梅花をかざしたる餘韻や、實に花に對する優しき人の心は今も昔も變ることなく、人間浮世に望みなくば一生を花守に送らんことも亦た面白かるべし

▲維新の功臣　河瀨秀治が半生の榮達を擲つて今は品川妙華園の花作りとなれるが如きは一寸俗人に眞似の出來ぬ風流の業なり、抑も彼の前身は如何、彼は丹後宮津の藩士にして今の西園寺首相が山陰鎭撫總督といふ嚴めしき役目を承はり薩長の精兵を率ひて宮津藩に向ひし時、恭順、非恭順の議沸騰して歸向する處を知らざる難局に處し、彼は一身を賭して藩論を纒め終に一兵に衂らずして大義名分を明かにせしめたる所謂維新の功臣たり、此時彼は素より花作りにあらず

▲花香草色裡の人　維新後徴士として東京に出で先づ小菅縣令となり次で印幡、入間、群馬、熊谷等の縣令に歴任し明治七年大久保内務卿に知られて勧業寮權頭といふに擧げられ夫より大蔵省大書記官、農商務省商務局長等に轉じ其間歐米地方をも巡遊して殖産興業の上に貢献する處頗る多かりしが明治十四年大隈伯と共に辭職し、是よりして全く志を官界に絶ち米國セントルイスの園藝學校を卒業せる令息のために妙華園を經營し身は草色花香の裡に天然を樂しむことゝなれり、夫れ檀唇日に烘き媚體風を藏むは花の喜なり、暈酣に神斂まり烟色迷離たるは花の愁なり、奇枝檻に困み風に勝えざるが如きは花の夢なり、嫣然として流眄光華の目に溢るゝは花の醒たるなりと、知ず彼は花の喜怒哀樂を解するの境に入れりや否や

▲八面六臂の活動に　妙華園が西洋の草花輸入に就て先驅をなしたることは今更繰返すまでもなし、左れば彼は單に枝を劈り種を植へて能事終れりとなす樂隱居にあ

らず、生來頗ぶる元氣旺盛にして其朝に在ると野に在るとを問はず、何がな實業のために力を致さんものと、同志の人々と共に曩には富士製紙會社を設立して曾ては其社長となり又横濱に同伸會社を設け又其社長として生絲の直輸出を爲せる等彼は拮据經營怠りなく、本年七十四歳の高齢を以て尚ほ日々東京の活舞臺に出て、時に昨今問題となれる富士製紙の内訌に關係し、傍ら上宮教會を組織して聖德太子の遺德喧傳に怠りなく、尚ほ巽畵會に掌はりて日本美術の振興に努むる抔八面六臂縱横に駈廻りて活動せる樣は誠に鑊鑠たるものにして壯者も跳足にて逃出す程なりといふに至つては彼の精力主義も亦驚くべきものにあらずや

▲花の下にて吾死なん　彼が本年三月『維新の際丹後宮津藩の國論一定して趣旨遵奉の實を擧げ爾來諸官に歴任し先年官を退きてよりは實業方面に力を盡し特に明治十年第一回の博覽會を始め勸業の方法に多大の功勞あり』といふ廉を以て特に位二級を進められ從四位に叙せられたることは世人の尚ほ記憶に新なる所ならん、凡

そ知事の古手、局長の成れの果は勅選議員となり或は錦鶏間祗候となり、然らざれば書畫骨董を玩びて世の穀潰しとなるを月並とせるに、彼が獨り此俗氣を離れ思ひ切つて花作りとなり濟まし、尙ほ活動の勇氣を失はざるは當世に珍とすべし、思ふに彼の晩年幾許ぞ、『花の下にて我死なん』との願念は彼が日頃梅謝し桃開く裡に悟達したる處ならんか

郡司成忠

『海中に國を成る我邦人に呑海の氣象なくんば如何で世界に勇を稱するを得ん、地理上の狀態は千古渝らず歷史上の狀態は雲煙去來す』とは、本篇の主人公たる郡司大尉の令弟幸田露伴の物したる文の一節なり、實にや今より廿年の昔大尉がヲコック海の鯨濤を踏破して、海城の寒柝月潮に生ずといひけん千島に遠征を企てたるは、所謂呑海の氣象を發揮したるものにして尠なくも日本に對して其勇を稱するを得ん

▲見よ八百潮の滄溟に藏れたるを、萬里渺茫たる金波銀波を衝いて南極探檢の行はるゝ今日に於て千島探檢の如きは朝飯前の仕事なりと言ふなかれ、前者の壯擧たるは敢て拒む所に非らざるも、是は北門の鎖鑰を固め他日のために綢繆の計を立てんとする國家的事業にして其輕重素より同日の論に非ず、思ふに大尉が北辰直下に無形の銅標を建てし後、十幾年にして日露戰爭に際會し北海の狂瀾怒濤また捲き來りて終に千秋の恨酬ゆるに由なかりし樺太を回復したるもの即ち報効義會が間接に援護を與へし効に依らずとせんや況んや、此戰役中大尉が其部下を率ゐて對岸の勘察加に上陸し半島の占領を企てたること抔また涓埃の力を致したるものあるに於てをや

▲更に思ふ近く第廿八議會を通過せし北洋に於ける臘虎臙脂の捕獲禁止の如き事態其者は外交上の一失敗と目すべきも、英米露等の列强をして是を我邦に要請せしむるに至りたる原因は何ぞや、當時千島は殆んど無人の境にして外國密獵船の

巣窟たりしを報効義會が其根據を茲所に定むるや、啻に外國船を驅逐せしのみならず、更に進んでオコツク海に出獵すると共に內地よりの出漁船を招致して我海上權の强大を致したる結果、即ち列强をして我勢力の畏るべきを認めしめたるに依れりとせば大尉の志は即ち其一半を酬いたるものと謂はざるべからず

▲瓶みれば　今より幾春秋の昔、一隊の短艇が隅田川を出發して北征の途に就きし時の如何に滿都の人士の血を湧かせしことよ、小說家の巨擘を弟とし、音樂界の明星を妹とせる郡司大尉の此壯擧は彼の單騎西比利亞の野を橫斷せし福島中佐と相並んで時代の花と稱せられ世間の人氣を博したること素より今の白瀨中尉の比にあらず、而かも

▲人の噂は七十五日　福島中佐の今は中將となりて時めくに較べて、大尉の名聲は次第に薄らぎ行きて今は報効義會も手に掬する水に宿れる月影の有るか無きかを世に疑はるゝに至りしぞ憾みなれ、記者此程事を以て向島に露伴氏を訪づれたるに氏

は近く愛兒を失ひたりとて床の間の位牌に線香の煙淡く新愁の色を包める中にも茲しき令兄のために懷舊談を試みらる曰く

モウ廿年になりますねえ、何しろ途中で短艇は覆沒する、北洋水產會社は潰れる當時兄の辛酸は實に一ト通りでなかつたのです、併し今日から見ると其苦心經營した事も全然徒爾には終らなかつたのです、無人の占守島が開けて出入の船舶が多くなつた事や、我漁業が露領に盛になつた事や元より報効義會のみの力では無いでせうが、兎に角其氣運を造つた事に就ては多少貢獻した處があると云うても良いでせう、彼の海獸捕獲禁止も義會の事業には打擊ですがマア是だけの事を遣らせるまでに至つたのは全く日本人の勢力の擴充され　結果です

義會の支部は依然築地に在て兄も不相變それに關係して居るのですが、併し海獸禁止のために義會の事業も一段落を告げた譯ですから、是から他に發展の方法を講せねばならないでせう

と骨肉の濕情溢るゝが如く語りて記者のために多忙なる時間を割かる、思ふに大尉が光彩ある過去の前半生は茫として夢の如く逝きしと雖ども、其北海の孤島に新天地を開拓したる功業は永く錄して傳ふべきものあり、知らず其後半生の活動や如何に、大尉は今現に露領水産組合長たり

山岡熊治

花ならば探りても見ん今日の月と喞ちたる俳人の懷や、扨は戀ゆえ心を筑紫琴、誰かは憂を斗爲吟の、糸より細き指先に尋ぬる夫のあるぞとも知らで綿々たる恨を琴の音に漏らしたる美人の想や、目かいの見えぬ盲人の哀れさは昔も今も變らねど、一しほ同情の涙にくるゝは陸軍中佐山岡熊治なり

▲旅順の軍使　として如何に中佐の名が旅順攻圍軍に謳はれしよ、猛將勇卒肉彈となりて難攻不落の堡壘に突擊せし悲劇の中にありては壯烈鬼神を泣かしむる戰物語

に乏しからざるも、中佐が乃木大將の帷幄に在りて縱横の手腕を揮ひ、殊に一たびは勸降使となりてステッセルの陣營に赴き再び開城の際土城子に敵將と樽俎折衝を重ねたる其武勳は實に日露戰役の花として世に謠はれしなり、曩には勝海舟の軍使として靜岡の官軍に遣ひしたる山岡鐵太郎あり、軍使と山岡！何ぞ夫れ因緣深き

▲名譽の盲人　不幸奉天の會戰に於て敵彈の爲に其明を失ひて名譽ある盲人となり昔に變る今の姿、曾ては馬上の雄姿凜々しくも三軍の間に馳驅したる人の、此頃は杖を頼りにトボ〳〵と危ふき足を踏しむる身とならんとは哀れにも亦いじらしき限りなり、殊に記者は中佐と鄕國を同うし、又た往年共に旅順攻圍軍に在りて同じく生死の巷に出入したる因緣淺からざる事として今日中佐の薄倖に對しては一倍の同情に禁へざるものなり

▲盲人の友　此頃中佐を小石川指ケ谷町八十二番地なる日本盲人協會に訪ふ、同協會は中佐が失明後盲人敎育の急務なるを感じ同一の境遇にある、入野春馬（砲兵

大尉）、柴内魁三（歩兵大尉）、高岡清二（法學士）、桑田鶴吉（商學士）、森恒太郎（愛媛縣の模範村長）等と共に設立せるものにして、記者の訪問せし時は中佐は折柄薄暗き部屋に獨り机に倚り點字にて其機關雜誌『盲人の友』の原稿を認めをれる際にて、其傍には二三の職工がロールを廻して盲人の國定教科書を印刷せるを指圖して頗る取込たる中にも快よく迎へられしが、打見たる處黒眼鏡こそ懸けたれ其五分刈の頭、其八字髯はありし昔の姿に變らず、加かも極めて快活に世事を談ずる其樣は八年前柳家屯の幕舍に堅麺麭を嚙りながら通信の原稿に就て小言を喰されたる時の面影其儘にて互に昔語りを交したる後、中佐は左の如く語らる

僕はまだ新米の盲人で何分目明きの時代が多かつたから本統の盲人の心持になれなくつて困つてをる、ナニ不自由だらうと、成程不自由には違ひないが、今では道を歩いても困らないし、人に逢つても其人の樣子が有々と分る、殊に不思議なのは壁を隔てゝ隣りの室の事までスツカリ見えるやうな心地がする、而して盲目

になると記憶力が強くなるといふが夫はどうだか知らぬが、兎に角新聞でも書籍でも人に讀んで貰つた事は中々忘れない、唯だ妙な事は同じ書籍でも目で見て讀んで頗る面白いと感ずるものが人に讀んでもらつて耳だけで聞ては少しも面白いと思はない事がある、盲目だつてソンなに不自由なものではないから、君も一つ盲目になつてみたまへ

と諧謔交りに失明後の感想を語りたる後肝腎の盲人教育談に入る

▲盲人教育の不備　元來日本では政府からも民間からも盲人の教育といふ事は全く閑却されてをる、慈善的の學校はあつても義務教育の機關といふものはない、殊に甚だしいのは盲人の教科書がない、是は聖代の一缺點ではあるまいか

▲教科書の印刷　盲人でも教育すれば立孤な人間になることは今更言ふ迄もない、彼のホーセットや塙保己一なぞいふ學者は別として、近い例は此頃米國の文壇に盛名を馳せてをるヘレンケア女史である、此人は盲目の上に聾啞であるけれど苦學研鑽してトウ〳〵大學を卒業し今では文學者として令名

嘖々たるものである、歐米各國では盲人に對する社會の設備が整つてゐるが、我國には盲人の兒童にして就學せんとするも學校なく教科書がないといふ悲慘な境遇にある、小學校の教科書さへない位だから況して盲人は中等教育を受くる方法ゝないのである、夫で本會では第一着の事業として、目下國定教科書の印刷をして全國に配布してゐるが、併し見らるゝ通りの點字本で印刷にも製本にも一冊何十錢といふ實費を要するけれど、是を普通の教科書と同値段で賣つてゐる。此教科書が多く賣れたなら本會は大損をして潰れるでせう

▲不廉の郵税　夫から郵税のことである、盲人の用ふる書物や雜誌は同じ内容でも普通活字のに較べると點字だから紙數が多くなつて、隨つて目方が重いから郵税が高くなる、大抵普通のに比して倍以上掛るが、一方から見る、盲人は概して貧困者が多いから夫に高い郵税を拂はすのは實に氣の毒である、英國抔では盲人用の圖書は無税になつてゐるが、僕は無税にまでしてくれとは言はぬが、どうか郵便法に除外例を設けて點字のは目方の制限を寛にして賃ひたい事を希望してゐる

▲無視されたる盲人　而して日本の法律では盲人の權利といふものが十分に認められてないから、事毎に打つかつて困る場合がある、夫には第一點字を公認して貰はなければ不可ない、近い例にも此程の

總選擧に茨城縣で盲人が點字で磯部保次氏に投票した處が、其投票は無効だといふので磯部氏は濱名信平氏の同點になつて年少の故を以て落選したといふ新聞があつた、元來點字は盲人の文字であるから國家は之を公認して普通の文字と同一の効力を與へねばならぬ、此樣な事のあるのを豫期して僕は先年議會に請願をした事もある、又た先年森恒太郎君が鄕里淀村の村長に推された時に縣廳では盲人を村長にしては困るといふ異議のあつたのを、森君が聞いて大に怒り日明と盲人と人たるの權利義務に於て何の相違ある處があるかと、縣廳へ往つて大に議論した末遂々認可されたのに激昂して森君は非常な精勵をして終に模範村長といふ令名を博する迄に至つたといつた具合にドウも盲人が何となく公法上から度外視されてゐるのは遺憾なる次第だ

▲盲人會の活動　本會も今は豐川、池田、朝吹抔といふ方々が會計監督になつてくれ、尾崎行雄、江原素六、石黑忠悳、柳澤政太郎、大内青巒、高木正年氏抔が評議員になり、僕が會長に推されて四十二年設立以來漸次活動の歩を進めてゐるが今後盲人の爲には書籍の出版、圖書館及び學校の設立、慰藉娯樂機關の設備等大に努力を要する事があるが資金の不足で思ふ樣には手が伸ないけれど僕や森君抔は今獻身的に遣てゐる

と中佐は熱心の色を眉宇の間に現はして說來り說去つて其同病相憐れむの溫情溢るるばかりなるに床しく思はれたり、哀れ肉眼明かなれば今は聯隊長か左なくば旅團長ともなりて天晴干城の器たるべき前途有爲の身の、空しく陋巷に隱れて慈善を說き自から盲目の身ながら盲目の手引とならんとは、實に人間の運命ほど分らぬものなきも、同じく國家人生のために盡す道に於ては何の異る處あらん、思ふに世は目明千人、盲目千人、利の爲め名の爲めに眼暗みて一寸先の身の運命さへ知らぬ者の多き中に於て、中佐がよし肉眼閉るも心眼ます〳〵開き劍執る手と杖執る手とは違へども世のため人のために其牛生を捧げんとする志に對しては滔々たる盲者連はまさに反省一番して此盲人救濟の事業に向つて一臂の力を致すべきなり

記者今目のあたり中佐の風貞に接し韓退之が「張籍に代つて李浙東に與ふる書」に聯想して感慨無量、眞に座に堪へざるものあり

景山英

山水花月の際に美人を看れば更に多韻なるを覺ふ、と堅くるしき漢學先生でさへ言つた通り芝居でも、小說でも乃至戰爭でも謀叛でも女といふものが混らねば一向市が榮えぬ、佛蘭西革命の前後に花を咲したシャーロット、コルデー、仙臺萩を彩つた政岡、支那では西太后、朝鮮では閔妃、ズッと近い處では大逆事件に荒くれ男さへ凄とさせたる菅野スガ子抔、數へ來れば峨眉紅裙の身を以て世間を騷がしたものは一々縷指するに遑はないが、大井馬城の大阪事件に萬綠叢中一點の紅を添へた景山英子(今の福田英子)も確に出色の一巾幗である

▲女の民權家　今日でこそ自由民權などゝいへば證文の出しおくれの樣だが、明治十二三年頃から二十年前後に掛ては是が政治界の唯一の旗印であつた、板垣伯が海南の一角から起つて東西に遊說した時は恰かもヨルダン川の畔に「天國は近づけり

悔ひ改めよ』と呼んだ人の聲に救世主を迎へたと同じく天下幾多の志士は是に感奮して其の麾下に集まつたが、獨り男子とのみ言はず女だてらに民權家となつて騒ぎ廻つた連中も尠からざつたのである、彼の岸田俊子(後の中島信行夫人)が宮内省から出て自由の傳道者となつたのも異彩であつたが、更に景山英が大それた陰謀事件に關係し自から爆裂彈を提げて朝鮮にまで押渡らんとした其突飛な振舞には當時の人人は目を丸くして驚倒した

▲明治の女豪傑　實に大阪事件に於ける彼女は時代の花であつた、二百有餘人の鬼をも挫く壯士の中に立交りて唯一人、番茶も出花の十八歳の妙齢を以てして海棠の雨に濕ふ姿そのまゝ法廷に立ち、時の名判官堀田正忠を手玉に取つた其狀は『何の仔細らしい四相の五相の小袖にとまる伽羅じや迄も』と左しもの重忠を手古摺らせた阿古屋を目のあたりに見る心地がしたので、物好きなる世間では頻りと彼女の名を稱へてトウ〳〵明治の女豪傑に祭り上げてしまつた

▲かず〳〵の情話　彼女は明治十八年十一月長崎で捕縛され、二十二年二月憲法發布の大赦に依て三重縣の監獄を出るまで三年有餘の月日を囹圄の裡に送つた、斯くて彼女は青天白日の身となつたが、左れど運命の絲は彼女を縱横に操つて其境遇は必ずしも青天白日でなかつた、風に堪へても柳は柳なり、痛ましき情話に彼女は幾度か袖をしぼつたことがある

▲『妾の半生涯』　彼女が大阪事件前後に於ける小林樟雄や大井憲太郎なぞとの關係は彼女自から遠慮なく其筆にせる『妾の半生涯』に告白せるも今は茲に是を紹介すまい、其後(明治二十三年)彼女は栃木縣の資產家にして米國法律學士の肩書を有せる福田友作に嫁し琴瑟相和して始めて家庭の樂みを味つたが、夫も束の間にて今より十年前、三人の小供を殘されて福田は歸らぬ旅に赴ひたので、爾來彼女は寡婦としての苦節(?)を守り府下角筈に蟄居してゐる内にも雀は百まで踊りを忘れず、相變らず舊自由黨の人々と交際し、又た社會主義の連中や支那革命黨の面々と往來して

何處までも女豪傑として立廻はつてゐた

▲根岸の里の詫住居　此頃彼女は横濱根岸の海岸に社會主義者として知られたる石川三四郎と同棲せるを聞いて記者ははる〴〵訪問すると、年の頃四十五六とも見ふる木綿縞の筒袖を着たる一婦人の『妾が福田です』とて出迎へらるゝに、扨は是が音に名高き景山女史の老の身か、寄る年波や生活上の苦闘に最早色も香もなけれど其語る節々は昔の面影其儘、傍りに人なきが如く氣焔を吐く狀は迚も女とは思へず角筈には十五年も居たのですが、其筋の干渉が甚しくて何も手が出ませんから病氣の保養旁々昨年の九月に此所へ越して來たのですが、相變らず警察の注意がうるさいのです、此二三日前も堺枯川と木下尚江とが此所へ落合つたので警察では大騒ぎをしました、妾も今迄は御承知の通り隨分お轉婆で騒いだのですが、是から少し内的方面で活動したいと思つてゐるのです、今は御覽の通り女中になつて働いてゐます

といつた風に滔々辯じ去る其調子では當年の豪氣尙ほ未だ衰へず、何事か仕出かさんとする氣魄のほの見ふるのに、氣弱き記者は跣足で逃げ出すばかりに引下つた

宇川盛三郎

二十年の歳月決して短かしといふべからず、宇川盛三郎が東下りならぬ西の方京都に落行きしも早や二た昔の過去となりぬ

▲歐化主義の心醉者　德島は鳴門に聞え、藍に聞え、また巡禮に御報捨の十郎兵衛に聞ゆ、彼も亦四國三郎の河盃に生れたる一俊才なり、夙に藩の貢進生として江戸に遊び、大政維新の後太政官出仕となりしが、舊藩主蜂須賀茂韶の佛國公使となるに及び書記生として之に隨ひ、明治十六年巴里の政治學校に入り業を卒へて十九年歸朝せり、傳へ云ふ彼が佛蘭西に在る時、謂へらく凡そ外交なるものは其對手國を褒むるにあらざれば其妙を得たるものにあらずと、即ち揚言して曰く日本の現狀は

到底孤立して生存を保つ能はざるが故に歐羅巴の或文明國と握手せざるべからず、而して今日握手すべきは獨逸にあらず、英國にあらず、露國にあらず、唯一に佛國にありと、之を聞ける在留同胞は大に憤慨し『宇川は怪しからぬ男なり日本の國體を侮辱するも甚だしきものなり』とて攻擊矢の如く終に日本に召喚さるゝに至れりと、日英兩國は疾の昔に握手し、日佛協約も成立したる今日、彼が詰らぬ國體論に禍を買ひたるも亦一笑の種ならずや、任敎彼が當時歐化主義の心醉者たりしは想像するに難からざらん

▲人氣役者の一人　新歸朝のハイカラは直ちに山縣內相の知る所となり、其下に參事官の地位を與へられ、多年研鑽せる學識を以て當路に貢献し、殊に自治制の基礎を定むることに就て大に手腕を發揮すると共に、出でゝは明治法律學校の敎壇に立ちて行政法の講義をなし、尙ほ大日本婦人敎育會、東京感化院其他の社會公益事業に掌はりて盛名嘖々、飛ぶ鳥を落すといふは聊か大袈裟なるも何しろ人氣役者の

一人に數へられ隨分男を賣りしが、殊に宇川の行政法といへば呼物の一となりて學生の間に渴仰を博したるものなりし、其後彼は內務省を退きて市會議員となり田口卯吉、關直彥等と共に士族授產金五萬圓を東京府より下附せられて南洋貿易に着手せんとせしに、世論囂々批難の聲大に高まれるに辟易し彼は中途にして手を引きしも、その社會上の地位は尙ほ隆々として毫も渝る處なかりき

▲悲慘なる都落　勢に乘じて彼は第一回の總選擧に牛込區を根據として出馬せり而かも不幸にして落選せり、當時彼と運命を共にしたるものに澁澤榮一あり、鳩山和夫あり、角田眞平、菊地長四郎、安田善次郎、須藤時一郎、仁杉英等また其一人たりしも、彼は之に依りて烏江一敗雖また逝かず、終に東京に居たゝまらざる羽目に陷りて京都に走りたるを最後とし彼の名は倏忽として中央の舞臺より消え失せたるぞ憐なれ、思ふになけなしの財布の底を叩いて乾坤一擲の技を逐鹿場に試み志終に酬いずして悲慘の最後を遂ぐるもの歷々として今眼前に現はるゝ處、彼も亦其

僅に漏れざりしか

▲蹉跎白髪の年　彼が失脚後の淪落は幾んど言ふに忍びず、全く其産を失ふと共に多年苦樂を同くせし妻(長谷川芳之助の妹なりといふ)をも失ひ、寄邊なぎさの捨小舟となれるに舊知福田正己(廣島控訴院檢事)今津眞次郎(京都瓦斯會社重役)等相謀りて京都行政學會を設け彼の爲に生計の方法を講ぜんとせしも、債厄の頻至に益々窮境に臨むを見兼ねて其友人にして當時大阪控訴院長たりし加太邦憲は裁判制度の改正を機とし先年彼を京都地方裁判所の佛蘭西語通譯に採用し、今現に其職に在りて後妻の女學校教師として得る俸給とに依り辛うじて衣食の計を爲しつゝあり、彼れ本年五十五六、宿昔青雲の夢破れて空しく舊都の月に蹉跎白髪の年を歎ずる身の成行は同情に値せずとせんや

▲生死榮枯の跡　彼の住宅は今麩屋町通竹屋町下る東側に在りて世を偲ぶ標札も僅かに其文字を認め得る位にて是が其昔し内務參事官として腕を鳴らせし才人の身の

成行とは心なき人々には受取りかぬるべし、彼が明治二十年明法の講師たりし時の同僚には岸本辰雄、宮城浩藏、磯部四郎、岡村輝彦、光明寺三郎等あり生死榮枯の夢の跡また懷舊の種ならずとせんや

中村道太

人間の榮枯盛衰は總ての階級を通じて免かれ難い數であるが、現代に生存する實業家の中に於て其感慨の最も深いのは、中村道太である

▲中村道太の名　を聞くものは手を打つて『ア、そうだつたなあ』と其末路の悲慘なのに言ひ知れぬ思を催すであろふ、今試みに彼が一生の波瀾を叙せしめよ、彼は豊橋藩の出身で維新の交、藩の參事を勤め財政上畫策した功勞は彼が自慢話の一になつてをるが、明治五年東京に出でゝ友人早矢仕有的と今の丸善株式會社の前身たる丸屋商會を組織して書籍や藥品抔の直輸入をなし、傍ら丸屋銀行を創立して大に

手腕を揮つたが、其後時の大藏卿たる大隈伯に知られて產出したのが桃太郎ならぬ今の横濱正金銀行である

▲思出多き昔日　正金銀行といへば今は二千四百萬圓の大資本を有する帝國唯一の對外金融機關であるが、中村等が是を創立した時の資本金は僅か三百萬圓であつた今日でこそ「僅か」といへるが其當時三百萬圓の資本にするといふ聲を聞いて世間では驚倒し創立委員の間でもソンな大きな資本では迚も運轉が六ヶ敷といふので反對の聲が高かつたが、彼は群疑を排して之を決行し愈よ其設立を見るや、最初の頭取たる榮譽を擔ふて財政に於ける一方の覇權を握つたのが即ち彼であつた、是に附けても當時我經濟界の幼稚であつた事が分るので、今昔の感は啻に彼一個の身上のみでない

▲當時の成金　十四年の政變で彼は大隈伯の關係から坊主が憎くけりや袈裟迄の筆法で正金銀行を虐め出された、彼自から語る處に依ると當時正金の株を二千株無理

羽生に押附られて大に困つてをる處を其株が九十圓内外から三百圓に暴騰したので一時に四十萬圓から儲け次で小眞木鑛山を經營して百萬圓近くの利益を占め、金の置場に困つたといふ程にトン〳〵拍手に成功し、其勢に乘じて各種の事業に手を出し、當るを幸ひ斫立て薙立て就中今の東京米穀取引所の前身たる米商會所の株を買占めて終に其頭取となつたが、其頃の彼といふものは所謂成金黨の一人として飛ぶ鳥も落さん許りの威勢にて、殊に日本橋北島町に鷗雨莊といふ倶樂部やうのものを設け、天下の文人雅客を集めて一世の豪華を恣にしたものだ。併し彼は單に運命に依つて一時を僥倖した者でなくて、頗る膽玉の大きい而して經濟上に一種の手腕を有してをつた人で、今でも彼の後進は其人物の非凡なるに敬服してをる

▲終に失脚す　惜い哉、彼は創業の才があつても守成、能力に乏しく勢に委せて餘り手を擴げ過ぎたのと、一は是も政權爭奪の關係から時の陸奥農相より取引所を痛く虐められた爲に、手形詐欺事件といふ嫌疑を受けて明治二十三年に囹圄に繫が

れ、越へて二十六年出獄した時は彼の財産は全部沒收されて茲に實業家としての終焉を告げたのである、更に彼の語る處に依ると若し此事件が無かつたなら確かに二百萬圓の財産は殘つて居たといふ事だ

▲舞臺面が變　つて茲所は赤坂溜池二番地である、見る影もなくいぶせき家に小柴庵といふ名の下に茶道、華道、盆石教授の看板を掲げてをる七十餘りの鶴髪の老翁がある、是ぞ中村道太のなれの果にて、藝は身を助ける不仕合となり、斯る見すぼらしき生活を送るを見るに附けても泌々と世の味氣なきを感せざるを得ない、あはれ咸陽宮の煙、姑蘇臺の月、世は朝露夕電雷ならざる習なりとはいへ、彼の如く泡沫夢幻の半生を過ごした人は蓋し稀に見る處であらう

立川雲平

吾人をして明治二十五年五月十二日の衆議院傍聽席に立たしめよ、唯だ見る戰局は

還擧千渉の上奏案に依りて開かれ、風白く雨黑く煙塵迷濛として殺氣空に横ふ中に馬上劍を横へて先づ陣頭に現はれたるは味方の大將河野盤州にて、軍扇サッと靡けば島田沼南、犬養木堂なんぞ一騎當千の猛將鎧の袖を連ねて太刀風鋭どく斬進みたるに、スワ一大事とばかり松方海東自から矢面に立ち、大岡硯海、高梨長髪等譜代恩顧の面々君の馬前に討死せんものと寄せ來る敵を切伏せ薙立て丁々ハッシと互に鎬を削る折しもあれ、忽ち行手の方より砂煙を蹴立てゝ進み來る若武者たゞ一騎鍬形打つたる兜に萠木匂の鎧着で連錢芦毛の駒の姿も勇ましく獅子奮迅の手練を現はしたる其武者振の餘りに雄々しさに敵も味方も均しく『天晴れなる武士よ』とわめき立てる狀は、其昔し下野の國の住人那須與一宗高が西海の波の上に見事扇の的を射立てゝ、沖には平家舷を敲き陸には源氏箙をたゝきて感じ合ひたりといへる當時を髣髴して目覺ましとも花々しとも言はん方なかりし

▲辯論の雄　臣クモヒラの初陣の功名は今に至るも尙ほ語り草の一として殘れり、

彼は議會に於ける辯論の雄として嘖々たる名聲を博し尾崎行雄の莊重、犬養毅の勁烈、井上角五郎の深刻、大石正己の雄大、島田三郎の輕妙と相待つて其銀瓶破れて水漿迸らんが如き快舌に日比谷原頭花を添へしもの夫れ幾許ぞ、彼は通ふ千鳥の啼く音に、誰が夢を破りけん淡路島に生れて棧道に猿啼くなる信州に人となり、辯護士より出でゝ靈界の方面にも活動し、世人をして將來の進境大に見るべきものあるを想はしめたるに、恨らくは政界の濁浪は意外に斯人をも捲去りて暗黑の裡に葬り、終に議會の一名物を失ふに至りしぞ是非なき次第なり、ア、戀ゆえならで渡るに危ふき細谷川の丸木橋、一たび足み踏損ねて激湍に浚はれ行く身の哀れさは如何に深かるべき、人生意の如くならざるもの啻に鴨の水と山法師とのみならんや

▲自ら今昔を語る　扨も去る程に四十五年の總選擧も近く行はれて新たに月桂冠を獲たる人々の意氣揚々と車を駈けるをば、芝愛宕下町は政友會本部の門前近き御嶽輕便鐵道會社創立事務所とは名ばかり今は同病相憐れむ落伍者の梁山伯となれる二

階の上より日夕之を眺むることの如何ばかり彼が銷魂の種ならん、彼は往訪の記者をば快よく迎へ昔しに變らぬ和氣愛すべき顏に微笑を湛へつゝ語るらく

『人の今昔』は中々面白いですなあ、此頃の呼物ですよ、併し僕なんかの事を書かずとも外に如何程もあるでせう、殊に君等の國には隨分有るやうです、寺田寛君抔も大阪では一時鳴らしたものだが今は大崎邊に居るやうです、林包明君が淺草で爭つた時は僕も信州から態々出て來て應援したのですが、一向志を得ないで氣の毒です、大島更造君(元の兒島稔)も時々此所へ遣て來のです、僕の方の堀内賢郎君抔もモウ今昔の人です、森本駿君も來月の三日には執行猶豫の期限が滿了するので是から活動すると言つてをるのです

と先づ我身に政友の人々を引較べて懷舊談をなしたる後

廬山に居るものは廬山を知らないといふ格で代議士で騷いでをる間は向ふ見ずに色々な事をしたが今から考へるとつく〳〵往事の非なることを感ずるのです、選

舉界の腐敗も實に極點に達したが全く今は危機ですよ、今度當選した人の中に眞に其清淨潔白を誇り得る者が幾人あるでせう、將來有爲の人物でも代議士になると質が惡くなりますなあ

と語る節にも寒灰の間尚ほ一點の活火あるを認めしむると共に、我身一つの秋を悲しむ今日の不遇に對し心からなる同情の念を禁ずる能はず、今や山ほとゝぎすの一聲二聲名のるころ、彼が血に啼く心根は有明の月より外に誰か之を知らん須らく雲井はるかに啼き叫びて當年の立川雲平を復活せしめよ

吉田正春

『間雲潭影日に悠々、物換り星移りて幾度の秋、閣中の帝子今何にか在る、檻外の長江空しく自ら流る』と古人の吟ひたるも理にて實に人生の有爲轉變は免かれ難き數なるも、吉田正春の近狀に對しては取わけ滄桑の感を深ふせざるを得ず

▲名門の出　彼は土佐の參政として有名なる吉田東洋の嫡子にて、後藤伯の姻戚たり、夙に家庭の教育を受けたる後、横濱にて英學を修め明治十一年早くも外務省に入り翌年官命を帶びて波斯土耳其及び巴爾幹半島を旅行し歸來『波斯の旅』の著述あり、次で伊藤伯が憲法取調のため歐洲に派遣せらるゝや、彼は伊東巳代治、平田東助、河島醇、山崎直胤等と共に其隨員を命ぜられ伯を助けて其研鑽に力を致し、歸朝の後は外務書記官として通商局長心得となり、尚ほ參事院議官補を兼ね大に其得意の手腕を揮へり、當時小村壽太郎、栗野慎一郎、高平小五郎氏等は彼の下僚に在り、白根專一、曾禰荒助氏等其同僚なりしを以て見れば、彼の門地、學識にして身を順境に處せんには或は大臣の椅子を贏ち得たるやも知るべからざりし

▲失脚後の彼　後藤伯の大同團結を企つるや、彼は其帷幄に參して畫策する處尠からず、後ち彼は滯歐中關係せる一獨逸婦人の追跡し來れるに依り艶聞を傳ふると共に、山積せる負債の爲め全く社會より失脚するの不幸に遭遇し久く江湖に沈淪せ

しを後藤伯の遞信大臣となるに及び、擢でられて參事官となり在職六年の長きに亘りしも亦た彼の意に非らず、三十年官を退きし後は再び逆境の人となり落魄據る處なきの餘か但しは禪機に觸れて解脱せしか三十九年より蓮門敎に入り殆んど一派の敎主と仰がれ先年其神道大成敎の管轄より脱して獨立の敎派を樹つる際の如き彼は其謀主となりて大に活動せしとはいふものゝ、當年屠龍の技試むるに由なく今は世間より淫祠の一に數へらるゝ蓮門敎に身を隱すに至らんとは人生の境遇の移り變りは實に妙しき限りなり

▲彼の懷舊談　頃日彼を芝愛宕下なる事妙法祠（蓮門敎總本部）に訪へば七ツ下りの紹の被布を着たる老ぼれたる人の出でゝ應接せるに、是が曾て外交界の花役者として才名を馳せたる人の後身ならんとは何人も思ひ設けざらん、左れど其諄々說く所假令ひ多少時勢に後れたる感なきに非ざるも政界裏面の機微を指摘し歐洲外交の消息を揣摩する處、流石は昔執りし杵柄、蓮門敎一敎正の口より此言を聞かんとは珍

らし、今彼が故伊藤公（當時伯爵）外遊中の逸事に就て語る一節を掲げんに

伊藤は最初から平和論者でした、國家の膨脹は武力に依らず法律や憲法の約束で出來ると信じてゐた、歐羅巴に往く途中、埃及に立寄つた時に丁度アラビーパシヤが亞歷山府に立籠つて英國に反抗して今にも戰爭が開けやうとする形勢なので是を公に話すとナニ今時戰爭があるものかと太平樂を歌つて見物してゐる處を、英國の總領事から軍艦が既にマルタを出發したから早く出發せねば海路が絕えるといふ通知に接したので、大に狼狽し宿屋でブランデーの瓶を倒したりして大騒して出發すると汽車も汽船も滿員で漸く埃及を立退いたといふ滑稽談もあつた

獨逸に着いてグナイスト博士に敎を乞ふと、同氏は憲法といふものは其國の歷史を基として制定せねばならぬが日本にはどんな歷史があるか先づ夫を聞きたいと聞かれたので、伊藤は『日本には正確なる歷史がない』と答へたので、私は是は怪しからぬと宿へ歸つて伊藤と大議論を始めトウ〳〵五日目に青木周藏が仲裁に

入つて仲直りをした事があつた、夫れからグナイストはどうも融通の利かぬ學者だといふので墺地利に行きスタイン博士に就て研究したが同博士は中々便利な學者でした、其時に私はオルデンベルヒ博士に就て印度哲學を研究したが是が今日蓮門教に入る動機です

と語り終つて彼は蓮門教の教義に就て精しく説明されたるも門外漢たる記者には馬の耳に風なり、思ふに人世蹉跎多し、秋風落莫白頭を抱へて草堂に泣くもの豈に獨り彼のみならんや、遮莫、かの毀譽至らざる石上に寂然跌座して涅槃の境に入る彼も亦た至幸ならずや

中嶋又五郎

東京の市政振はず、トウ〳〵尾崎市長は椅子を投出すといふ騒ぎを演じてをる際に附け、端なくも曾て市會の舞臺に中島又五郎といふ立役者があつて腕を揮つた事を

思ひ出さるゝのである

▲中島の半生　は實に華やかなる生活であつた、東京辯護士界の立役者として腕を揮つたのみならず、自由黨創立以來の名士として政界にも隨分重きを置かれ議會でも中々立働らき又た憲政黨内閣には北海道局長にもなつたことがあるが、其最も羽振の良かつたのは市政の舞臺であつた、顧みれば明治三十年前後の東京市といふものは、星亨の全盛時代であつたが、如何程德川家康が偉くても其左右に井伊、酒井、榊原、本多抔いふものが無くば天下が取れぬと同じく、當時星の配下から利光、鶴松や中島又五郎を取除いたなら、夫は油のない車、舵のない船であつたらう、親分子分相牽引して市を搔廻した間には隨分批難の聲も高くて星の如きはトウ〳〵伊庭想太郎の兇刃に倒れたが、併し群疑を排して思ふ存分に活動した其功勞も亦沒すべからざるものがある

▲世の中を望月　缺けたる事のないと思つて遣り過たのが中島等の失敗であつた、

雲の梯踏み外づして彼が公人としての立場を失つてから丁度十年になる、此間に星の子分は段々出世して利光は世間から罵らるゝ間に電鐵や水電でシコタマ溜込み、井上敬次郎は東京市電氣局の部長にまで成上り、森久保作藏は星に代つて市の實權を握り其他大小恩顧の士は多く志を得てをるが、獨り彼のみは全く社會から隱れて落魄してをる

▲彼は今何をしてをるか、漸と探し當てたのが本所區小泉町卅五番地の詫住居である一ケ月十四五圓位の借家住ひでお袋と細君と小さい男の兒と三人の家族で女中を一人使つて細き煙を立てゝをるが、軒落ち塀破れといふ程ではないが、此人の城廓としては中々に見すぼらしいものだ、左れど當年覇を稱した人だから衰へたりと雖も、尙ほ雄姿未だ伏櫪の恩を受けないとでもいふべき面影があると思ひきや、謙遜抑制客に接する態度頗る懇切を極め、痛み入るほどに言を低うして談を交へられたるには却て恐縮に感じたが、また頗る其意氣の消沈せるに覺えずハンケチを顏

に當てた、彼は人の訪問に對して時事を談ずることを避くるものゝ如く、記者も亦折角沈澱せる政治上の濁りを攪亂して往にし夢より彼を覺ますのも氣の毒だと思つたが、左りとて已むべきことも出來ないから無理に彼をして語らしめた、彼は曰く

東京市のことを思へば思ふほど癪に障るから此頃は成るべく遠ざかるやうにして世間のことは一切忘れやうとしてをるのです、尾崎も愈々投出したさうですが東京市ほど小姑の多い處では誰でも遣つて行けるものではありません、松田市長の時代には私共も出來るだけ當局者に一任して遣らすといふ事にして居ました今世間の下馬評に上つておる市長後任者の顏觸では孰れも私共の意中の人ではありません、此樣な時に星君でも生て居たなら十分に遣れませうが、生半可な人物では迚も東京市を切廻はして行くのは困難でせう

私も引込んでからモウ十年になりますが、相變らず貧乏で一時は福島縣の山の中へ這入つて硫黃會社の整理をして居ましたが、今は詰らぬ會社に關係してをるの

です、ドウせ金が無くなつては駄目です

と白髪交りの一分刈の頭を撫でゝ力なげに語るを聞くに附け、實に心中から同情の念が催された、左れど彼と境遇を同うして政界を去れる二三子が臆面もなく社會へ出しやばり、彼是批難を受けてをるのに比して、彼が深く我身を責めて謹慎の上にも謹慎して名奔利走の場を遠ざかり全く踏晦してをるのは殊勝らしい行で、また茲に同情といふ語を繰返さねばならぬ、彼れ本年取つて六十二歳僅かに還暦を過たばかりで打見たる處まだ餘り老境に入つたとも覺えないから彼の人物、才氣を以てしては未だ最後の飛躍が出來ないとも言へない、記者は滿腔の好意を彼に表して其捲土重來を期待するのである

芳野世經

紅蓼白蘋長 江の兩岸を彩どる昨年の晩秋、記者は中清の動亂を觀て歸途姑蘇の地

を過ぎり城内の老若男女（女はおまけだ）が吾も〳〵と其の辮髪を斷ち切リジャンギリ頭の流行せる樣を目擊して『頑冥不靈と稱せられたる支那人でさへ此樣だのに日本でまだチョン髷の者があるとは可笑しいものだ』と感じたことがあるが、此感じは今芳野世經の事を書くに附けてムラ〳〵と再び湧いて來た

▲府會の名物　芳野といふと誰しもチョン髷を想ひ出さぬ者はないだらう、併し夫よりか想出さずに濟されぬのは彼が東京府會の名物であるといふ事だ、彼は幕末の學者、詩人として詞壇の雄を以て稱せられた芳野金陵の次男で家傳の經學に幼い時分から隨分修養を積んだ人である、明治十二年府縣會の開設と共に小石川から最初の府會議員に選ばれ夫から三十餘年の長い日月を一意專心府政のために盡したといふ深い經歷を有してをる、當時の府會といふものは福地源一郎、沼間守一、須藤時一郎抔いふバリ〳〵の人物が顔揃ひをしておつたもので素より今の衆議院などは傍へも寄れないものであつた

▲功勞と名譽　彼は初期の府會に福地議長の下に副議長に選ばれ夫から河野(敏鎌)沼間等の後を承いで長い間議長の椅子に据り、なか〳〵幅を利したものだ、二十三年に國會が開けると彼は小石川から推され鳩山和夫と競爭して見事に勝利を占め出る事は出たものゝ、矢張り古巣が戀しくて二十五年の解散と共に代議士の方は斷念して鳩山に讓り、又た元の府會議員に後戻りして一昨年までずつと其職に在つて脇目を觸らずに府政のために身を捧げたのである、二十七年に彼が松田(秀雄)須藤と共に藍綬褒章を授けられたのも畢竟其多年の功勞を認められた結果に外ならぬ

▲チヨン髷は如何　彼は本年六十四歳でまだ老ぼれたといふ程ではないが、近來多病のために今は總ての名譽職を辭して大塚に退隱し是から書籍でもいじつて何か著作をすると言つておる、彼は漢學者の家には珍らしい裕福であつて、現に今の高等師範の敷地を先年十二萬圓で文部省に賣りまた一萬坪からの宅地を有つておるといふからには太したものだ、唯だ解せないのは彼が例のチヨン髷を今に其儘存してお

ることで、彼の頭でシルクハットを被つた時なぞは餘程面白い圖だが、是に就て彼の親友なる小石川の某元老は斯う語つて居た

ナニ芳野君のチヨン髷には深い譯があるのでなく、唯だ切り後れたのが其儘になつたのに過ないが、今では夫が評判になつたから殘してあるのでせう、一寸世間の人はチヨン髷を殘しておる位だから人間も餘程頑固だらうと思ふでせうが、どうして心は決してチヨン髷ではないのです、頗る世事に通じてまた中々融通も利く處があつて、頭の風と腹の中とは全く反對です

と、左もさうずらん、左りながら支那人さへ進んで三百年來首と掛替の辮髪を惜氣もなく斷り去る今日、又高梨も長髪を切り森も切り宮崎滔天、萱野長知等も辮髪を斬つた今日、文明の風俗に反抗して何を好んで朝鮮人琉球人を學ぶの必要があるだらう、之を辯ずる者は曰く身體髮膚父母に受く之を何とかせざるは何とかの初めなりと金箔附の文句があるではないか、芳野氏の意蓋し玆にあるだらうと、又曰く行

燈は洋燈となり洋燈は瓦斯電氣となりて舊態次第に廢れ行く今日、彼の頭髪に依りて僅かに江戸時代の面影を見るまた珍重すべきものでないかと、記者即ち唯々として引下る

渡邊國武

阪谷芳郎が新に東京市政の渦中に投じたのを怪しむ者があると或人は笑つて『阪谷も今まで出塲を失つてゐたからなあ』と言たが、獨り阪谷のみでない、外にも當然出るべくして出る機會を失つた者が尠くない、高島鞆之助もさうだらう、伊東巳代治もさうだらう、清浦奎吾、松岡康毅、末松謙澄、金子堅太郎、都筑馨六なぞも其數に漏れぬが、渡邊無邊俠禪も亦御多分に漏れない一人である

▲這箇の消息　彼は相當に手腕もあり機略もあり才幹もあり、其上一點の靈犀相通ずるものがあつて、鳥渡愛すべき風骨があるのに拘はらず、今は政權の圏外に出で

ゝ孤影竛然、惑星の地位に立つてをるのは何故だらうか、彼に變通の才がない爲であるかと思へば、例の心機一轉なぞの遣口はなか〳〵如才のないものだ、彼が藩閥以外の出身なるが爲なるかといへば、彼は伊藤公といふ大立物の幕下に在つて三度まで其内閣に大藏大臣の椅子を占めたではないか、左りとて俗氣がないといふのも當らない、時代に後れておると評するも酷である、斯くて彼が當世に志を得ない理由に至つては冥々として這箇の消息を知るに苦しむのであるが、左りとて肯かるゝ節のないでもない

▲親泣せの駄々ッ兒　言ふ迄もなく彼の名は松方、井上等に次いで日本の財政史には殘るべきものである、其の明治初年、大久保利通に識られて七等出仕になつて以來、約三十年間時に地方の令尹となり、時にまた遞相の印綬を帶びた事はあるが、其大部分は國庫の金番役をしたもので、殊に日清戰役中から戰後に引續いて財政を變理した手腕は敬服すべきもので、信州猿が一躍して華族になつたのも畢竟此動

を勒せられたのであるが、彼は生來の駄々ッ兒で三十三年政友會内閣組織の前に俄かに脱會して伊藤の無能を天下に告白した事や、三十四年度以降の財政計畫に就て頑強に自説を固守した爲めトウ〳〵伊藤内閣を瓦解せしむるに至つた事や、隨分親泣かしのいたづら事をしたが、此樣な事で懲りられたものか、第一次の西園寺内閣が出來ても藏相の株は阪谷に取られて彼は終に所謂其出塲を失つて今に至つたのである

▲●●●●●古英雄の面魂　昨年の春、記者は彼を伊豆山の別業に訪うてから丁度一年半目に此頃麻布本村町なる例の蛤蟆池の畔に尋ねたが、寄る年波に頭髪半ば禿げて入齒に口の使ひ振自由ならざるが如きも、其三星の五ッ紋打つたる黑縮緬を羽織つてドカと其魁偉の軀を椅子に横たへた處は一道の凄氣人に迫るが如く何處となく古英雄の面魂を備へてゐる、彼は語つて曰く

此頃伊豆山から歸つたが、近い内に子供等と日光へ避暑に出掛る積りだ、ナニ樂

しみ？樂しみは何もないが馬鹿ッ芝居を見てをるのさ、是でも立憲政治とか何とか言つてをるからなあ

政治なんかといふものは詰り弱肉强食、優勝劣敗に外ならない、今から考へると詰らぬ事をして世を渡つて來たものだが、モウ是からは政治なんかはコリ〳〵だ、併し考へると日本の將來も心細いものさ、僕は思ふに支那を始め極東の人民は國家的の生活をする資格がない、日本の政治でも昔しから同じ事を繰返しておるに過ぎない

制度調査もどうぢやな、一體全體日本の政府ぐらゐコセ〳〵するものはないよ、是は幕府の遺習でもあるまいし、長州から持て來た譯でもあるまいが何故こんなに繁文縟禮——といふ文字を冠せるのは少し勿體ないが——だらう桂サンの洋行も結構だらうが彼地へ行つて自慢話をしても案外日本の事情は向ふでも判つてゐるからなあ

と白眼世間を嘲けるといつた風の調子で門外漢の批評を試みてゐた、知らず彼は名利の關を參破して小休歇に入れりや、將た生死の關を透得して大休歇に入れりや、姑らく之を問はずとして彼が禪機に觸れて俗氣を離れてゐる事は當世に珍とすべきもので、思ふに彼は今漸く窮達命あることを知つて十年讀書の人となつたのを恨んでをるだらふ、彼はモウ古稀の齡に近いが、兄の宮相千秋が今に活動して時めいてをるに較べてはまだ世捨人となるのは惜いものだけれど、既に志を政界に絶つて時に霜天の鶴唳、雪夜の鷄鳴に耳をそばだてゝ乾坤清絶の氣を得、時に晴空の飛鳥活水の戲魚に眸をこらして宇宙活潑の機を覗ひ、拈華微笑の裡に浮世の風波を餘所に見て悠々天命を樂しむといふ一閑人になつてをる

陸義猶

時は春既に闌けし明治十一年の五月十四日、山王臺の朝けむり未だ散り失せぬ八時

頃、一輛の馬車常盤橋の彼方より塵を蹴立てゝ清水谷に差掛ると思ふ間もなく五六の壯漢バラ〳〵と現はれ出で紫電一閃、忽ち馬を斬り車中の人を刺して繽紛たる紅雪に微笑を漏らしつゝ去つて、行く處を知らず、城山の碧血未だ乾かずして今また茲に紀尾井坂の變を見る、春風秋雨僅かに一年を出でずして維新の三傑枕を並べて死す實に千秋の恨事なり

▲逆徒の一人『其方儀島田一良等が大久保參議を殺害するの企に同意して斬姦狀と唱ふるものを作爲し其逆謀を贊成する科に依り除族の上禁獄終身申付候事』との宣告を下された通り陸義猶は此事件に於ける所謂逆徒の一人なり、彼は素より、七首を懷にして甲東の胸に擬したる下手人の内に加はらざりしとはいへ、其島田等のために草したる斬姦狀は辭義壯烈にして凄其たる霜氣筆墨の外に溢れ、殊に甲東の五大罪を數へて殺戮の已むを得ざることを明かにしたるは、今日より之を見れば是非の論容易に下すべからざるものあるも、其當時にありては恰かも離騷を讀むが

如く、人をして皆血下り怒髪冠を衝かしむるものあり

▲回思十年浮沈事　彼は徒らに悲歌慷慨これ事とする壯士にあらず、また文墨の間に沒頭する學究にあらず、夙に加賀の藩より出でて天下の士に交はり、殊に明治二年以來屢々九州に赴いて西郷桐野の徒と肝膽相許し、島田等と共に加能越に於ける民權家の先驅をなせしが、十年の乱起るや之に應ぜんとして神戸に至りしも時機既に後れて果さず、翌年島田等の依囑に應じて彼の斬姦狀を草して與へ、彼は飄然として伊勢に遊び兇變當時は同地の新聞社に在りて編輯の補助をせしが、其筋のために羅織されて縛に就き、十年の苦楚を石川島監獄に嘗め、明治二十一年特赦に依りて放免されたり『兀坐幽牕共に談するなし、秋風夜雨夜將に酣ならんとす、回思十歳浮沈の事、一死心に期す已に再三』とは彼が獄中の苦吟なり

▲聖代の逸民　巨魁島田は直ちに斬に處せられ長、脇田、松本、淺井等も同じく刑場の露と消へ、其他當時同盟の士多くは世を去りて殘るは啻だ彼のみ、爾來彼は風

塵を避けて世に出でず、今は舊主前田家の史誌編製に與り、日々上根岸の寓居より本郷に通ひをれりといふに此頃彼を同家に訪問せしが、彼は今年耳順の齡を迎へたるといふも、其清矍鶴の如き風貌には活氣滿ち〳〵て馬上顧眄の勇尙ほ認むべきものあり、今茲に彼の實話の一部を掲げんに

私の書いた斬姦狀は、大久保を殺したと同時に郵便箱に投込んで新聞社に遣つて其趣旨を天下に發表しやうといふので、其郵便箱に入れる役を木村致英といふものに頼んだ、ソコで木村は十四日の朝常盤橋を渡つて左手の茶店へ腰を掛て休んでをると、其前を馬車が通つたから『アレは誰の馬車か』と茶店の婆さんに聞くと

『アレは大久保さんの馬車で御座います』といつて、夫から十五分許り經つと下から慌てゝ這入つて來る者があつて何となく騷がしいので、茶店の婆さんが見に出て頓て歸つて來たから『何ですか』と問ふと『向ふに人殺があるといふ話で』といふに木村は占めたとばかり、懐中にして居つた斬姦狀を郵便函へ投込んで宅

へ歸つたさうです

各新聞は政府を憚かりて無論其斬姦狀の全文を掲載せざりしも、朝野新聞は之に關する簡短なる記事を載せたるため即日發行停止を命ぜられしが、是ぞ日本に於ける停止の皮切りなりしとは紀尾井坂の事變も新聞社に對し不思議の緣あるもの哉

▲昨非今是　爾來世態の變遷せしもの幾許ぞ、當年政府の逆徒と見做したるもの今は聖代の逸民となり、曾て彼等の好臣と目せしものゝ嫡子たる牧野伸顯の現に農相の椅子に在るも、また懷舊の種たらずんばあらず、思ふに昨非今是、其時々の風の吹廻はしにて岩倉も狙撃され板垣も刺客の難に逢ひ、大隈重信、森有禮の奇禍も亦已むを得ざることなりとせば清水谷の兇變も亦時勢の狂瀾に觸れたるものとして是非なき次第なるべし、左るにても春秋幾度か哀悼碑前を往來せる彼の感慨や如何

宮部襄

蜀魄千年尙誰をか怨む、朝な夕な上野の森を掠む郭公の聲に同じ血を吐く思ひして根岸御行の松の片ほとりに浮世を偲ぶ宮部襄の波瀾あり光彩ある其過去の夢物語を茲に傳へてみやう

▲長脇差の雄　彼は榛名の山靈が生んだ高崎の一俊才であつた、夙に身を警察官に起し時の知事安岡良亮に用ひられて熊本に神風連の起つた時には警部長か警察署長かをしてをつたが、其後東京に歸つて前橋の署長に任ぜられて居る內に、其頃處の名物たる上州の博徒が信州の同じ仲間と葛藤を生じ、碓氷峠の追分ケ原で命の遣り取をするといふ大騷動が起たので縣廳でも大に面喰ひ兵を繰出して鎭撫をしやうとする議の持上たのを彼は身を挺して「夫は拙者が引受けると、兩方の喧嘩の中へ這入つて無事に仲裁が成立つた祝といふので、其追分ケ原で三日間賭博を公許して彼自身がテラ箱の傍に据つて之を監督したといふ天下無類の話がある

▲幽冥より喬木　之から彼は大に博徒の間に信用を得て腕を揮つたのを、其筋では

却つて彼を恐がり出して師範學校長に轉任を命ずると彼は憤然として之を斥け、直ちにサーベルを投捨てゝ國會請願運動に加はり上毛の地に民權論を皷吹して其泰斗と仰がれ、自由黨の組織さるゝと共に一躍して幹事に選ばれ末廣、馬場、大石、内藤等と共に板垣總理の股肱となつて中央の政界に飛躍したが、當時彼は志士の連中には珍らしき富裕の身にて金放れはよし、人物も確かりしてをるといふので、中々の羽振を利かせたものであつた、其頃出來た厚德館といふ壯士養成を目的とした法律事務所も彼の主唱に成つたもので、中島又五郎、仁杉英、武藤直中等は彼の指揮の下に活動したものであつた

▲六年の慘風苦雨●●●●●『此所らで血の雨降らせねば自由の土臺が固まらぬ』と異口同音に叫んだ所謂群馬の暴動も其原動力は彼であつた、間もなく同志の士に照山峻三といふ國事探偵の紛れ込んでをるのを發見して秩父の豪農村上泰治が之をおびき出し部下の博徒岩井丑五郎、南關藏等をして自宅の浴室で銃殺せしめたといふ一椿事が

降湧いた、當時照山の死骸は其顏の皮を剝いた上に土を塗り肛門に鎗を突刺した儘俵に入れて秩父の山中に委棄されてあつたが、今ならば新聞の三面種として大々的に報道される事件であるけれど、血に渴し肉に飢えたる其昔自由黨の壯士連には此樣な慘劇は朝飯前の仕事であつた、豫て其筋から睨まれてゐた彼は此虐殺事件に關係したと無理に羅織せられて、明治十七年大阪に捕へられ謀殺敎唆罪として禁獄十二年の宣告を受け、北海道樺戶に慘風悲雨の苦楚を嘗めた

▲綠は濕ひ紅は沈む●●●●●憲法發布の特赦に依りて出獄した時は、時勢は急轉直下して彼をしてまた當年の活躍を許さなかつた、爾來十年の歲月は如何に彼の運命を支配したか、冥茫として今之を知るに由ないが、三十五年の總選擧に始めて高崎の逐鹿界に現はれたけれど大河内輝剛のために破られ、翌年の競爭にも失敗したが、三十七年に漸く月桂冠を獲て議政壇上の人となつた、併し此時旣に彼の時代は過ぎ去つて四ケ年の任期中幾んど彼の存在は認められずに終つた、想ふ昔し濱殿々南の莊、

酒を執り詩を賦して共に海棠を賞したる同盟の士今何處にかある、綠は濕ひ紅は沈んで悄として力なきもの彼一人のみでない、名士の凋落は實に傷心慘目の至りである

▲空しく駭く曉窓の夢　彼は今日暮里金杉二六六といへば御行松より一丁許り隔りたる處に寓居しをれりと聞いて尋ねたけれど容易に見當らず、漸ととある路次の奥に天野次郎といふ標札のあるに若しやと訪なへば三十頃の主婦らしき人出で來りて『宮部は先程外出して今留守です』と答ふるに、面會の機會を得なかつたのは殘念であつたが、打見たる家の樣子から、彼の身の上にも今は時ならぬ秋風吹きわたり、洒落でもなく風雅でもなく、しやう事なしに此都の片ほとりに詫住居してゐると見て取つたのは僻目か、天無情、人無情、杜鵑の聲に曉窓の夢屢々駭かるゝ彼はまた薄倖の身の成行を啣つ一人であらう

鹽谷方圀

日露戰役後の日本の財界には旅順、奉天の激戰より、もつと大なる戰爭があつた、事業熱の勃興に株式の昂騰に寄せては返し、返してはまた寄する波瀾に乘じて幾多の雄將猛卒轡を並べて陣頭に現はれ、吾こそ成金の功名を博せんものと玆所を先途と奮鬪した結果、或は朝に一城を屠り夕に一壘を陷れたる戰勝者あれば、或は劒折れ馬倒れて無殘の最後を遂げた者があるが、其敗戰者の中に鹽谷方圀の名を見ることは實に痛心の限りである

▲財界の敗戰者　彼が谷將軍と共に熊本籠城の一勇士であつた事や、日清戰役中第一軍の兵站監として活動した事や、陸軍大學校長、要塞砲兵監、對馬警備隊司令官等に歷任した事や、また日露戰役中第七師團長として留守役を勤めた事抔は玆に繰返す必要はない、記者は曾て彼が威海衛占領軍司令官として任に在る時、同地に遊

び其颯爽たる英姿に接して畏敬の念を拂つた事があるが、彼は素より赫々たる武勳もないけれど、軍人として相當の地位を保つた人物だから、若し彼にして其本領を守つて居たならば死後の榮譽を得る筈であるのに、惜むらくは戰後の流行熱に冒されて慣れぬ商法に手を出した爲め、千軍萬馬を物の數ともせざる彼も財界の一戰には脆くも失敗して、あたら其歴史を汚すに至つた

▲鯨山に登る　士族の商法に失敗したのは獨り彼のみでない、日糖社長酒匂、常明なども其一人であつて其の士道を重んじ潔よい自殺を遂げた事は今でも一つの語草になつておる、思ふに彼が日本水産會社の社長になつたのは無論擔かれたのであらうが、海の商賣をする會社が其資本金を山林に流用し、所謂鯨が山へ登らうとするならんかは寧ろ滑稽の沙汰で、其當時花井博士が法廷に於て『本件は山水の美を盡してをる』と喝破したのには覺えず失笑せざるを得ない、よし其裏面に如何な事情があつたにせよ、彼としては其表面の責任を辭する譯にいくまい聞く處に依ると此事

件が破綻した時は三百萬圓（拂込七十五萬圓）の會社の金庫には現金剩す處僅かに九十何錢であつたとは驚くではないか

▲法律にも涙あれ　果然法律の制裁は日糖と同じく此事件にも及んで鈴木久次郎の如きは其處分を受けて疾くに自由の身となり、又た隨分長い月日を費した日糖事件さへも愈々最後の判決があつて全く落着したのに拘はらず、彼に對する裁判問題の今に未了の儘に殘つてをるといふのは頗る奇怪なる次第ではあるまいか、其理由としては彼が病氣今に全快せざるため法廷に出づること能はずといふにあるが、彼の病氣も隨分長いもので裁判所も氣永く待つてをるものだと訝かるものがある、理窟を言へばさうでもあらうが、いくら法律とはいへ世間の事は單に理窟ばかりで通れるものでなく多少血も涙もなくてはならぬ、既に表面の理由さへ立つてをれば、夫れ以上根堀り葉堀つて摘發するにも當るまい、況して彼も既に社會の刑罰を豪つたのを自覺し今は位階を返上して大森の海岸に蟄居し謹慎の上にも謹慎の意を表して

るからは、此上所謂死屍に鞭つといふのは餘り冷酷である、病氣は何處までも病氣たらしめよ、彼も今蒼烟を啼破する杜鵑の聲に血涙を催ほす一人であるかと思へば寧ろ其境遇に同情すべしである

▲餅は餅屋　日露戰役後の事業界には役人の古手を擔ぐことが大分流行したが、酒匂の死や彼の末路は幾多の敎訓を世に殘し、堅實なる事業の發展は單に看板だけでは期せらるゝものでない、必らずや實力あり經驗ある人の手腕に俟たねばならぬことを實地に證據立てたのである、餅は餅屋、肴は肴屋、適材を適所に用ひねば何事も失敗の基、世の後進たるもの彼が成敗の跡に就て深く鑑みる處ありて然るべしと思ふ

土居光華

瀨をはやみ岩にせかるゝ瀧川のわれても末に逢はんとぞ思ふ心は即ち自由黨勃興の

際幾多の志士の抱ける希望であつた、雪降らば降れ風吹かば吹け、限りある身の力を試して驕て來る春を迎へんと惡戰苦鬪した人の中で土居光華などは異彩を放つた突飛な連中であつた

▲突飛といへば　此頃神田多賀羅亭でルーソー誕生二百年祭が行はれたが、今から卅年前頃ルーソーは民權家の間に渴仰せられたるもので、其民約論はスペンサーの『社會平權論』ミルの『自由の理』などゝ共に一般に愛讀されたものであつた、彼も亦ルーソーの信者で明治の初年鄕里の淡路から東京へ上つて壯士の群に入つたが其時分の壯士といふのは今のとは違つて孰れも氣節のあつたものだ、玆で一寸註譯をしておかねがならぬのは、西鄕、木戸、大久保抔も元を糺せば壯士であつたといふことだ

▲破壞黨の旗頭　同じ突飛な連中でも彼は爆裂彈を投たり匕首を懷にして徘徊するやうな眞似はせず、專ら演說と出版とに依つて民權論の鼓吹に努めた、即ち明治十

一二年頃同志荒川高俊、山川善太郎、片岡泰一、瀧川長敬、新井毫、漆間眞學等と北辰社といふ政社を設け、淺草の井生村樓、兩國の中村樓など今の錦輝館といつた格の處で頻りと演說會を開くと共に、北辰雜誌を發行し極端なる議論を吐いたので當時の政界よりは破壞黨、無法組などいふ綽名を附けられて此節の社會主義者以上に恐がられたものだ、無論其間には口禍を買ひ筆禍を蒙つて罰金、禁獄抔は朝飯前の仕事であつた

▲毀譽紛々　五十萬人、二百五十通といふ國會願望書は出る、北辰雜誌は手綱なき馬の如く荒れ廻つて益々氣焰を吐く、政府も之に手古摺つて新聞條例、集會條例を發布したが、之に對し彼等は暴政路易よりも甚だしと激昂し三條、岩倉等に面會して其撤廢を要求した時抔は隨分粗暴過激の振舞があつたが、併し一面に於ては當時の政論家は相當の收入があつた事として、なか〳〵豪遊を極めたもので、現に彼が築地躍金樓に國會願望書を携へて上京した片岡、河野等を招待した時は一夕數

百金を費したこともあつた、此樣な事で彼は同志の間から政府の犬でないかと疑はれたが、また彼が北海道官有物拂下問題や藤田組贋札問題等に對し平素の過激論に似ず穩健の說を唱へたことも亦た自から疑を招く基となつて彼に對する毀譽褒貶は相半ばした

▲東海に曉鐘を撞く　國會開設の詔勅が發せられて愈々花咲く春も近づいたので彼は靜岡に赴いて岳南自由黨を組織すると共に、前島豐太郎等と『東海曉鐘新報』を發刊し、東京の自由出版會社と相呼應して政治知識の開發に努めた、當時東京に於て豫約出版を始めて遣つたのは此出版會社の外に南鍋町に鳳文館といふのがあつたが、時事新報社は即ち其鳳文社の跡である、此時代に彼の著譯したのにバックルの『文明史』ミルの『自由の理』等があるが一時は所謂洛陽の紙價を高からしめたといふことだ

▲一將功成萬骨枯　彼は所謂亂世の英雄である、愈々秩序正しく憲政の治を布いて

後は最早用のない人間となつたのみならず、彼の目的は既に達し爲すべき事は爲し終つたのである、夫で議會が開けると彼は我事成れり矣とばかり鄕里に隱遁せんとしたが、芳川顯正の勸めに依つて暫時東京府の學務係の主任を勤め、其後三重縣から選出されて一度代議士となつたけれど、野心を當世に絕つた彼は又もや政界から退いて、今は伊勢の松坂に閑日月を送り、舊門下生なる男爵山內萬壽治、藤田四郎等の扶助により辛うじて生活を支へてをると聞ては聊か同情に値せざるを得ない、素より先憂後樂は其期する處であるが折角苦辛して培つた憲政の實をやう收めないで、風物蕭く悲酸の裡に老の身を歎く彼は抑も何たる不幸ぞや、併し一將功成つて萬骨枯るゝ世の中、彼の落拓も亦己むを得ないだらうと諦めるとしても、彼が意氣雲を凌がんとした往事を回顧すると是も感慨の種である、而して當時の同盟は今まで四散し山川荒川は死し新井は非業の最後を遂げ、片岡、瀧川は何時の間にかソッと口を拭いて嚴めしい裁判官に成濟し、漆間は東京で通信社をやつてをる、是も亦

た今昔の物語だ

辰巳小次郎

彼を蕭瑟たる秋颯の聲なりとせば、是は駘蕩たる春風の韻なり、是に雲間の翠巒影縹緲たる趣あれば、彼に天際の奇峭勢嵯峨たる觀あり、其昔し『國民之友』と『日本人』とが思想界を代表せる二大潮流として相對峙し、前者の進步主義、平民主義を喧傳せるに反し後者が保守主義、國粹保存主義を皷吹し、花紅柳綠、とり〴〵の異彩を發揮したるは明治文壇の壯觀として見るべかりし

▲政敎社の一俊才　就中『日本人』は杉浦重剛を中心とせる政敎社の一團が銘々の氣焰を吐くために發行せるものにして、社中三宅雪嶺あり、志賀矧川あり、井上圓了、島地默雷、今外三郎、松下丈吉、中原貞七、菊地熊太郎、鈴木券太郎、棚橋一郎、杉江輔人、宮崎道正等其多くは或は札幌を出で、或は赤門を潛りたる腕白盛の

少壯學士連にて昔の尊王攘夷論に返り花を咲かせ其雄健豪宕なる保守的論陣に一勢力を張れり、我が辰巳小次郎また政教社の一俊才として名を知らる

▲音も香もなし　彼は文學士の古顔なり、明治十四年都築拳六、嘉納治五郎、坪井九馬三、田中稻城、故末岡精一等と共に大學を出で夙に歷史と哲學とに趣味を有してまた頗る造詣する處あり、『萬國小史』『萬國史要』等の著述と共に大學豫備門（今の第一高等學校）其他に於て教鞭を執りしも、彼は學究を以て甘んずるものにあらず、廿一年政教社の生るゝと共に浪人組の仲間入をなし、歐化主義と戰ふて奮鬪酣なる際、淺草區より起ちて第一回の總選擧に鹿を追ひしも高梨長髮をして名を成さしめたるに閉息し、爾來十年の星霜を講壇の上に送れる間、三十一年一たび淺草區長に選ばれしも在職僅かに五六ヶ月にして辭職し、是よりして幾歲の風雨彼が歷々たる雄心を磨し去れるにや、音も香もなく辰巳小次郎の名は全く世に埋沒されたり

▲空しく陋巷に老ふ　五月雨るゝ今日此頃彼を淺草北三筋町六十番地なる寓居に訪

ふ、徒らに世に負きたる酬は簞瓢屢々空しといふ程にあらざるも生活上の苦鬪に惱めるにや、家の構へ頗る振はざるに他をして時ならぬ秋風落寞の情を催さしむるも、彼は天命を樂んで陋巷の裡自から自己の天地を拓けるものゝ如く、例の應接に遑あらざる急調にて語る

政教社は吾々浪人が金を出し合せて拵へたのですが、浪人とはいへ其時吾々は相當に飯だけ食つて行ける道はあつたのです、吾々同志が『日本人』に書いたことは今から言ふと所謂危險思想で、彼の大隈伯が足を折られたのも、亦た森有禮が殺されたのも吾々直接に手を下したのではないけれど、吾々の書いた議論が是を促したのかも知れないのです

今日では新聞でも雜誌でも其書いた事に對し反響が少ないが、吾々が遣つた時分は多少天下を動かしたものです、而して吾々時代の大學出身者は多少覇氣があつたが今のは駄目ですなあ、教科書でも吾々の書いた時は自由に筆を揮へたが此頃

は一定の型があつて著者の腕を示すことは困難です

と彼は其懐舊談を試みたる後目下の境遇に至り

今では時代に後れて下手な理屈は通用しない、偶々言ひたい事があつても吾々の議論は相變らず矯激で當局者から睨まれると飯の食ひ外しになるから先づ鳴かず飛ばず緘默を守つてゐるのです、尤も安心して飯が食へるなら活動のしやうもあるが貧乏に追はれては手も足も出ない調子で今は東洋大學や今川小路の專修學校其他二三の學校に關係しておるのです

當時の同盟も其後いろ〳〵に變遷して死んだ者もあれば松下の如く銀行に居る者もあるが僕などは最も落魄しておるのです、併し上には上があるもので僕よりもまだ社會の下層に沈淪してをるものがあるといふのは人間の運命も妙なものですなあ

と、灰吹も碎けよとばかり打おろす煙管には力あるも、當年雲を凌がんとする意氣

も今も伸ぶるに由なく、空しく市井の間に老いて名馬櫪の恨みに堪へざる彼の心事果して如何、左るにても曾ては平民主義の急先鋒たりし其人の今日官僚の門に膝を屈せるに引換へて、保守主義の皷吹者たりし老博士が依然政敎社の殘墨に據りて藩閥打破を絶叫し、時にルーソーの紀念會に出席して氣焰を吐く抔、世態人事の推移に對しては何人も今昔の感なきを得ざるべし

草間時福

『人間爲吏亦風流』とは確か岩村通俊が曾て口吟だものと記憶してゐる、其弟の高俊の勸めで政府の祿を食ひ始めた草間時福の今の襟懐はまた此樣なものだらう

▲昔に變る今の身　航路標識管理所長從四位勳三等といふ肩書から見ると鰻上りの俗吏か但しは學士の古株でもあらうかと思ふが、焉んぞ知らん元は野育ちの一廉の政治家で曾ては島田沼南、尾崎愕堂抔と一緒に隨分荒れ廻り嚶鳴社でも腕利の一人

であり、しならんとはだ、彼は京都奉行興力の家に生れ安井息軒、中村敬宇の塾を經て慶應義塾に學び、小松原や尾崎抔と前後して卒業した後、末廣重恭に知られて明治七年に曙新聞に入り新聞記者の生活を始めた、間もなく地方の事情が知りたいといふので松山に赴き英學校長や中學校長をしてをつたが十二年にまた東京に舞戻つて朝野新聞に入り末廣を助け當時操觚社會の雄たる日々の福地、末松、報知の矢野、藤田、毎日の沼間、島田等と相對抗して堂々たる筆陣を張り、次で毎日新聞に轉じ傍ら嚶鳴社にも加はり同社を代表して國會請願運動にも掌はつて地方に遊說にも出掛けたが、明治十四年改進黨が組織せらるゝ際、彼は昨日まで政府に居て自分共が攻擊の的にして居た大隈伯を其首領に戴くのは面白くないといふので憤然として大阪に去り、中島信行、古澤迂郎抔の經營してをる立憲政黨新聞に入り自由黨の別働隊として大に活動した、其後彼は越後長岡新聞社の聘に應じて、北越の文壇に雄飛せしのみならず、板垣、中島、馬場等の名士を迎へて自由民權の氣勢を皷吹

する事に努力したが、再び東京へ歸つてからも曾根俊虎、金子彌平等と共に講話會なるものを組織し支那問題に就て中々氣焰を吐いたものであつた

▲平凡なる官吏生活　當り前の道行を踏むなら、夫から國會が開けた後は代議士に打て出て今では島田、尾崎、箕浦、肥塚抔と肩を比べて政黨の首領株となつてをる筈だが、明治十七年彼は如何に心機を一轉したのか、遞信省に入つて政治界から姿を掻消した、以來茲に約三十年、其間の官吏生活は前半生の波瀾に富めるに引換へて頗る平凡單調なるものであつて、即ち遞信書記官、燈臺局次長、郵便貯金管理所長、遞信省參事官、郵便電信學校長、郵便電信局長を經て三十一年に現職に轉じてから茲に十五年一日の如く忠實に其椅子を守つてをるといふのは彼も中々辛抱強い男である

▲同じ高嶺の月　思ふに當年急激なる政論家であつて後五斗米を爲に身を官界に投じた者は小松原英太郎、古澤滋抔の極端なのは別として、或は大臣となり或は知事

局長となつた人は珍らしくはないが、彼の如く明治政府の循吏となり脱兎から處女の態に激變した者は稀らしいだらう、左はいへ世は政黨界に官界に行屍走肉累々として徒らに名利權勢の爭奪に苦悶せる裡に在りて、縱令ひ官吏とはいへ燈臺守てふ風流の職に恬淡なる日月を送りて浮世を他所に見てをるのも彼としては自適の生活であらう、又思ふ、憲政の暗夜を照すべく自から提灯持を任じて曾て論壇に立つた昔と、狂瀾怒濤を捲く海上の暗を照して、航海者の友とならんとする今とは所謂異曲同工であつて、分け上る麓の道は異なれど同じ高嶺の月を見んとする其心は即ち一つであらう

▲今昔の感慨　彼は本年丁度六十歳で元氣旺盛で學識才幹も亦た凡俗の儔ではないが、モウ野心といふものはなく全く天分に安んじて其職務の爲に身を致さんことを期せるが如く、記者の爲に政界の昔物語をする序に航路標識が海國の日本に於ける重要なる事業たるに拘はらず、官民共に是に重きを置かぬといふ事を慨嘆して其

擴興の策に就て諄々意見を吐いたのには流石首肯すべき點が多かつた、夫れ世波の嶮惡なる、太平洋の海原も物かは、幸に覆沒を免かれて平和の港に碇を卸せる彼が今昔の感慨や如何に、左に掲ぐる近什に依りて之を窺ひ知らるゝであらう

某友自朝鮮歸相遇話舊以詩贈之

我初識君澱江湄、憑欄同賞碧漣猗、胸間磊塊說不盡、煌々銀燭照玉巵、底事世途忽變幻、踴躍似履薄氷危、讀史曾聞淸流禍、寧知今尙有如新、一棹滄州我泛海、陋巷環堵君伏雌、一別匆々廿余歳、雲山莽々夢空思、忽聞君拋筆、從軍遼東陲、又傳君賣劍、垂釣漠江磯、草堂梅花漸開花、幽居養痾掩荊扉、忽有剝啄故人到、一笑呼酒交喜悲、剪燈語盡當年事、別來歳月根毛知、百年昕々誰不朽、滔々走肉與行屍、諸君更引滿、人生是放懷、自此餘生遊會、共觀茂番傀儡上場來

山縣勇三郎

世人は實業界に山縣勇三郎といふ快男子の在つた事の記憶が今に新しいだらう、彼が鎭西から起つて北海道で名を擧げ、東京で敗れて南米に走つた歴史には憂き節し

げき數々の物語がある

▲北海の漂浪兒　彼は素と肥前平戸の武士の家に生れたもので、其容貌に現はすが如く幼ない時から豪放の資質を有つた麒麟兒であつた、二十歳の時、陸軍大將西郷隆盛が城山に見事な討死をした事を聞いて青春の血を湧かし、自分も大將になつて見たいといふ考を起し東京に上つて慶應義塾に學んでゐる內に、明治十二年福澤先生の獨立自尊主義に感化され自己の天地を北海道に開拓すべく破帽弊衣飄然として津輕海峽を渡つた、當時彼は素より懷中無一物で船賃さへ碌になく、薩摩守同樣にて漸く函館に上陸したといふことである

▲蛟龍雨を得　北海道へ押渡つてもなか〳〵取附く島はない、流れ〳〵て根室のどん詰りまで落て行つた處が、土地の富豪で且つ名物男たる柳田藤吉が何處の馬の骨とも知れぬ彼の才氣膽力を見込んで世話をしてくれたのが抑も出世の端緒、幾年か柳田の家に奉公してゐる內にソロ〳〵獨立の基礎を築いたので、漸と自家の門戸を

張り先づ海運業に手を出したのを始めとして、炭礦もやれば牧場も經營する、根かぎり精かぎり活動した結果は十年間に驚くべき成功をして明治三十年頃には山縣といへば北海道に誰知らぬ者なき一廉の實業家となつた

▲烏江の一敗　日清戰役を經て日露戰役前後の彼の景氣といふものは實に素晴らしいもので、本店を東京に置いて根室は元より函館、小樽、釧路から大阪にも支店を置き更に大連、秦皇島にも店を開き石炭を主として其他あらゆる事業に手を出し、尙ほ自から日本鑛業會社、釧勝會社を始め三四の會社を起して縱橫に辣腕を揮ひ獅子奮迅の勢實に當るべからざるものがあつたが、彼は鑛山其他の事業に手を廣げ過ぎ流通資本の乏しかつた爲め、總ての事業を遣繰算段で經營して振出した手形でも七百幾十號かを數へる位であつたので一朝手違を來たしてからは破綻百出終に收拾すべからず、三十九年の末には驚く勿れ三百五十萬圓といふ負債に首も廻らぬことゝなつて見事落城するの已むを得ざるに至つたのは、憐れ果敢なき最後であ

る、而かも彼は丸裸になつて奇麗に其借金を拂ふことに掛つたが、尙ほ函館釧路あたりでは巧みに零碎な資本を借集めてあつた爲め彼の沒落と共に破產した者も尠からず、今に其創痍に苦んで彼に對する怨聲を放つて、おる者がある、殊に當時函館では『火事よりか山縣の破產が恐ろしかつた』といふ噂が高かつた位である

▲南米に飛出す　同じ都落をしても彼は西海の波の上に漂ふやうなことはしない、彼は流石海國男子の本場たる平戸の者である、北海道で盛んに羽振を利かせてをる時分からモツと廣い南米に新天地を開拓したいといふ希望を有つてゐたが、其失敗と共に斷然志を決して四十年四月といふに萬里の鵬程を破つて伯剌西爾に渡航した、彼は素より此所を墳墓の地と定める考で、最近の消息に依ると渡航後煙花の製造をやり雜貨の製作販賣にも手を出したが思ふやうに成功せず今は雜貨商の傍農業をも經營して可なりに遣つてをるが、近く小林信といふ妻を日本から迎へ此頃生れた、子供は伯剌西爾の國籍に入れて一生懸命に稼いで追々は最初の理想通り此地

に自家の王國を建設したいといふ野心を有つてをるといふことだ、彼が果して此理想を達するや否やは疑問であるが、彼の手腕を以てすれば棹尾の奮躍必ず見る可きものありと囑望して居るものもある

▲明治の項羽　記者此頃園田前北海道長官に會し、談偶々彼に及びたるに園田男も頻りと彼の人物を稱揚して其有爲の才必ず捲土重來の時あるべきを、期待してゐた、彼はまた阿咯鉢羅婆の敎主西田頂法と竹馬の朋友たる關係で明治三十年頃から同敎に歸依してゐたが、西田も彼に就て語つて曰く、山縣は明治の項羽だ、覇氣餘りあつて機略に乏しく、時に股を潛る韓信を學ぶことが出來なかつた爲め終に烏江の一敗を招いたけれど決して醉生夢死に終る人間でないと、是も知言だらう、彼れ本年五十三、其魁偉なる容貌に伴うて敢爲の氣象に富み精力また頗る旺盛なりと言はるゝからには空しく南米の土に埋もれはすまい、縱令彼にして其志を得ないとするも其二弟たる中村定三郎、桂井定之助は北海道にあつて彼の遺業たる釧勝會

社を經營し、更に其二弟なる中村精九郎、同辰五郎は朝鮮に於て活動し是亦た既に產を成しておるといへば一門の再興敢て期し難きことはあるまい、要するに彼は快男兒である、北海に南米に到る處一世の智勇を推倒して萬古の心胸を開拓せんとする覇氣は當世に珍とすべきものと言はねばならぬ、左はいへ彼も今はアマゾン河畔揶子樹繁る處に雲煙萬里遙かに故國の天を望んで、前に半生の波瀾起伏に想倒して丈夫一滴の涙に人知れず袖を霑はすことがあるだらう

石橋忍月

本能寺溝の深さ幾尺ぞ、我れ大事を成す此夕の有樣を寫して『惟任日向守』には斯う叙してある『頃は天正十年六月二日の昧爽、桔梗の九本旗を衣笠山の朝風に飜し勇卒三千餘騎を提げたる光秀、大手に向ひし左馬助光俊と遊軍として控へたる十郎左衞門光秋と相應呼して忽然鞭を東に揚げ、敵は本能寺に在りと叫たる數刻の後は

即ち惟任日向守明智光秀が世に鬼神と呼ばれたる正二位右大臣織田信長を生害せしめ其鮮血に染みたる燼餘の白綾衣を冷然なる笑の中に眺め乍ら又を以て之を貫くの時なりき』と、是は即ち石橋忍月の筆致の一端である

▲文壇の花役者　辯護士たる石橋友吉は平々凡々たるものだが、小說家、批評家としての石橋忍月は一時なか〳〵振つたもので、曾ては鶯鳴せた流行ッ兒であつた併し彼が中央の文壇に花を咲かしたのも早や二た昔の過去となつて今は唯だ追懷の情を人の心に留むるのみである、彼は素と九州久留米の出身で孤影颯然として東京に出て來た時は極り通りの貧書生で久しく山田奠南の家に書生をしてをつたが、苦學して豫備門から大學へ入學つたは結構な出來として、肝腎の法律には太した趣味はなく、却つてお門違の文學道樂に親んで學校に居る時から筆に任せて書なぐつたものをば新聞や雜誌に投書して忍月の名は早くから世間に知られた、其代り學校の成績は何時もビリで二十四年に獨法を卒業して時も八人の同窓生中最下等の成績で

あつたが、其時の卒業生はまた不思議に感心せぬ代物ばかりで今多少名の知られてゐるのは司法省の齋藤十一郎位のものだ

▲法曹界の俗物　石橋は大學を出ると直ちに內務省の屬官となり、夫を罷めて元田肇の法律事務所で辯護士を遣つて居たが、間もなく判事として金澤地方裁判所に赴任し、夫も久しからずして辭職し同地に辯護士の門戸を張つて居たが、相變らずの筆いじりと、根が本職の法律には餘り精しくはないといふから門前雀羅を張るといふ程でもないが商賣が餘り振はないのに、再び東京に舞戻り看板を掛けて見たものゝ相變らず碌々たるもので、而かも其頃は最早文壇に緣を絕つて居たから、何時とはなしに彼の姿は消失せ、知人は彼の所在を疑がつて居た所が、日露戰役當時彼の名が長崎捕獲審檢所の代理人とかで官報へ出てから始めて『石橋も今は長崎に居るかな』といふことが解つた位のものださうだ、併し長崎では今可なりの顏になつて市會議員にも選ばれ、辯護士會の評議員にもなつて、中々幅を利かしておるといふ

のは何よりだ

▲異彩ある文士　彼が一管の筆に盛名を傳へたのは明治二十四年頃から二十七八年頃であつたらう、彼の名を成した『露子姫』も其頃に出た『惟任日向守』は一十八年金澤で書いたものだが彼は小說家としてよりは寧ろ批評家として其得意の筆を揮つたもので『國民之友』抔には頻りと其寄稿が見へた而して彼の文學上の作品は當時の花役者たる紅葉、露伴等に比しては無論及びも附かぬものであつたけれど、第二流の作者として文壇の一角に領地を有し柳浪、思案抔と相並馳したものだ、而かも彼が專門以外の餘技として其絢爛たる文才を賣つたことは醫學士（其頃）の森鷗外と共に異彩を放つたもので、寧ろ彼が法學士であることを知らぬものさへあつた

▲花より團子　才子薄倖にして文士不遇なるは今も昔も同じことである、彼が飄然として筆を擲ち其本職に立返つたのも畢竟處世の上に顧みる處があつて、花より團子の妙諦に得道して文壇に於ける苅萱道心を學んだものだらうが、モ一度昔執つた

杵柄に親んで多情多恨の人となる氣はないだらうか『昔男と身はなりて殘る言葉の花はなほ春や昔の春ならぬとばかり今も匂ふなり』と古の歌人の追懷はまた彼をも偲ぶ種である

巖本善治

保元の春、壽永の秋、花と榮え木の葉と枯るゝ人間の運命は果敢ないものと昔しから相塲が極まつてをるとすれば何も不思議はないが、横井時雄といひ押川方義といひ、また金森通倫といひ昔は基督敎の名士として泥中の白蓮か紅蓮かと謳はれたものゝ、今は却つて其泥にまみれて世間から其人格を疑はるゝやうになるのを見ては聊か不思議とせねばならぬ

▲熱烈なる敎育家　惜い哉巖本善治も其一人に數へらるゝことゝなつた、彼は横井や押川、金森の如く牧師ではなかつたが、同じ宗敎の色彩を帶びた熱烈な女子敎育

家であつて而して又た神秘的の文學者であつた、彼の經營した明治女學校は基督敎に大和魂を加味した男子的の女學校で、其堅實にして且つ進歩した敎育の方針は當時儕輩の間に異彩を放ち所謂巖本先生の名は全國の女流から多大の尊敬を拂はれ、隨つて其校門頗る榮え幾多の閨秀を養成して社會に送り出したのである、此點に於て彼が日本の女子敎育に貢献した功勞は特筆すべき値ありとして敢て過賞でない

▲神秘的文學家　明治女學校と前後して明治十八年頃呱々の聲を擧げた『女學雜誌』も亦も男子的の婦人雜誌であつて『國民之友』と兩々相對して男女青年の間に盛んに愛讀されたものであつた、彼の筆は燦爛花の如き趣はなかつたけれど、熱情溢るゝが如く一種人を魅する魔力があつた、而かも『女學雜誌』が文士を世に紹介したことは『國民之友』なぞの迚も企て及ばざる處であつて、石橋忍月、山田美妙、樋口一葉、北村透石、島崎藤村、馬塲孤蝶、戸川秋骨、櫻井鷗村、青柳有美、星野天知等一々縷指するに遑ない、斯て彼の名は明治の文壇からも逸することは出來ない

名譽があつた

▲錦上花を添ふ　日本女子大學の生れたのも彼の贊助に待つ處が多かつたが、彼は成瀨仁藏の如く權門に取入ることが出來ない、また成瀨ほどには押が強くない、餘り理想に走つた上に多少狷介な質があつて、學校、雜誌ともに其經營が時代の風潮に一致せぬ爲に雜誌先づ滅び、學校も次で明治四十年頃閉鎖の已むを得ぬことゝなつたのは、獨り彼れ自身が愛兒に別るゝ思ひがしたのみでない、世間でも亦駒からざる愛惜の念を殘した、愛兒といへば彼の愛妻たる若松賤子が『小公子』の著者として閨秀文學家の名を博したこともまた彼の盛名に一層の光彩を添へた

▲甚だしき矛盾　輓近彼が內外調査通信社に失敗し、明治殖民會社亦毀譽の矢面に立ち殊に私德上種々忌はしき風說の傳はつておるのは彼の爲に頗る惜むべき次第であるが、縱令之が訛傳であらうとも亦た中傷であらうとも、純潔花の如く曾ては人道を鼓吹し神聖の愛情を說きたる敎育家、詩人の今は惶々として貨殖の道に奔走し

所謂彼れ是れ屋の一人に數へらるゝに至つたのは甚だしき矛盾ではあるまいか、是に就て彼の門下生は斯ふ語つて居る

▲批難は誤解　『神秘的の詩人に往々矛盾のあるのは敢て珍らしくはない、彼は眼高手低の人だから爲ることが時勢に合はず、又少し調子外れのことがあるのもまた怪しむに足りない、彼はまた世間の毀譽褒貶に頓首せず其信ずる處に邁進することがあるから往々世人から誤解を招くことがある、夫の批難の的になつた殖民會社でも素より彼の經營の拙かつた事もあるだらうが、其同志や知人の爲に卷添へを喰つて共に深水に陷つた跡もある、ソンな事で今は隨分惡聲を放たれ又借金にも苦んでをるだらうが若し彼の眞價を發揮せば彼は昔の巖本先生たる本領は失なつて居ないだらう』と記者は之に對して其當否を判斷するだけの根據を有してをらぬが、兎に角彼は今當世に志を得ず、巢鴨庚申塚の殘壘に落魄の生活を營みをるといふことだ、押川といひ横井といひ彼といひ慣れぬ道に踏迷うて溝壑に轉じ容易に起つ能は

ざる境遇にあるのは痛惜の限りである

朴泳孝

大和島根の櫻花、高麗百濟の地にも植られて八道の山河また旭日に匂ふ今日此頃となりては朴泳孝も亦た一個の日本人として茲に其今昔を語らねばならぬ

▲日本の親友　朴泳孝とは朝鮮人の名であるが山崎永春と云へば金玉均と共に我國には誰知らぬ者なき數奇淪落を極めた亡命客で昔を思へば實に隔世の感は催さゞるを得ない、思ふに彼が開化黨の領袖として乾坤一擲の改革事業を企て或は志を得ずして前後十數年の慘風虐雨を我國に於て嘗め、或は又た一躍して大臣の印綬を帶びたる等の波瀾曲折せる閲歴は朝鮮興亡史に於て逸すべからざるものであるが、其大體の骨組は普く世人の知る所であるから其所は端折つて今茲には彼が最近の動靜を報ずることゝしやう

▲最後の波瀾　七顚び八起きせる彼が一生の行藏に於て最後の波瀾とも見るべきものは明治四十年に起つた所謂丁未の政變であつた、當時宮內府大臣たりし彼は如何に血迷つたか日本黨たる宋、李の一派を排斥して一仕事を目論見たが、皇帝禪讓の突然行はれた爲に其計畫も畵餅となつたのみならず、一年間濟州島に流配さるゝ事となつたのは自から招く罪とはいへ哀れにも亦たみじめなものであつた、刑期が滿ちてからも彼は京城の地が未だ自己を容るゝに便利ならざる事を看取したるものにや、其儘島に駐まつて果樹の栽培抔に閑日月を送つて居たが、年は四十二年となつて故國は日本の保護の下に文化に浴しおるを聞いて彼は歸心矢の如く翌年の春舟を艤して釜山に上陸した、此事を記すにつけても其昔し丹波の少將成經が鬼界ヶ島から都に還つて『故郷の花のものいふ世なりせば』の歌を口吟みたることも思出さるゝのである

▲昨非今是　釜山に暫し滯留しておる內に其年の九月に韓國は終に日本に合併され

幾十百年間か京城の空に渦捲きたる陰謀も野心も亦た權謀術數も悉く消へ去つて和風麗日、皇化に浴することゝなつたので、彼は四年振で漸く都に還り北暑校洞なる舊錦陵尉邸に入つて三徑荒に就きたるを修めて、始めて今の是にして昨の非なることを覺つたのである

▲身に餘る榮譽　合併の功に依り彼は皇室の近親たる故を以て當年天涯流離の亡命客、今は受爵者中の最高位たる侯爵に叙せられ之と同時に恩賜金參十餘萬圓といふを授與されて身に餘る光榮に浴し近く明治天皇の御大喪儀に列するため朝鮮の貴族を代表して上京したが、彼たるもの若し時勢の變化に顧み一身の浮沈を極めたる過去に省み、更に夫の上海に於て殪れたる亡友の事を想はゞ、聊か忸怩の念に禁へないものがあるだろふ、併し半島の事既に定まる今日に於ては何事もモウ言ふまい

▲老後の計　彼は今忠良なる陛下の一臣民となつて居を東大門外なる草圃の中に卜し恩賜の金を投じて子孫の爲に土地を購ふことに汲々たると共に、傍ら朝鮮貴族會

長として泰平の日月を送つて居るが、唯だ多年流離する間に於て其正妻(朝鮮人)に嫡子を設くるの機を失し曾て日本に亡命中山崎某女に依りて產みたる男子があつて今は母子共に彼と同棲せるも、直ちに之を嗣子とする事の出來ざる事情があつて尠からず其頭を惱ましておるといふが、浮世の儘ならぬは獨り彼のみかは、唯だ彼は命長ふして耻多しといふレコードを破つて甘く危ふき綱渡りをして來た爲に今日棚からおこつちた牡丹餅を喰ふことの出來たのに恭悅せねばならぬ、ア、彼は何處迄も朝鮮人である

小手川　豊次郎

『サアさ僕が法學博士の學位を得て米國から歸つたのは明治二十七年だ、直ぐに日本銀行へ這入つて月給取になつたが、三十三年に罷めた後、自由黨に投じた、間もなく政友會が出來て政務調査委員にもなり、黨報の編輯もやり、演說に文筆に隨分

提灯持をしたが、二年前此方金儲けに掛つて今は全く世間の事は擲つてをる

▲猛烈な奮闘振　僕の理想は百萬圓の金を造るといふのだ、是が出來る迄は全く坊主になつた積りで世間の毀譽褒貶を度外に置いて奮闘する　考だが、唯に考ばかりでなく今は朝から晩まで算盤を提げ手形を握んで蝸殼町と兜町の眞中で頻りと奮闘をやつてをる、今僕の關係してをるのは戌申銀行であるが、迚も世間並の事をしては金が出來ないから、頗る猛烈な遣り方で日歩抔も二錢とか三錢位では追附かない五錢十錢甚しいのは十五錢からの日歩で貸附をしてをる

▲三年飛ばず　百萬圓が出來るまでは一切世間へ顏を出さない積りで、成るべく世人から小手川なるものを忘れて貰ひたいと思つてをる、經濟上の意見でも言はせるなら阪谷でも山本でも添田でも負けはせぬが故と口を緘んで所謂三年飛ばず鳴かずといふ流義を學んでをる、だから小手川といふ名前が今は新聞へ出さるゝことも好まない、併し僕は今でも修養は怠らない、西洋の書物、雜誌抔は絶えず讀んでをる

經濟評論といふ自分の機關雜誌も有つてをる

▲現實だ〳〵　百萬圓を拵へることが空想に終るか、但しは實地に現はるゝか暫らく見てをつてくれ玉へ、僕は今年四十五だが、まだ是からだ、併し金錢は誰も愛するものであるけれど夫を口に出すのを好まないものだ、拜金宗の米國抔でさへ餘り是を口にしない位だから、僕も不言實行で先づ一生懸命に溜める事に掛るつもりだナニ金を拵へてどうするつて？、金は棺へ入れて持つて行けるものでないから、僕は百萬圓の理想が達せられた曉には之を以て大に活動し、言論に文筆に世を驚かす積りだ、今から考へると發心の時機が後れた、日本銀行を罷めた時直ぐに掛つたら今頃は少し出來てをるが、併し後れたりと雖も爲さゞるに優れりだ、日本銀行の二階で政友會本部で吐くやうな氣焰や理窟を言つて居ては迚も金は儲けられない、現實だ〳〵是から現實に溜める考だから僕の理想の達する迄は日頃懇意にしてをる好みに今僕の事を新聞に書くのは免してくれ玉へ』

▲是も今昔の感　記者が此程神田松永町二十四番地なる彼の寓居を訪ふた時に彼は斯ふ語つた、彼が其新聞に書いて呉れるなといふ意味は全く世間から忘れられんとするにあるかどうかは知らないけれど、彼が今此理想に向つて進んでをる事も亦たし一個の主義として敢て批難すべきことなく、却つて彼の意志の強固なる事を現はすのであると思つたから、茲に彼の談話を其儘に紹介したのである、任他彼が當年の性行を知るものは今日能くも斯く節を屈し翼を收めて隱忍してをるものだとまた今昔の思を催ほすであらう

▲挨拶よりも金札　彼は單に勤儉を口にするのみならず、是れを行ひに現はしてをるといふのは、苟しくも銀行の重役樣と言はるゝからは電話の一つもあり、門構への家位には住んでをると思ひの外、路次奥の棟割長屋に其矮軀を横たへて見えよりも風よりも後生大事に例の現實主義に向つて猛進してをる事があり〳〵と讀まるゝ世の中は挨拶よりも金札、阿彌陀も何とかで光るといへば、彼が大に溜めて他日大

に飛躍する其時を期待して切に其成功を祈るのである

吉沼又右衛門

人間の運命は朝露夕電、鎌倉三代の覇圖夢よりも淡く、ソロモンの榮華野の百合にだに如かずといへ、忽にして咲き忽ちにして萎める時計商吉沼又右衛門の如きは蓋し稀ならんか

▲興亡の變如何　今より十四五年の昔、土一升金一升と歌はるゝ日本橋通りに七階建の洋館が雲突くばかりにズッと現れたる時、世人は如何に驚異の目を睜りしよ、岩谷松平も一たびは銀座に其天狗の姿を現せしも、無名の一商賈が花々しく此所に乘出して滿都の有象無象の鐚珠を爭ふを冷笑するが如き態度を示したるに魂消しには及びも附かざりし、抑も彼は如何にして興り如何にして滅びたるか

▲本の雫は末の流れ　彼は若尾幾造、雨宮敬次郎、小野金六、根津嘉一郎等を出し

たる甲州の產なり、幼名を有泉新次郎と稱し、其本家は維新前横濱本町に泉又といへる有名なる綿、砂糖問屋にて黃金花咲く富裕の家庭に生れたるも、滊船の沈沒と店舗の火災とに逢へるため身代瓦解し、昨日に變る裏屋住ひとなれる激變に、彼は十一歲の時東京に出で當時兜町に仲買を營める吉沼又右衞門の家に小僧奉公として住込みしが、多年忠實に立働らきたる甲斐ありて其養子に取立られ玆に養父の名を襲ぐと共に、打續く不景氣に仲買を廢業し僅かなる資本にて時計業を始めたり

▲榮枯掌を反す　コツ〳〵と針の進むと同じく彼の商賣は年と共に繁昌し、二十五六年頃には早や都下屈指の店となり、傍ら小石川初音町に時計製造所を設け營業次第に手廣くなると共に、彼は大通りに出でゝ一旗擧げんものと通二丁目に彼の宏大なる家屋を建築せしは明治三十年なりと記憶せり、當時彼は盛んに新聞の廣告を利用し、又た其賣品に保險を附する新機軸を開き更に支那に向つて輸出を創むる抔商運隆々一ケ年の賣上高二十五六萬圓の多きを算して銀座の服部、八官町の小林等

と雖も其脚下に寄り附くべくもあらざりしが、功成り行滿るの士は其末路を觀るを要すといへる金言人を欺かず、即ち禍機は此時を以て發生し、勢に乘じて四方八方に手を伸したるに破綻白出、終に收拾すべからざるに至り、七階樓上臥榻に肱を張りたるも束の間、僅かに四年にして左しもの城廓も相手もあろうに諸行無常を敎ふる日宗生命保險會社に賣渡し三十四年南傳馬町に退却したるも、附纏ふ債鬼の征寄するに陣中美人あるも四面楚歌の聲また奈何ともすべからず、日露干戈を交ふる三十七年の春、終に一門瓦解して西海ならぬ横濱に落行きしは春の花と榮へし保元の昔に引換へて、秋の紅葉と散りはてぬ壽永の今となる平家の都落も思ひ出されて、唯盡せぬものは涙なりと言ひたげなり

▲肉眼盲して心眼明　東京に破れて後彼は朝鮮に於て回復の計を立てんと三十七年渡韓して一時は大地主となりしも、又もや蹉跌して四十二年內地に退却するの已むを得ざるに至りしが、始終彼の身に附纏ふものは獨り債鬼のみならず、彼は今ま疾

のために兩眼の明を失して黑白も分かぬ盲目となりし上に、持病の神經痛に兩脚の自由を失し澤市と勝五郎との病苦を一身に荷ふに至りしぞ何たる悲慘なる、唯だ家族の糊口としては松ケ枝町に花月とは名ばかりの小料理店を營めるも、之れ素より燒跡に釘を拾ふの類のみ、彼の前途は全く暗黑にして些の光明を認めざるに似たるも、彼の意氣は尙ほ旺にして往訪の記者に向つて左の如く語れり

失敗の原因は本業の傍ら各種の事業に手を出した爲ですが、此料理店は家族の內職で、自分は伜に羽二重の輸出を遣らせてをるのです、假令自分は目が潰れても

モ一度盛返して日本橋通りに打つて出たい考です

と、彼れ本年未だ五十に滿たざるを以つて再擧の策なきにあらざることを信ずると共に其の前途を祝福するの情に禁へず、然れども今日朝夕通ふ電車の中より南傳馬町に所謂燒野が原の跡を見、同じく通二丁目に日宗生命の寂滅せし後を目擊する者は誰か一念彼の榮枯盛衰の速なるに想到せざるものあらん、世は生者必滅、會者

定離、浮つ沈みつ流れ行く樣は是非もなき次第なり

横井時雄

寥落百年の事、徘徊萬里の憂、自己の今昔を想ひ較べて燈下人知れず涙に搔くれるものは尠なくあるまいが、横井時雄も亦其一人であらう

▲名門の出　彼は名門の出である、幕末に横井小楠といふ達眼の開國論者があつて藤田東湖、佐久間象山、吉田松蔭等と並馳して王事に盡したことは今更繰返す迄もない、今や廣澤參議の後が伯爵となり、大村益次郎の銅像が九段坂上に屹として聳えて居るから見ても、彼も父の勳功の餘澤を蒙つて疾の昔に華族になつてをらねばならぬ筈だが、幸か、不幸か、彼は早くから基督敎に志して所謂切支丹邪宗門に歸依した爲に、固陋なる當時の有司に嫌はれ、自分も亦人爵よりか天爵が貴いといふ考へを有つて權勢に阿附しなかつた爲めに、トウ〳〵人並の恩典に浴する事が出

來ないで仕舞つた

▲昔の面影　彼は洋行仕込の翩々たるハイカラな信者ではなかつた、彼の有名な熊本花岡山の盟約に加はつた一人で當時熱烈燃るが如き信仰に無論一生を神に捧げる決心を有つて久しく牧師として高潔敬虔の生涯を送り、一たびは同志社の社長にまで推選されたが、名走利奔の浮世の風は左しもに道心堅固なる彼をも誘うて終に俗界に下らしむる事となつた、彼が政友會に入るや、百姓議員や壯士上りの論客の間では比較的新智識があり、また門地があるといふので自から儕輩の中に推重されて時に内務省勅奏に任用され、時に本部の幹事となり、時にまた東京日々新聞の主筆となる抔其縱横の才華を發揮し、其間また代議士にも選出されて相當に腕を揮ひ、即ち彼の活動は政界に異彩を放つたものだが、而かも夫は花一時の盛りで彼が政治家としての運命は誠に悲慘なものであつた

▲卑怯な振舞　齊一變して魯となり、魯一變して道に至るは正當な道行であるが、

彼は之を逆さまに歩んだ、彼が牧師から政治家になつたことさへ既に墮落であつたが、更に日糖事件連累者の内に彼の名を見るに及んで世人は彼の墮落の益々甚だしきに驚異の目み睜つた、此頃彼を知れる或人は語つて曰く、政治家の腐敗と云ふことは今では格別珍らしくはないが、泥中の白蓮と思つた横井までが濁浪の裡に捲込まるゝに至るとは滔々たる風潮の赴く所實に恐ろしいものだ、殊に彼が日糖事件に對する態度は卑怯未練を極めたもので、彼は臼井哲夫が一切の犯罪を我身に背負つてしまつたのと相反して甚だ潔からざる最後を遂げたものだ、彼は多年精神的の修養を積んでをるから今はの際となつては神の前にも人の前にも總ての罪を懺悔して謹んで法律の裁判を待たねばならぬ筈なるに、底事ぞ長谷場だの大岡だの擔ぎ出さいでも良い政友の古疵までを法廷にさらけ出し百方辯を構へて自分の罪を逃んとした彼の態度は如何に最負目に見ても同情する價値がない、更にまた彼は自已の天職上神の榮を顯はさなければならぬ立場なのに却つて其名を汚したるのみならず

亡父の名をも汚すに至つたのは返へすがゝも惜む可き次第である、思ふに臼井、栗原はじめ彼の事件の關係者は三人や四人の無心を云へる者があるが横井だけは其樣な者はないだらうと、是は或は酷評かも知れぬが兎に角彼は其本分を守り神の使徒として始終したなら明哲能く身を完うしたらうに、柄にない方向に道を踏迷ふたが抑も失敗の基で可惜有爲の人才を臺なしにしてしまつたのは痛恨の限りである

▲浮世の景象　一たび雲の梯子を踏外した彼は極り通り溝壑に轉じて轗軻不遇を極めたが、夫にしても彼が日糖事件の當時代々木に新築したといふ小邸宅は依然たるもので、森本駿なぞに較べると生活上の窮迫はないとしても、其打擊の大なるだけそれだけ復活の期も前途遠遠だらう、彼は知人の同情によつて此頃まで中央新聞社に隱れて筆を執つて居たが、今はまた元の浪人になつて浮世の下層に沈んで居る、左あれ人間誰か過なからん、神は人に悔改の美德を與へてあるから、彼も須らく其初心に立返つて一たび失つたパラダイスを取返へし是から其天分に從つて敬虔

な生涯を送り地獄の火の中に投入れられぬ覺悟を爲すべしだ、今や彼と同時に本部の幹事をしてをつて彼の爲に誘はれて不覺の罪を犯したと稱せらるゝ村松愛藏は一念頓悟し基督敎の戰士として彼の選擧區たる岡山に熱心神の道を傳へて居る、是に反して彼たるもの果して如何なる感想かある、後の雁が前になり、雲上の龍が海中の鱗となる浮世の景象は實にさまゞのものである。

高橋仲次

『彼の人は何うなつたらう』と回顧さるゝ者の内に高橋仲次といふ曾て官界の逸物たりし男あり

▲時めく閲歷　彼は鹿兒島の產、前の勸銀總裁高橋新吉は其兄にして當世に時めく長谷塲文相及び故河島北海道長官等とは『おいどん、わいどん』の親しき同輩なり、壯年の頃に西鄕南州の門下に養はれ、後警察官に身を起し漸次昇進して警部長とな

り、高知・神奈川其他各地に奉職し、殊に福島縣に於ては三島縣令の下に在りて其の辣腕を揮ひ、再び警視廳に舞戻り小倉信近等と肩を比べて一時、官房主事にまで進みしが、後藤伯の大風呂敷を擴げて天下の人才を網羅せる際、彼も亦其幕下に加はりて非常の信任を受け伯の農商務大臣となるに及び、書記官に任用され夫れより廿六年鑛山局長となり、更に山林局長に轉せり、當時彼は齋藤修一郎と相並んで農商務省の二人男と呼ばれたるも、大臣の辭職に續いて野に下り爾來十七八年間殆んど江湖に放浪して跡を晦ませり

▲當時の同僚　此の如き門地、出身、境遇を以てして彼は何故に然かく志を得ざるか、彼が時めく頃同じ局長として政府部内に肩を比べたるものには原敬あり、小村壽太郎あり、渡邊千秋あり、後藤新平あり、江木千之、小野田元熙、古市公威、阿部浩、松尾臣善、加藤高明、添田壽一、野田轄通、石黑忠惠、伊藤雋吉、川口武定、横田國臣、木下廣次、木塚貞長、藤田四郎、若宮正音、有賀長雄、田健治郎等

あり、是等濟々たる名士が今日の地位を爲せることを思はゞ、彼にして巧みに官界に游泳したらんには得意の天地は自から開拓されしならんに、孤憤世に負きしか、將た無能人に用ひられざるか、徒らに槽櫪の間に老ひて睢逝かざることを歎く今の身の上となりしこそ憐れなれ

▲薄倖の人　彼の知人は曰く高橋は豪傑風の男にして常に破天荒の事業をのみ夢み俗事に交渉することを好まざるを以て終に其志を成すこと能はずと、又曰く彼は氣ばかり大きくして腕に力なきを以て秩序整然たる當世には役に立たぬ人間なりと其の孰れか彼の人物を解釋したるかを知らずと雖も、兎に角彼が尋常の俗物にあらざることは均しく認むる處にして、風雲一たび會したらんには何事か仕出かして自己の存在を認めさすには已まざりしならんも、天無情、功名未だ遂げずして身先づ老ひ　今は鏡裡一莖の霜を見るの感に堪へざる彼も亦た薄倖の人なりとすべし

▲陋巷に蟄居　捲ては返す浮世の荒波は如何に彼を飜弄せしものぞ、曾て彼が芝山

内に可なりの城廓を構へしことを見たり、曾て彼が政友會創立當時に頭を突出したることを聞けり、又た彼が今に尙ほ高島將軍の家に出入することをも耳にせり、左れど埋木の花を咲さん春はなか〳〵に來らず、此頃彼が芝白金三光町三十五番地に蟄居せることを風の便りに聞きて三光阪下の心あたりを探せしも容易に其寓居を突留むる能はず、辛ふじて尋ね當り長屋門を潜り其家と思ふ處を訪づれたるに家賃七八圓位とも思はるゝ見るもいぶせき亞鉛板葺の平家に『尾上貞信』といふ門札の掲げあるより訝かしながら若や門違にはあらずやと試みに問へば『高橋は手前方です』が主人は今留守です』との氣の利かぬ女中の答に是が今にも正四位勳三等の肩書を有する人の住ひとは如何にも受取れざる程にて、彼も亦たひどく振はざるものなりと思ふ内に折から降り來る五月雨に言ひ知れぬ感慨を催ふしつゝ辭して歸りぬ

石田貫之助

成功不成功、得意失意、人間一代の波瀾起伏には自から降り來る運もあるがまた自から招ける業もある、兎に角勝てば官軍、負ければ即ち賊、浮世の落伍者として市井の間に沈淪する者の人から顧みられないのも亦た是非なき事である

▲石貫の名　を以て謳はれたる石田貫之助も今は敢なく生存競爭場裡から淘汰されたる一人となつた、彼は皿屋敷に名高き播州の土豪で早くから縣會に出で其議長時代は飛ぶ鳥も落さんばかりの威勢であつた、山陽鐵道會社の創立にも與かつて中上川社長の下に一廉の働きをした、其頃の山陽鐵道は神戸、姫路間だけ開通しておつたもので、中上川が姫路以西に線路を延長しやうと計畫した時に他の重役連は線路が長くなればなるだけ損をするからとて反對したといふ話があるが、展望車まで出來て新橋、馬關直行の運轉が行はるゝ今から考へると丸で夢のやうなものだ

▲當年の逸物　明治二十二年憲法發布式を宮中で擧げられた時、各府縣會議長に參列をさすといふので召集された處で、參列でなく　陪觀さすといふ沙汰なのに議長

運は大に激昂し『態々呼んでおいて陪觀なぞとは怪しからぬ』と其節に抗議を申込んだ揚句、最初の通り參列することになつたが、此躍起の張本人は大阪の大三輪長兵衛と石田の二人であつたといへば、兵庫縣會議長たる彼は何しろ當時の逸物であつたに違ひない

▲議會の名物男　彼が本來の出立は改進黨であるが、愛國公黨の時代から自由黨系の人となり、議會が創まつてから直ちに代議士に選ばれ、第一議會より第二十三議會まで共間多少議席を空ふしたことはあるが約二十年間議院生活を送つた、而して其間自由黨より憲政黨を經て政友會に籍を置き曾ては豫算委員長にまで選ばれたが明治三十年薩派内閣が進歩黨と提携を絶つて自由黨員の誘拐に努めた時、彼は多年の苦節を變して高島將軍の門下に趨り其報酬として富山縣知事の椅子を贏得たが、是が抑も彼の政界に躓づき始めた第一歩であつた

▲末路振はず　彼は由來尊大で山氣に富める人物であつたが、一躍して知事になつ

たといふので富山では中々威張つたものださうだ。近く此地で令尹となつたもので記者の記憶してをるのは、安藤謙介、阿部浩、金尾稜巖、檜垣直右、小倉久、李家隆介抔があるが其多くは平民的の人物であるのに、石田ばかりは李家と好一對の氣取屋で殿樣知事の綽名があつたと今でも縣の人は思ひ出したやうに話をしておる、其知事も僅か一年位で罷め又た元の浪人に立返り四十一年の總選擧までは辛ふじて其地位を保つたが、曾ては彼の四天王たりし安藤新太郎(現代議士)一柳未德、宮崎新藏等の面々も彼が政治上の操守常なきに愛想を盡かして離散すると共に、養子某の失敗のために鄕里から退轉するの已むを得ざるに至つた斯て彼は政治界から葬られたことになつたのである

▲世の罪か己の罪か　爾來彼の消息に就ては鄕友と雖も知るものがない、隨つて確かな事は分らぬが其養子は家を提げて大阪に出で今は宿屋を營業とし、彼は別によしあしを何と浪華の町はづれ桃山邊に蟄居し細き煙を立てゝをるといふ事だけ分つ

てゐる、是れ世の罪か將た己が罪か、兎に角南風競はず其晩年の蕭條たるを見るに附け人間牢世の功名宛がら蜉蝣の一期に似たるものなるを思ひ彼の末路に一掬同情の涙を濺がざるを得ない

曲木如長

後の雁が先になり支那の革命動亂は疾の昔に濟んだけれど、伊土戰爭は今に煮切らずに續いておる、併しダーダネル海峽が何うならうと、トリポリの綠地が占領されやうがされまいが、夫は向河岸の火事として、唯だ我國に伊太利の文物を輸入した先覺者に曲木如長があつたことを忘れてはならぬ

▲伊太利の紹介者　此程鶴見農商務省商品陳列館長が羅馬博覽會から歸つて頻りと伊太利通を振廻はしておるが、同じ伊太利自慢なら曲木に一目置かねばならぬ、曲木は今や辯護士と特許辨理士を兼ね傍ら東京府會議員といふ肩書を有つておるだけ

で格別振つては居ないが、明治十六年頃歐羅巴から歸つて司法省參事官、東京控訴院檢事、司法大臣秘書官等に歷任し新進の佛蘭西學者として鳴らした時といふものは中々素晴らしいものであつた、而かも其所謂佛蘭西學者としての手腕も相當に認められたが、更に彼が伊太利の法律文物を始めて我國に紹介し法典の飜譯に、伊學協會の設立に熱心最も努めた功勞は特筆大書せねばならぬ

▲彼は語る　『自分の口から言ふのもおかしいが、伊太利のことなら少しは自慢しても良いでせう、日本に於ける最初の字典も自分で拵へましたし、刑法、刑事訴訟法裁判所構成法も飜譯するし又た彼のバラスノストロ博士を雇聘したのも自分の献策でした、元來伊太利の法律は獨佛兩國の粹を集めたもので中々進歩しておる處があるから現行の新刑法なども範を伊太利に採つたる處があり、又た議院法も參考にしてる點が多いのです、伊太利と云へば日本では餘程誤解して貧弱國のやうに思つて居るのですが、どふして財政はなか〳〵に整理して今では英佛獨に次げる强國で、

露國抔よりか上に位しておるでせう、日本の財政も伊太利みたやうな手腕家が現はれて局に當つたなら大に整理し制度調査も甘く行けるでせうが目下の有樣では駄目ですなあ』とは彼が語る懷舊談の一節である

▲過去の曲木　彼は純粹の江戸ッ兒で、明治五年大學南校に入り九年に留學生として歐洲に遊び佛伊兩國で研鑽の功を積み、十五年に外務書記生となつて露國に在勤し、十六年に歸朝して參事院の御用掛から司法省に入つて大に其腕を揮ひ、二十八年に辭職して民間に下り辯護士を開業し今も門戸はなか〳〵振つて居るが、若し辛抱して司法部内に活動して居たなら此頃は相當の地位を占めてをるのだろふ、併し初對面の記者が打見た處、彼は多少狷介な風があつて八方美人で世を渡ることは出來ない人物らしいから情實纏綿たる官界の游泳は其得意でないのだらう、左りとて政黨にでも頭を突込んで一旗揚げて見やうといふ程の野心もなく、至極功名には恬淡で唯だ子孫の爲に多少の美田でも贐ふといふ位のことが、關の山だらう、人物は

率直で而して無愛想なやうで案外如才なく蠻カラむき出しの處が氣に入つた、彼は本年確か五十四歳で今尙ほ活動の舞臺に立つて居るから決して今昔の人に數へることは出來ぬが、茲には唯だ彼の過去に於て斯ふいふ功績のあつたといふ事を紹介しておく、今や地中海には狂瀾湧き長靴形の國は其足を伸ばして對岸の地を蹂躙せんとして居る、彼は更に羅馬の古都に遊んで伊太利の新しき文物を東洋に輸入せんとする意氣なきや否や

井原昂

『紫溟の客、綠林の賊、終身の役、千里の謫、赭衣纍々玉か石か、慘として相怒み猜として相食む、堪へず乾坤の穿きに、唯願ふ歲月の積むを、寒風雪を吹て窓隙に入る、兵兒賊兒髯毛の磔、嗚呼衣壞れ虱生じ肉瘠す、美人の魂英雄の魂魄や何の處が恍として繹ね難し』とは秋田の獄に於ける岩神昂の役囚の詩なり

▲當年の風雲兒　井原昂の前身たる岩神昂とは抑も何者ぞ、彼れは土佐の勤王家たる片われに生れ、一たびは身を官途に置きしも、當時戰雲鎭西の空に湧いて天下の機運將さに動搖せんとするを看取せし彼は血湧き肉躍り即ち劒を按じて起ち陸奥宗光、林有造、大江卓等と相呼應し大阪鎭臺の虛を衝ひて一擧京師に迫らんとする陰謀を企て、先づ浪華に出で林が上海より銃器を購入し來るを手緩しとて自から荆軻を以て任じ私かに匕首を懷にして大久保利通外二三の權臣を暗殺せんと畫策最も努め其間板垣、後藤等の間に周旋して機會漸く熟せんとするに臨んで政府の密偵たる林直庸、川村矯一郎等に誤られ、所謂土佐派の運動全く失敗に歸し彼は十一年六月大阪にて捕縛され、越へて八月東京臨時裁判所に於て玉乃世履の審問の下に林大江、藤(好靜)等と共に十年の禁獄に處せられたり、當時彼等が流星光底長蛇を逸したる遺恨思ふべし、彼また詩あり曰く『何んぞ況んや同じく是れ縲絏の人、羽城の風雪萬酸辛』と、悽愴の情覺えず襟を濕はすものあり

▲脫兎少女となる　彼は土佐派と紀州派との連鎖をなし夙に陸奥福堂に重きを置かる、福堂曾て曰く大江は謀士にして岩神は死士なりと、以て彼が當年如何に矯激の徒なりしかを知るに足るべし、而かも彼の前半生が斯かる波瀾淘湧として怒濤岸を嚙むの慨ありしに比し、其後半生の萬頃一碧鏡を拭ふが如く平凡なるは單ト他の怪しむ處たるのみならず、彼自ら其運命の奇なるに驚かざるを得ざるべし、彼が山を拔く力も所謂羽城の風雪に折れて、意氣全く銷磨し盡せるにや、其出獄したる後、幾許もなくして再び官界の人となり、先づ群馬縣の一郡長に任せられ、次で千葉縣の某郡長となり、爾來各地方の書記官に昇進し島根縣知事を最後の椅子として其職を去り、今は七十三歲の高齡を牛込矢來の里に送り浮世の榮辱を餘所に閑日月を樂しめり、思ふに彼が同志にして終に曾ては大臣となり實業界に覇を稱したる者あるに較べて彼が一知事に終りたるは敢て誇るに足らざるも、聖世に處して天壽を完ふし得べき彼はまた悔なしといふべし、今試みに『紫溟の客』の吟詠と作者其人とを引

放して瞑想せよ、晩年明治政府の一循吏たりし人の口よりして斯の如き慷慨淋漓たる孤憤の迸り出でんとは誰か思ひ設けざらん

▲兄弟趣を同ふす　彼の弟に古澤迂郎(後に滋)あり、曾ては大阪立憲政黨の領袖となり、又た自由新聞の記者となり、ルーソーの亞流を學びて極端なる急進黨たりし人の晩年憲政を呪ひ藩閥を庇護して極端なる官僚主義者となりたるに似て、兄弟共に波瀾多き生涯を送りしこそ奇なれ、彼の一子遜は田中前宮相の家に養はれ佛國大學を卒業して博士の學位を有し曾て代議士たりしことあり

細川瀏

井原昂を紹介した序に、其從弟で嚶鳴社時代の秀才であつた細川瀏を茲に拈出したい、彼はまた海南の出身で詩人として知られたる土居香國は其義弟で、曾て遜逸仙の秘書であつた池斷水樓主人は血を分けた實弟である、早い頃慶應義塾に學んで、

草間時福と共に伊豫の英學校に教鞭を執り、夫から鄉里に歸つて立志社に投じ植木枝盛等と論壇の雄を以て稱せられた人であつた

▲當年文壇の雄　其後河野敏謙に知られ文部省に奏任御用掛として出仕し、島田三郎等と肩を並べて腕を揮つておる內に、福地源一郎の爲に其才學を認められて東京日々新聞に入り大に得意の健筆を揮つたものだ、當時彼は中央の文壇に重きをなし噴々として其名聲を傳へられたが、終には福地の養女を其配偶として娶るまでに信任を得て彼の盛名は此時を以て其絕頂に達した

▲轉じて教界に入る　彼にして依然引續いて政界の人であつたなら、無論相當の地位を得て花を咲かしたのであろうが、明治十八年頃彼は如何なる天機に觸れたるにや、基督教の信者となつて見事に政界を去つてしまつた、當時土佐の政治家にして信仰の生活に入つたものは彼一人のみでない、片岡健吉を始めとし西原清東、山田平左衛門、武市安哉、細川義昌(共に代議士たりし人)安藝喜代香(前縣會議長)阪本

直寛（前十陽新聞主筆）土居勝郎（現北海道會議長）關田可通（前貴族院議員）山本正心（前縣參事會員）等自由黨の重なる連中は相率ゐ基督教に入つたものだが、彼も亦此風潮に乘じて教界の人となつたのである

▲豪い人物　彼れは信者となると共に一生を宣教師にて送るべく決心の臍を固めて最初に淺草教會を牧し、夫から高知、横濱を始め各地に傳道をなし、久しく臺灣にも駐在して布教に從事しておつたが、此兩三年前から山口縣山口町の教會に牧師として一心不亂に天國の道を説いておる、本文の記者の如き十五六歳の頃鄕里に於て度々彼の門に出入し其秀麗なる風貌に接し又た其輕妙流るゝが如き辯舌を耳にする毎に幼な心に彼は實に豪い人物だと思つたことがある

▲雪中の梅　彼の性格を以てして所謂世捨人となることさへ既に奇とすべしであるが、更に二十年來始終田舍廻りの役者となつて中央の教壇に名を成さんとする野心を放擲して居るのは益々奇とすべきもので、夫に附ても彼の信仰の堅實にして其敬

虔の志が如何に厚いかゞ知らるゝので、之に對しては滿幅の敬意を拂はねばならぬ、思ふに名走利奔の今日に於て其信仰を維持することは餘程意志の鞏固なる人でなくては出來ない業である金森通倫は如何、横井時雄は如何、押川方義、岩本善治は今果して何の狀ぞ、此を以て彼に對す、彼は雪中の梅か、泥中の蓮か、今や滄浪の水は濁つて政界の腐敗底止する處を知らず吾々俗人でさへ眉を顰めざるを得ないが、況して高潔身を持して世外に超脱せる彼は其今昔を較べて無限の感慨に禁へないものがあるだろふ彼れ本年五十七歳で未だ活動すべき春秋を剩しておるが、此樣な奇才を地方に埋沒さして置くのは惜しいものだ、其多年蘊蓄したる宗教上の素養を以てして再び中央の舞臺に乘出し靈界に一花咲かせんことを切に期待するのである。

朝倉外茂鐵

曾て尾崎紅葉の『金色夜叉』を讀んで、繪にある樣な優男の間貫一が一たび心機の轉化に依つて高利貸となりたる條に至り其實際にあるべからざることを思うて是れ單に小說なりと信じて居たが、此頃朝倉外茂鐵の近況を聞くに及んで端なくも其間貫一を思ひ出さゝるを得ない

▲順風に帆を揚ぐ　朝倉といへば是も鶯鳴かせた中の一人である、試みに彼が明治二十二年赤門を出た時の同窓の顏觸を見よ、曰く犬塚勝太郎、曰く內田定槌、曰く岸清一、曰く松井慶四郎、曰く清水市太郎、曰く武田千代三郎、曰く渡邊千代三郎、曰く石原健三といふやうな今は可なりに幅を利してをる連中だが、彼も是れに漏れず、前途洋々たる希望の光に滿ちて社會へ乘り出した、而かも彼は一緒に卒業免狀を貰つた者等が吾も〳〵と役人になるのに引換へて、自分は五斗米に腰を屈する

ことを屑しとせず實業界の大立物の後援を得て鍛冶橋外に辯護士事務所を開いて花々しく門戸を張つた其時は東京の法曹社會では中々の人氣で、殊に朝倉の海商法と來ては東京法學院、早稻田專門學校、高等商業學校等の講壇を賑はしたものだ、而して彼は第一銀行及び淺野總一郎の法律顧問となつて活動する傍ら、明治廿九年には東京市政の舞臺に出て市參事會員から初期の市助役に選ばれ、尙ほ選擧法改正全國各市聯合會理事長、言文一致協會長として其腕を揮つたが順風に帆を揚げた彼は三十一年の總選擧には打つて出て首尾克く代議士の月桂冠を獲た抔トン〳〵拍子に進んだ

▲滿は損を招く　調子に乘つて遣り過したのが失敗の基となり、彼の市の汚物問題に關係して中島又五郎等と運命を共にしたのが抑々彼が社會から葬らるゝ最初の階段となつた、而かも再び友人青木盤雄（時の京都府書記官）等と例の敎科書事件にも掌はつて醜名を傳へられた爲め左しもに全盛を極めた彼も水を失なつた枯魚の如く

になつて天涯地角其身を置くに處なく、終に朝鮮三界まで落延びたのは壽永の秋も思はれて坐ろに盛衰掌を反すよりも速なることを知られた

▲忽ち●●●●●●●●●海峽を渡つてからの彼の態度はガラリと一變して、當年新柳二橋に湯水の如く財を散したのも今は夢か、彼は忽ちにして小金貸となつた、と一口に言つては分るまいが、彼は馬關を辭して孤影茫然、先づ釜山の宿屋にウツラ〳〵其日を送る内、仁川の呉服店末松某といふに知られて同地に至り其顧問に雇はれ、傍ら土地賣買金錢貸附の仕事を受持つて遣つておる間に、段々呼吸を覺えて約一年の後には獨立して金貸業を始め今では二三萬圓位のものを溜込み傍ら再製鹽製造所を經營してをるため仁川紳士錄中に加へらるゝ事とはなつたが、生業が生業なる上に世間の公共事業には一切關係せず全くの金溜一方となり濟せるとは人の身の上も變れば變るものである、左れど人はパンのみにて活くるものにあらず、彼は已むなく今金貸となつてをるとはいへ、半夜靜かに公人たりし過去を顧み又た其同窓

の榮達を思ふ時は、悔恨の情に禁へないものがあるだらう、夫とも彼は穢なく儲けて清く費ふ考で捲土重來を夢んでをるであらうか、彼たるもの其汚名を雪ぐためには最後の活動を試むることを忘れてはならぬ

鈴木藤三郎

製糖に甘き味を占め、醬油に辛き汁を嘗めたる鈴木藤三郎は當代事業界に於ける苦勞人なり

▲●●●●成功か失敗か、得意か落魄か、今之を是非するは時尚ほ早しと雖も、試みに五十年來の彼の歷史を見るに波瀾重疊、峯巒起伏、其景象の變化應接に遑あらざるものあり、況んや時に發明に興り時に發明に亡びて其成敗利鈍の跡容易に分明ならざる恰かも煙霞淡抹の間に朦朧たる月華を望む如く人をして幾度か目を拭はしむるものあるに於てをや、知らず彼は遂に過去の人か將た未來の人か、且つ問ふ